
親馬鹿花妖怪

にんぽっぽ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親馬鹿花妖怪

【Zコード】

Z2122V

【作者名】

にんぽっぽ

【あらすじ】

最凶と恐れられるあの『風見幽香』に隠し子がいた！？

親馬鹿妖怪と、瓜二つの娘が繰り広げる物語。

基本ユルいですが、たまにシリアルになります。

肩の力を抜いて、お楽しみいただけたと幸いです。

オリキャラは娘だけです。

性格の歪んだ、あるいは捻じ曲がったキャラが多数出でます。ご

注意下さい。

arcadia様にて連載し、完結した処女作リメイク改訂版となります。
オリキヤラの性格、物語展開がかなり変わります。予めご了承ください。

第一話 向日葵の娘

どんよりとした曇り空。

今にも雨が降り出してきそうな、陰鬱な天気。

チェック柄の服に身を包んだ少女は、とある家の前に立ち尽くしていた。

どうしてここにいるのかは良く分からぬ。

だが、ここに来なければいけないという気がしたのだ。

まるで導かれるかのように、ここまで来ることが出来た。

自分はこの家の場所など知る由もないのに。

そもそも自分が何者なのかも良く分かっていない。

いつ、どこで、誰が、何のために自分を生み出したのか。
とんと見当もつかない。

分かっているのは自分の名前だけ。

勿論、誰が名づけてくれたのかも良く分からぬ。

「…………」

何回かノックをしてみる。

暫く待つたが返事はない。

留守なのかもしれない。

念のためにもう一度ノックをする。

やはり返事はない。

どうしたものだらうか。少女は考え込む。

腕を組んで、軽く首を捻る。

引き返そうか。少女は来た道を引き返そうとする。
だが、戻る場所などない。

待っている者もいない。少女にはそんな者は存在しないのだから。

何度もドアまでの道を往来する。

数十秒悩んだ後、一度だけ頷いて、ノブに躊躇いがちに手をかけた。

鍵は掛かつていなかつた。

「今年も見事に咲いたわ。本当に素敵ね。
花達もとても嬉しそうに咲いているもの」

一面に広がる黄色の大地。

空には燐々と照りつける黄色い光。

青空と入道雲。

今年も見事に咲き誇る、黄金色の花々を見渡した後、私は満足げに目を細める。

能力を使えば咲かせるぐらい訳は無いが、やはり必要以上に手を掛けるのは美しくない。

自然が一番など安っぽい台詞ではあるが、私はそう思うのだ。
豊かな土、太陽の光、それに水。これさえあれば十分である。

吹き抜ける風を受けた後、私は髪を搔き上げる。

そして、隣に立つ『可憐な小さな花』の肩にそっと手を乗せる。

先程花の育成には、土、光、水の3種類。これさえあれば十分だと私は言ったかもしれない。

それは分かっていても手をかけまくりたい、むしろ寝食忘れて世話をしたい花が私にはあるのだ。

目に入れても痛くない、むしろ入れたいくらいの愛らしさ。

「ねえ、そう思わない？ 貴方が心を込めて、丁寧にお世話をしてくれたお陰よ」

「はい母様。本当に綺麗です」

「もつと誇りなさい。貴方の成し遂げた立派な成果よ。」

幻想郷に喧伝しても構わない程の見事な出来栄え。三ツ星確定よ

「いえ、まだ十分ではありません。私が育てたのはほんの一握り。

後は母様が

「

その言葉を遮つて、私は可愛らしい頭にそつと手を置く。

「全く。謙遜なんて必要ないのに。

私達は家族なんだから。もっと子供らしく振舞いなさい」

私は努めて笑顔で話しかける。

そして、いそいそと弁当をバスケットから取り出し、シートの上に展開していく。

一段と気合を入れて作つてしまつた渾身のランチ。驚きの重箱仕様である。

玉子焼き、ハンバーグ、タマさんワインナー、おいなりさん、うさぎ型のリングなどなど。

朝早く起きて調理した甲斐もあり、大満足の出来栄えだ。シートに広がる作品を前に、驚きの顔を浮かべる。

私は心の中でガツツポーズをとる。

いつも冷静なこの娘が、驚きの感情を見せるのは非常に珍しい。誰に似たのか、冷静沈着、超生真面目な性格に育つてしまつた。

それはともかくとして。

私は祝いの言葉を口にする。

何しろ今日は私たちにとって特別な日なのだから。

そう、とっても大事な記念日なのだ。

「おめでとう美咲。今日は貴方の誕生日。
そして私と貴方が、親子になつた日もある」

「 はい、母様」

「誕生日おめでとう、美咲」

小さく頷く娘を見て、私は軽く抱きしめる。

「ありがとうございます母様、嬉しいです」

そう今日は我が愛しの娘、風見美咲の誕生日なのだ。
正確には少し違うのだが、細かいことはどうでも良い。

なんといつ素晴らしい日なのだろうか。幻想郷の記念日として大々的にお祝いしても良いぐらいだ。

外界では偉い人の誕生日が、休日になるという制度があるらしい。
こちらにも早速導入するように、妖怪の賢者達に申し入れてみよう。

『風見幽香の娘 美咲の素晴らしい誕生日』

是非カレンダーに載せたいものだ。

というより作つてしまおう。そう決めた。

作ると心の中で思つたなら、行動を起こさなければならない。。

カレンダー「云々は」までにするとして。

私が用意した、誕生日プレゼントの一つ「は」の景色だ。

一面に広がる色とりどりの華麗な絨毯。

美咲が手掛けた向日葵畑も勿論ある。それを取り囲むよつこ、私が花々を添えてみた。

美咲の表情を見た限りでは、かなり喜んでくれているようだ。
何ヶ月も構想を練った甲斐があつたといつものだ。

「後でゆっくり見てまわるとしましょう。

花達もきっと喜ぶわ。貴方が来ると、とっても嬉しそうにするのよ

「はい、母様」

後で花冠を作つてあげるとしよう。

ちなみに他のプレゼントも一杯用意してある。
某人形遣いにお願いして強引に作らせた、とっても可愛らしいお人形。

某ガラクタ屋からパクつてきた洒落た万華鏡。

その他にも沢山用意してある。

話が多少脱線してしまつたが美咲は正真正銘、誰がなんと言おうが
私の娘である。

細かいことは割愛するが、種族としては妖怪となるだろうか。
本当の所は、私も分からぬ。だがそんなことはどうでも良い。

容姿は私をそのまま小さくしたような愛らしさ。歳は花も恥じらう
歳ということにした。

実年齢は分からぬが、それもどうでも良い話ではないか。
ああ実に可愛いらしい。もうダメ妖怪と言われても構わない。

カリスマ溢れる超クールな母親を目指していた私は、超スバルタ教
育を施してきたつもりだ。

一人でお花のお世話をさせたり、一人でお風呂に入らせたり、一人でトイレに行かせたり。

涙をぐつと堪えて厳しいムチを振るつてきた。当然陰から見張つてはいたが。

その甲斐あつて何処に出しても恥ずかしくない、可憐なお嬢様として立派に育つてくれた。

ちょっと無表情で、感情を外に出すのが苦手なのが珠に瑕だが、全然問題ない。

むしろ悪い虫が付かない分好ましいぐらいである。

美咲は私に似て『穏やか』で『優しい』心を持つていて、花畠で妖精たちといつの間にか仲良く遊ぶようになつていて、まあ遊ぶというより、美咲に妖精たちが纏わりついているというのが正しいのだが。

ちなみに私は妖精と遊んだりしたことはない。なんでなのかは未だに分からない。

一応母親として、友達には挨拶するべきだろうと判断した私は挨拶をしようと笑顔で近づいたら、妖精たちが泣き叫びながら散り散りに去つていったこともあった。

こんな感じで。

「母様。その笑顔では誰でも逃げ出すると思ひます」

「や、そつかしら?」

「口は笑つてゐるんですが、眼が笑つていません。むしろ殺氣が溢れ出しています。

もう少し笑顔の練習をした方が

「

「別に良いのよ。私は貴方をえてくれれば良いのだから。だから私には笑顔の練習なんて必要ないのよ」

などといった事があり、少し凹んだりしたこともあったが、健やかに平和に過ごしててきたのだ。

誰にも関わらず、私達だけの幸せな時間。絶対に誰にも邪魔させない。

この幸せがいつまでも、いつまでも続けば良い。私はそう思えていた。

お皿を食べ終わり、特に田的もなくまつたりとしていた私達。その空気を破り、突如として娘からお願い事をされてしまつ。いつかそういうこともあるだらうと覚悟はしていたが、まさか今日だとは。

「そろそろ私もこの幻想郷を見て回りたい。

飛ぶ練習も一杯してきました。お願いです母様

「……と、突然ね。一体どうしたとこうの?..」

「母様みたいに弾幕ごっこもやつてみたい。もつと私も強くなりたい。母様みたいに」

上田遣いにお願いされてしまつ。

この娘が私にお願いするところのは、これが始めてかもしれない。

「だ、弾幕ごっこも? そ、それはどうかしら。

それに貴方が強くなる必要なんて、どこにも」

「駄目ですか？」

「そ、そうね。少し考えるから、ちょっとだけ待って頂戴。色々ヒシリコレーションしてみないと」

アルバムに残しておきたいシーンである。

今日は美咲が私に初めておねだりをした日になつた。心の記念日に追加だ。

『幽香心のアルバム』に今の光景を残しつつ、私は先程の件について考える。

黄金色の脳細胞が動き出す。最大全速のフル稼働だ。

問題点はいくつあるが、一つ目は私に子供がいることを誰にも教えていないのだ。

花畠の妖精たちは3日立てば細かい事を忘れてしまつようで、楽しく遊んだという記憶しかないらしい。

よつて、誰かに漏れでいるということは考えらにくらい。

人間たちは人間友好度『最悪』の妖怪のテリトリーになど近づいて来ないし。

妖怪たちは私の発する殺氣を感じて、あまり近づいてこない。

意図的に近づけないよう、私が定期的に行っている『虫除け』みたいな物である。

そんな私が、娘を連れて颶爽と登場し『私の娘です。今後とも宜しく』などと言つたら、

『どこで攫つて来たんだこの凶悪妖怪!』などと濡れ衣を着せられ

かねない。

そんな展開になつたら、思わず相手の顔を何回も何回も撫でてしまいそうになるだろう。

首の骨が思いつきりへし折れるくらい』。

厄介そなのは隙間、天狗、貧乏巫女、人里の教師といつたところか。

弾幕ごっこではなくリアルバトルに突入してしまつ可能性が非常に高い。

いわゆるルール無用のデスマッチと言つ奴だ。勝つのは勿論私である。

2つ目は何にでも首を突っ込んで『白黒魔法使い』と出合つ可能性が非常に高いことだ。

万が一にもあの馬鹿に美咲が懷いてしまい、『だぜだぜ』言つようになつたら恐ろしい。

本当に恐ろしい。想像しただけで鳥肌が立つ。

『ようおふくろー! 今日も絶好調だつたぜ』

とマスター・パークを意味もなくそこ中に撃ちまくら、

『落ち込んだりもしたけれど、ワタシは元気だぜ!』

などと叫んで簫やらデッキブラシに乗つて、火車の猫と共に幻想郷を駆け回るのだ。

私は立ち眩みを起こして、態勢を崩してしまつ。

凄まじい悪夢を見てしまつた。

慌てて私の身体を支える我が娘。本当に優しい子だ。

「母様?」

「だ、大丈夫よ。ちょっとだけ眩暈が。し、心配ないわ。『めんなさいね』

思わず卒倒しそうになってしまった。美咲が不良になってしまった！ と意味もなく絶叫するところだった。

考えれば考えるほど良くないことばかり思いついでしまう。正直デメリットばかりだが私は、娘の願いを聞き届ける以外に道はない。なぜなら私は。

「……分かった。貴方のお願い聞いてあげる。但し、悪い魔法使いには近づいちゃダメよ。特に白黒の邪悪な魔法使いにはね。約束よ

「ありがとうございます、母様」

特に笑顔になることもなく、淡々と礼を述べる美咲。だが私には分かる。この顔は機嫌が良い時の顔だ。ほんの些細な違いだが、私には見抜くことが出来るのだ。だつて母親だから。

「気はとーつても進まないけど、弾幕ごっここの練習も少しだけやりましょう。

ほんの少しだけね。ちょっと噛む程度にね。」

「ありがとうございます。一生懸命練習します。

そして、いつの日か、必ず母様を越えて見せます「

不穏な言葉を聴いたような気がしたが、敢えて聞き流す。私とこの娘が戦うなんて事は絶対にないのだから。

私は美咲の身体をおもむろに抱き寄せる。
為すがままにされる娘。

「さあ、食べ終わったら散歩の続きをしましちゃう。
沢山の思い出を作りましちゃうね」

「はい、母様」

どこか照れくさそうに田を背ける美咲。
私は満面の笑みで頭を軽く撫で続ける。

この娘が喜ぶ姿を見れるのならば、私の事など大した問題ではない。
美咲に降りかかる火の粉は、全て私が打ち払えれば良いのだから。
私は心のアルバムに、新しく増えた一枚を納める。
今度は本当のアルバムを作ろうかと、今更ながら思案するのだった。

・ 風見幽香
花を操る程度の能力

第一話 向日葵の娘（後書き）

最初に書いた小説を、気晴らしで改訂してみることにしました。
もうひとつのお品が、少し行き詰ってしまったこともあります、
基礎に立ち返る事が目的でもあります。

文章はテンポ重視で、軽くいきたいと思います。
こちらはひつそりこつそりと続けていきます。

第一話 博麗の巫女

紅い液体が口から流れ落ちる。

その瑞々しい肉体に欲望の儘に齧り付く。

何度も何度も、原型が留まらないほどに牙を突き立てる。

滴り落ちる液体が、もう取り返しが付かない事を表していた。

大事に大事に育ててきた結果がこの有様だ。

私の大事な果実は、こうして私に蹂躪される為だけに生まれてきたのだ。

だから、こうなることは間違いないじゃない。運命だつたのだから。

なぜか、私は空虚なモノを感じて空を見上げた。

「今日も私のポエムは冴え渡るわ。動き出したペンが止まらないもの。

小説家にでもなろうかしらね」

収穫したばかりのトマトを齧りながら、ペンをぐるぐる回す。

ペン回しもそうだが、私の趣味の一つが日記を付けることである。

日常生活にアクセントをつけたクールな文章を綴るのが、私の密かな趣味なのだ。

ただそのままに、『娘が収穫した赤く熟れたトマトをおいしく食べました。まる』

ではなんとも味気ないではないか。分かりやすいけれど。

ちなみに絵日記も試してみたが、なんというか前衛的な抽象画になつてしまつので断念した。

娘と私を書いたつもりが、おぞましい『よくわからないなにか』を描き上げてしまったのだ。

そのノートからは何やら妖力を感じたので、念のために博麗神社の賽銭箱に投げ入れておいた。

困ったときの巫女頼みだ。普段だらけていたのだからお払いぐらいはするべきだろう。

賽銭箱からはキシャーという雄叫びが聞こえたが、私は気にしない事にした。

「ふーそろそろ寝るとしまじょ。明日はいろいろと大変でしちゃうからね。」

日課を終え軽く伸びをする。

娘の眠るベッドに入り、ゆっくりと目を閉じる。いよいよ明日は、娘を連れて初めてのお出掛けだ。もしかしたら一騒動あるかも知れないかと思つと興奮してなかなか寝付けなかつた。

「おはようございます。母様」

「……おはよう美咲。死にたくないような清々しい朝ね

「とりあえず、顔を洗つた方が良いと思います」

「そうね。そうするわ

……結局全然眠れなかつた。

ふらーとゾンビのように立ち上がり、洗面所で身だしなみを整える。鏡を見たときは、あまりの目つきの悪さに自分でも驚いた。きっと娘も驚いたことだろう。まるで凶悪妖怪である。視線だけで人が殺せそうな程の。

よろめく身体で台所に向かい、朝食の準備をする。

今日の朝食はトーストと、野菜サラダ。それにスープだ。軽くいくことを決め、ささつと調理を行う。

出来立ての朝食を食べながら、注意することを再確認する。外は敵が一杯だから、守らなければならぬことが沢山あるのだ。

「昨日も言つたけれど、今日出かけるのは博麗神社よ。そこには幻想郷の異変解決を担当する巫女がいるわ。

……万が一戦闘になつたら、貴方はすぐに逃げなさい。いいわね？」

あぐびを堪えながら凜とした顔を作る。カリスマを維持するのも大変なのだ。

「博麗の巫女は強いんですか？」

「口よりも先に手が出るタイプよ。異変解決に定評のある、幻想郷において最強の人間でしょうね。

妖怪退治の専門家。関わりたくない人間の一位ね」

貧乏で賛銭が少ないことに定評のある博麗靈夢でもある。ひもじい顔を眺めると、とても良い気分なのだがそれはここでは言えない。

私のイメージが崩れてしまう。

「母様とではどちらが強いのですか？」

難しい質問をしてくる娘。

巫女は幻想郷の要である。それを殺すような真似は出来ない。何より、今のこの世界ではそのような事は自殺行為である。よつて、手加減に手加減を重ねなければならない『弾幕ごっこ』ぐらいでしか勝負が出来ない。

「そうねえ。互角ぐらいいじやないかしら。

本気を出したら、人間如きが私に叶うわけがない。

でも今の流行は弾幕ごっこだからね。靈夢はスペルカードでは凄腕よ

勿論、博麗の巫女はそんなに甘い存在じやない。

本気の殺し合いとなつたら、どう転ぶかは分からぬ。だが、娘の前なので多少の誇張は許されるだろ？

「そりなんですか。お会いするのが楽しみです」

「余り期待すると、その落差にがっかりするわよ。

貴方の考えてる巫女像の、半分で丁度良いくらいね

「分かりました」

今日は博麗神社なんか行かないで、湖あたりへのピクニックに変更しようか。

どうして貧乏巫女に、娘が大事に育てた野菜をプレゼントしなければならないのだ。

一応手土産として、畑で収穫したばかりの野菜を用意してあるのだが……。

私は必要ないと言つたのだが、気配りの出来る美咲がどうしてもと言つので、

仕方なく持つて行くことにしたのである。

美咲は野菜を育てる能力があるらしく、少し教えただけですぐに覚えてしまつた。

その上味も抜群で、私も思わず唸つてしまつ出来だ。

これなら来るべき『至高』との対決にも勝てるといつのこと。

瑞々しい夏野菜達が泣いているわ……。

私が心中で葛藤を繰り広げている間に、テーブルの上は綺麗に片付けられていた。

流石は私の娘。片づけまで完璧だ。

私はあんまり食べてなかつたような気もするけど、せつと気のせいだ。

「そろそろ出かけましょっ母様。予定時間からかなり押しています」

「心配いらないわ。私が手を繋いで全力で飛ばせば問題ない。もし良かつたら抱っこして行きましょっか？」

「いえ、大丈夫です」

即座にお断りされてしまった。

もうそういうのが恥ずかしい年なのだろうか。
少し寂しい。

「そ、そつ？ それなら良いけど。

じゃあ準備がよければ向かいましょう」

「はい、母様」

娘は妖力は十分にあるのだが、まだ上手くコントロールできていない。

いくら素質があつても、経験を積まなければ無意味である。
弾幕も不味いながらも、私の教える甲斐もあり、多少は張ることが出来るようになった。

まあ鬪わせる気など全くないので、人間やら下級妖怪相手に自衛できる程度で構わない。

ところが私が目を光らせている限り、そんな心配は一切必要がない。
虫一匹近づけないと、断言できるから。

・博麗神社

人里から離れた山奥に存在する、幻想郷と下界との境界に位置する

要ともいえる存在。

それがこの博麗神社。

私が言わせれば、寂れた、貧乏くさい、ただのほつたて小屋という認識なのだが。

娘と手を繋いで境内に降り立つ。

「ここが博麗神社よ。貧乏くさい建物でがつかりしたでしょ？」

「いえ、なんだか厳かな空気を感じます。こいつ重圧感みたいなものが」

「それを感じ取るとは流石は我が娘ね。

貧乏くさいけど、そこそこに重要なだから一応覚えておいてね」

「…………」

ブラブラと辺りを見渡すが、巫女は見当たらない。
どうせいつものように惰眠を貪っているのだろう。
相変わらずのだらけ巫女だ。娘の爪の垢でも煎じて飲ませてやりたいところだ。

そうだ。

丁度良いので例のブツをもう一冊始末させてもらひことにしよう。
上達を目指して書いた絵日記2である。またちょっと妖力を感じる
ので困っていたところだ。
本はブルブルと震えながら、今にも具現化しそうな気配を漂わせて
いる。

「じゃあお賽銭がわりにコレをいれておきましょ」

「つづく時に大事なのは、気持ちだからね」

笑顔とともにソレを賽銭箱にいれようとしたその瞬間。

「ちょっと！ そんな呪われたもの賽銭箱にいれんじゃないわよ！
また参拝客が減るでしょ！」

馬鹿でかい声と共に腋巫女が現れた。

胸は慎ましいのに、声だけは大きい女だ。

そんな視線を感じ取つたのか、敵意を露にして私を睨みつけてくる
靈夢。

まるで野犬のよう。どういった育ち方をしたのだろう。親の顔を見て
みたいものだ。

「つむさいわね。そんなに怒鳴らなくても聞こえているわ

「黙りなさい。というか、この前の呪い絵もアンタの仕業だったの
ね。

なに？ 私への挑戦状かしら。受けた立つわよ」の糞妖怪！

札を取り出して、臨戦態勢に入る靈夢。
平和的に話していたのに、おかしな話である。

「違うわよ。ちょっと妖力を感じたからお払いしてもらおうと思つ
て。

お払いも貴方の立派な仕事でしょう？」

「ふざけんな！ ちょっとどうか忌しそぎて眩暈がしそうだつた
わ。

具現化しようとして、調伏するのにどれだけ手間取ったと思つてんのよー！」

青筋を立てて怒る巫女。友好的に会話していたのになぜか険悪なムードで。

このままではいけないわね。子供が見ている前ですもの。まずは話を逸らしてみよ。

「そんなにいきり立つてはお話もできないわ。お茶でも飲んで落ち着きましょう」

わざわざ湯のみを差し出す。こんなこともあらうかと、わざと用意しておいたのだ。

いれ立ての美味しいお茶である。

「アンタ、それウチのお茶じゃないのー」

「細かいことは気にしないで。まあグッといつてグッと」

グイグイと湯飲みを押し付ける。

靈夢は嫌そうな顔をしながらも、やがては観念して受け取った。作戦大成功である。

「ハア……。もういいわよ。アンタと話してたらなんか疲れてきた。妖怪相手に一々怒つてたら、身体がもたないのを忘れてたわ。それで何の用な訳？ 賽銭入れる気はないよ」

湯飲みを両手に持ち、縁側に腰掛けてため息を付く巫女。幸せが一匹逃げていった。

とつあえず私は娘を呼び寄せる。

無言、無表情で靈夢を見つめ、その様子を窺っている。なるほど、まずはしつかりと観察から入る。素晴らしい。いつかはこの外道巫女を上回り、幻想郷を支配するかも知れない。そんな、白昼夢を見た今日この頃。

「ええ。実はこの娘に幻想郷案内をしていたのよ。まずはここからと思つてね。

一応はこの世界の要でしょ?」

私の言葉を聞き、怪訝な顔でこちらを見る巫女。その視線は美咲へと集中している。

美咲も視線を逸らすことなく、靈夢の視線を受け止めている。もし娘を泣かしたら、即座にストレートをぶち込むつもりである。

「……アンタと同じ服装だけど、その娘は一体なに? まるでそのまま子供化したみたいな感じだけど。妖力で生み出したアンタの分身とか?」

戯言を吐く馬鹿巫女。

なんということを言うのだろうか。とんでもない女である。

「そんな訳ないでしょ? 貴方の眼は正常なのかしら? 月の人間に診察してもらつた方が良いわよ」

「生憎私の視力は鷹並なの。そんな心配は無用よ。それで、そいつは誰なのよ。説明しなさい」

そいつ呼ばわりに、私はカチンと来るが我慢する。
ここで暴れでは、全てが水の泡。

「さあ美咲、ちゃんと挨拶をして。練習した通りにね。こんな外道巫女でも、一応挨拶はしないと駄目よ」

「誰が外道巫女よ。変な事を教えるんじやない！」

「本当にうれしいわね。さ、美咲上

肩に手を置いて促す。頑張れ頑張れと心の中で旗を振る。声には出さない。あくまでも心の中で応援するのだ。

「ぜひお坐り、奥麗靈夢さん。

和一屋敷幽霊の娘、名前は「和一屋敷の娘」です。今後とも宜しくお願ひします」

「……え？」

淡々と教えたとおりに挨拶する美咲。

素晴らしい。

「グッデー。」

私は思わず叫んでしまつ。

ワンダフル！ まさにパーぺキ。超グッズである。

「い、今娘つて言つた？」この凶悪妖怪は、こんな小さな娘？

「冗談でしょ、そんなの倫理的に許されないわ

信じられない、田を丸くして大声を張り上げる靈夢。

「何よ。私に娘がいると、何か問題があるのかしら」

「……問題だらけでしょ。」凶悪妖怪が

「喧嘩を売つてゐのかしら、博麗靈夢。

言つて良つて事と懲つてどが世の中にはあるのよ」

「それはまじめの台詞よー。」

敵意を籠めて睨みつける。

靈夢もそれを受けて睨み返していく。

「…………」

美咲はいつものように無表情に、それをただぼんやりと眺めている。
何を考えているかは読み取れない。

妙な緊張感に包まれる中、その無言のにらみ合には、数分間の間続いた。

やがて靈夢の腹の音で、緊張感が崩れ、なし崩し的に神社の中へと案内されるのであった。

「こうガサツな女には絶対させないよ」と、私は固く決意するのだった。

・博麗靈夢
空を飛ぶ程度の能力

第一話 博麗の巫女（後書き）

元と比べて、娘のテンション
風見幽香さんはいつも通りです。
です。

第三話 白黒の魔法使い

チリンと鳴る風鈴の音が聞こえ、部屋に入つてくる一陣の風に夏の風情を感じる私。

爽快感に浸つていると、それを邪魔する耳障りな鳴き声。ジージーやらカナカナやらミーンミーンとこつた大合唱が私のイライラを増幅させるのだ。

夏の風物詩とはいへ、イラつくものはイラつくのである。

例えば、田の前に座つてこねる小娘のよつと。

「 なあ。そんにイライラしちばうしたんだ？ 珍しい客なんだからなんか話せよ。」

一ヤーヤと笑いながら軽口を叩いてくる金髪娘。

名前は霧雨魔理沙。人間ながら魔法使いだとか言つてゐる、たわけ者である。

見てゐるだけで、なんだかこみ上げて來るものがある。

生意気そうな顔を抓りたくなる衝動をなんとか抑える。

別に我慢する必要などないのだが、あまり無様な姿をみせるわけにはいかない。

カリスママザーたるもの、常に威厳溢れる姿勢を保たねばならないのだ。

よつて、軽く流すのが正解だ。

「別にイライラなんてしていいわ。私の事は放つておいて頂戴」

ちやぶ台を人差し指でドンドンドンドンと連打しながら返事をする。叩き壊すと後で靈夢がうるわしきないので、一応手加減はする。ああ、早く戻つてこないかしら。

とこゝか見に行つてみよつか。イケナイ事態が起つてゐる可能性もある。

手遅れになつてからでは遅いのだ。

立ち上がりうとしたところ、再び私を遮る呑氣な声。

「それで結局、お前はなんでここにいるんだ。さつきから全然答えてくれないじゃないか。立つたり座つたり落ち着かないんだよ」

呆れたよつた表情で問いかけてくる白黒娘。

白黒といつのは、服装が時代を間違えた魔女コスチュームからである。

白黒といえば、魔理沙。魔理沙といえば白黒。そういうものだ。

「……貴方はそこでお茶でも飲んでなさい」

「わっかわっかしてゐるぜ」

「あつや」

わっかわっかの繰り返しである。大体10回くらいは繰り返しただろうか。

なぜこゝなつたかとこゝと、話は30分くらい前に遡らなければならない。

完璧すぎる挨拶の後、とりあえずと居間に通された私たちは美味しくない湿気た煎餅と、そこそこ飲めるお茶でもなされたのだ。

巫女はよつこいらせと座布団に座り、机に肘をついて湿気た煎餅をバリバリと齧りつく。
もう少し上品な食べ方が出来ないものだらうか。
仮にも巫女なのに。

「…………で、この子がアンタの娘つていつのは本当なわけ？」

猜疑心に満ち満ちた視線を向けてくる霊夢。

とりあえず疑つてかかるタイプなのだ。この女は。
その癖、腕力と靈力は人間離れしたものがあるのだから、迷惑この上ない。

生まれる時代と場所を間違えたとしか思えない。
是非世紀末辺りにでも行つて、変な髪形相手に大暴れしていて欲しい。

「さつきしつかりと挨拶してたでしょ？」

「本当も何も、それ以外に何があるっていうのかしら」

私は胸を張つて言い切る。豊かな胸をわざと強調するようだ。
殺意の籠つた視線を感じたが、即座に消える。
胸の大きさにコンプレックスなど感じない、などと平然としている奴ほどその逆なのだ。

口元を歪めて靈夢に視線を送る。

眉が危険な角度に曲がってきた。面白い女だ。

「……何よ。喧嘩売つてゐの？」

「フフツ、別に」

胸なんかで女の価値は決まらないわよ博麗靈夢。
……」これは持ちたるものだけが言える台詞ね。

「話を元に戻すけど。やっぱり信じられないわ。

里から似た娘を攫つてきたと言われたほうが、余程現実味があるわ
里から攫つたとして、知らない子供を育てて何が嬉しいのか是非教
えてもらいたい。

今の私は自分のプリンセスをマークするのに、忙しくて仕方がない
ところだ。

ところで育ての親と結ばれるというのは、道徳的にどうなのだろう。
血が繋がっていなくても、やはり色々とまずいと思う。

ハ雲の変態は、それが良いのですなどと言つていたので、
とりあえず全力でぶん殴つておいた。手加減なしのガゼルアッパー。
暫くしたら正気に戻つたので良しとする。

それはともかく、

「そんな訳がないでしょ。

第一、そんな物騒な真似をしたら里の守護者やら妖怪の賢者が黙つ
ていなきわよ。

里では常に監視されているからね。誘拐など出来る訳がない

私が里に行くと、常に自警団の盾どもが私の周りをマークするのだ。気付かないフリをしてやつてはいるが、そのうち躊躇しないと図に乗るだろ？

人間とはそういうものだ。

「……じゃあ父親は誰なのよ。そもそも妖怪なの？半人半妖？妖力を感じるから人間とは思わないけど」

「父親はいないわ。後は秘密」

「いつからアンタのところにいるのよ。流石にその歳まで隠して育てていたとは考えにくい

「フフ、教えてあげないわ」

「……最初から『あの姿』だったの？」

「教えてあげない。貴方が知る必要がないもの」

あの娘との最初の出会い。

それは私達だけの思い出。誰にも立ち入らせない。

思い出したくない事もあるけれど、あの日の事は絶対に忘れない。

「……つまりアンタの娘で、父親はいない。
名前は風見美咲つてこと以外は秘密なワケ？」

「Exactly(その通りでござります)」

巫女は乱暴に立ち上がると、笑いながら怒るとこいつ器用なことをしながら親指を外に向ける。

「ちょっと表にでなさい。やつぱりかやんとお話しないことダメなようね。

主にその不愉快な身体に」

やつぱりイライラしてたようだ。

貧相な身体だからって逆恨みはいけない。

そんなことをしても、体型は改善されないのだから。

「そんなに怒つてはシワが増えるわよ。まあ、このお茶でも飲んで落ち着いて」

私はササッと湯飲みを差し出す。

中身は冷めているが、特に問題ない。

「だから私のお茶だつて言つてんでしょうが……」

私は横に大人しく座つてこいる美咲に田で合図を送る。
仕方ないのでアレで釣るしかない。

靈夢に最も効果があるのは、賽銭とこれだ。

「宜しければ、召し上がってください」

「い、これは？」

「私が育てた夏野菜です。収穫したばかりです」

おずおずと小さな手で、野菜が満杯に詰まつた籠を差し出す。

その仕草は、どこかの令嬢のよつで、何とも愛らしさ。
抱きしめたくなる欲求を、ギリギリで堪える。

気分を変える為に、視線を籠へと移しその中身を確認してみる。

籠に詰まっているのは、瑞々しい夏野菜。

キュウリやトマトやナスやらペーマンだ。

涎をこぼしやうこなつてこの博麗靈夢。

わざと置み掛けられるように、もう一つの十産を美味が差し出す。

「これもどうだ？」

夏の代名詞ともいえる大きな萃香、いや西瓜。

手刀で叩き割りたくなる素晴らしい形をしている。

西瓜割りは夏には欠かすことが出来ない、大事な行事である。

家に帰つたらせつそく冷やしておいた萃香を叩き割ることにしよう。

中身が飛び散るくらいの勢いで。

餓鬼の化身、博麗靈夢は両手で籠を受け取り、西瓜を足で確保する。まるで蹴球でもはじめそうなポーズである。

はしたないことに上ない。娘の教育に悪すぎる女だ。

反面教師として欲しい。

「……最初からやうこつ態度なら、こんな面倒なことにならないの」「」

このつものは早く渡しなことよね、全く

零れる笑みを全く隠せていない。

食費が浮いたなどと、巫女にあるまじき事を考えてこらのだらつ。

私は娘に教育することにする。

「美咲よく見ておきなさい。物で釣るところのはまじつこいつとを言うのよ。

魚釣りのことじやないのよ。理解できたでしょ？」

そして釣られた人間の顔はコレよ。実際に浅ましい姿でしきう。

一つ、勉強になつたわね」

百聞は一見に如かずと詫つけれど本当だ。
良い課外授業になつた。

「はい母様。頭ではなく、この田でしつかりと理解できました。
博麗の巫女は、意地汚くて、浅ましいといつこいつも良く分かりました」

「 その通りよ。流石は私の娘。
一教えるだけで、百を理解できるのね。
母として誇らしいわ」

「はい、母様」

親指を立ててよく出来ましたと褒めてあげる。

娘も親指を立てて私に応える。
褒めて育てるのが風見流よ。

「……・アンタらやつぱり親子だわ。

その腹立たしい性格がそつくりだもの」

何故か大きな溜息をついて座り込む靈夢。
西瓜は横へと転がつていってしまつた。
転石苔を生ぜず。特に意味はない。

そんなこんなでだらだらと雑談していた私達。
主に私が靈夢をからかつていただけであるが。

突如として、美咲が私に対して声を掛けてくる。

「母様。少し博麗の巫女と話したいことがあるのですが」

「 何よ。厄介なのはお断りよ。面倒くさいのは大嫌いだから」

「別の部屋で話しても良いですか？」
「は少し」

何故か私から視線を逸らそうとする我が娘。
ど、どういうことなの。理解できない。
まだ邪険にされるような年じゃないのに。
おかしいわ。ありえない。

「ね、ねえ。ちょ、ちょっと」

「……仕方ないわね。まあ良いか。
野菜ももらつちゃつたし、あれなら当分食えなくてすむしね。
聞くだけならタダだから、別に構わないわよ。」

「ちょつと幽香、もつすぐ魔理沙が来ると思つからお茶出しどいて頂戴」

「ちょ、ちょつと待ちなさい。詳しく事情を」

「では母様、暫くの間失礼しますね」

立ち上がつて、スタスタと奥の部屋に去つていく巫女様と娘様。
……あれ？ 私置いてけぼり？

そして誰もいなくなつた。私以外。
犯人は靈夢。Yの悲劇とでもいつのか。
意味が分からぬ。

そして冒頭へ戻るのだ。

ようやく話が終わつたらしく、一人は連れ立つて居間へと戻つてき

た。

魔理沙との馬鹿らしいやりとりもよつやく終わりという訳だ。本当に体力と精神力を消耗させられた。

そんな私の気も知らず、相変わらずの間抜け面な白黒。

そんな魔理沙が一人に挨拶しようとして、手を上げたまま固まる。時間が止まつたかのように、笑顔を張り付かせたま。

「よつ靈夢、邪魔してるぜー……つて、リ、リトル幽香ー？」

「 つるわいわね。いきなり声が大きいやよ

「そりゃ声も大きくなるぜー。どういってんだ」これは。

私にも一から百まで全部説明してくれよ。何か面白やつだしねー。」

「やかましい」

「仲間はずれは良くないぜー。するい『靈夢、この外道巫女ー』

あちやーと頭を抱える靈夢。

興味深々といった感じで、心から嬉しそうに私と美咲へと視線を往復させる魔理沙。

非常にまずい事態だ。ロックオン完了といった様子である。一番見られたくない馬鹿に見つかってしまった。

とりあえず、わざとこの場を去るのが正解と判断する。馬鹿だから、3日ぐらい立てばきっと全て忘れるだろう。ちなみにチルノとミスティアは3歩で忘れる天才だ。馬鹿と天才は紙一重。実に良い言葉だ。

「それじゃあそろそろお暇しましょうか。

騒がしい蝉女がいるからね。ミンミン煩くて敵わないわ

「誰が蝉女だ！… ていうか、私にも詳しく説明を」

「その必要はないわ。もうこの娘が貴方に会つ」とはないのだから。
金輪際、この娘には関わらないで頂戴。

それでは、御機嫌よ」

「 お、おい！」

まだ何か喚いている魔理沙。

それを無視して、私たちはささつと博麗神社を後にした。
しかし白黒不良娘に美咲の顔を見られてしまつたのは失敗だつた。
あいつは好奇心の塊だから、いざれ『必ず』ちょっかいを出しに来るだろ」。

更に目障りなのが、ゴシップ記事ばかり書いている天狗女だ。
神社にいる頃から気配がしていたので、今頃トンデモ記事を嬉々として作成しているはずだ。

見出しへ『花の妖怪に隠し子発覚！？ 博麗神社での謎の密会を激写！』

あたりだろ。見つけしだい全て焼却して、塵にしなければ。
ついでに不埒な悪行三昧を徹底的に裁いてやるよ」。

必ずだ。

だが、その前に確認することがある。

「 それで、あの巫女と何を話していたのかしら。

全部教えてくれるわよね？「

手を繋いで飛びながら、一ヶコリと笑顔を作り娘の方を向く。できるだけ優しくエレガントに聞き出さなければ。

もしくは取つて返して、あの巫女に強引に吐かせるかだ。

流石に博麗靈夢を相手にするのは面倒くさいので、避けたいといふのである。

弾幕ごうじ」というルールの中であれば、あの巫女は最強だ。手強い女だとこうのは、認めなければならない。

ルール無用の肉弾戦に持ち込めば、負ける気は全くしないが、美しい。

「申し訳ありません母様。今は言えません」

「……どうしても？」

「はい」

「私がお願ひしても？」

「……申し訳ありません」

「むむむ」

「うなつてはテコでも動かないだらつ。

この娘はとても強情で頑固なのだ。一体誰に似たのか。

だがこのように意地を張る姿も、心のアルバムに残しておきたい一品である。

アルバムで思い出したが、実は『使い捨てカメラ』とやらも裏ルートから手に入れてあるのだ。

1個では全然足りないと思ったので、うつかり箱買いしてしまった。何故か震えている店主に、『お願い』したら格安で売つてくれた。これも田頃の行いのおかげだろう。

一度こつそりと娘を撮つてみたのだが、勘が良いのか一いちらを振り向いてしまう。

それではダメなのだ。やはり被写体は自然体でなければ。仕方がないので取り合えず記念撮影をして、写真立てに入れて部屋に飾つてある。

笑顔ではなく、いつもの無表情なのが残念なところだ。厳しく評価して90点。

私の夢は、この娘が笑顔を浮かべた瞬間をゲットすることである。ちなみに私を撮影してもらつたら、とんでもないものが撮れてしまつた。

写真がぐにゃーっと歪んでいるのだ。誰だか判別出来ないくらいに。あのカメラだけ不良品だったのだろう。所謂、流れ物だから仕方がないけれども。

見ると何故か気分が悪くなるので、人里のある場所に置いてきた。

きっと拾つた人にちょっとしたサプライズをプレゼントできる筈だ。

「 そうわかったわ。これ以上は敢えて聞かないわ。いつか、貴方が話してくれるのを楽しみにしているわね」

「はい、必ず。越えることが出来るよ」、精一杯頑張ります」

「じゃあ今日はそろそろ家に帰りましょう。

もつね屋の時間だし、メテイストンが遊びにくるかもしれないわよ」

何を精一杯頑張るかを聞くのは野暮というものの。

空気の読める女、風見幽香は動じないのだ。

しかし何を頑張るのだろうか。歌のレッスンやダンスといつも可能な性はないだろうか。

歌って踊れる妖怪を田指すのも悪くはない。

夜雀やら幽霊楽団とともに幻想郷デビュー。そして仲間との別れ、ソロ活動への道。

華々しく活躍する娘をみつめ、私はそつと嬉し涙を流すのだ。

そんな私に、優しくハンカチを差し出してくれる娘。

感動のシーンだ。

「ぼーっとそんなことを考えてくると、どうせやが家に到着したようだ。

全然気付かなかつた。

「到着しました、母様。私は冷やしておいた野菜を取ってきまーす

「え、ええ。気をつけてね」

板についてきた飛び方で、小川の方に向かっていく。

あの調子ならば、そのうち自由自在に空を飛びまわるだろ。

それに比べて私は、元気に飛び回るのが億劫であるのは否めない。

そんなことだからじつかの本に、『花の近くから動き回る』と書い『などと書かれるのだ。

「やれやれ。じつかのお子様閻魔にも言われたけれど、少し長く生き過ぎたのかしらね。」

こんなことを考えるのも年を取りすぎたせいじら

幸せが逃げていくような深い溜め息をつき、家のドアをゆっくりと開ける。

「 よお。遅かったじゃないか。待ちくたびれたぜ。
いくじなんでもゆつくり飛びすぎだぜ。思わず眠る所だった」

私は声を掛けってきた馬鹿に満面の笑顔を浮かべた後、そのまま無言でドアを閉める。

振り返り空を見上げると、そこには雲ひとつない快晴の青空が広がっていた。

あまりの清々しさで、もう一度、今度は軽く溜息をつく。
また幸せが逃げていつただろうか。

願わくば、私から逃げた『幸せ』が娘に近づくように、心中で祈つてみた。

あの娘は、誰よりも幸せにならなければならぬ。

私の醜く歪んだHコの犠牲者。彼女には幸せになる権利がある。

魔法を使う程度の能力

- ・ 夏野菜とは
野菜の中での特に夏期に収穫されるものをいい、
キュウリ、ナス、トマト、ピーマン、オクラ、
トウモロコシ、ニラ、カボチャ、ズッキーニなどが代表的である。
wiki先生より

第二話 白黒の魔法使い（後書き）

基本コメディ、ギャグ形。
所々に入るシリアルス。
そういうのが好きです。

第四話 塔の上の死闘

・八雲紫と博麗靈夢の会話

「それで、あの娘はどうだったかしら？ 親に似ず賢そうな子だつたでしょ？」
あの無表情なのがまた良いのよね。フフッ」

八雲紫が胡散臭い笑みを浮かべて、靈夢に問いかける。

「……アンタまた覗いてたわけ。まあ姿はそつくりだけど。性格は正直良く分からぬ。なんだか掴みどころがないのよね」

靈夢は腕を組んで考える。無表情、無感情。

何を考へているのか良く分からぬ。

靈夢への『頼みごと』も唐突だつた。

何故博麗の巫女にそんなことを依頼してくるのかも、理解が出来ない。

自分の親に頼めば良いものを。

嬉々として教えてくれるだつた。

ちなみに靈夢はその『頼みごと』を腐れ縁に丸投げした。

案の定興味深そうな顔をして、その頼みを引き受けた。

性格はアレではあるが、腕は確かだからまあ問題はないだろう。

靈夢はそう判断し、面倒事を押し付けた。

「それはおいおい分かるでしょ？ また楽しみが一つ増えてしまつたわ。

これからが本当に楽しみ」

「……厄介」とにならないと良いけど

「それは大丈夫よ。教育熱心な母親がついているから

「ただの馬鹿親じやない。あれじや箱入りにしかならないわよ」

「靈夢は溜息をつきながらお茶を飲む。

「それにしても、風見幽香が親馬鹿妖怪になるとはね。

年月は妖怪をも変えるのかしら」

「年寄り臭い台詞ね」

「 それだけ長く生きてきたところじよ。私も、あの子もね」

・文々。新聞 号外

『花の妖怪に隠し子発覚！？ 博麗神社での謎の密会を激写！…』

突然ではあるが1面に掲載した写真を見ていただきたい。

幻想郷でも指折りの実力者と評される『花畠の妖怪』風見幽香氏と、
容姿をそのまま小さくしたような女の子の2ショットである。

このスクープ写真は、たまたま博麗神社付近を飛んでいた記者が撮

影に成功した物だ。

本人に突撃取材を試みたところ、

「取材費は貴方の命で構わないわよね？ 勿論先払いよ」
などと恐ろしい台詞が返ってきた為、這々の体で逃げ出してしまつた。

真実を追究する新聞記者としては、全くもってお恥ずかしい限りである。

この件について聞き込みを行つたところ、

『長く生きた妖怪は、口から卵を吐いて自分の分身を作る』
『擬態が得意な妖怪を手下にしたようだ。本体はアメーバ形状のはずだ』

『魔法の森の人形遣いに作らせた精巧な人形だらう。能力により操作しているみたいだ』
などという話を聞くことが出来た。

もし貴方が真実を追い求めるのであれば、本人に尋ねてみるのも良いかもしない。

但し、何があつても本紙では責任を取ることは一切ないので悪しからず。

(射命丸 文)

可愛らしい花柄のカップを取り、その馨しい香りをじっくりと堪能する。

やはりコーヒーはブラックに限る。上質を知る女は一味も一味も違うのだ。

職人による焙煎、挽き、その淹れ方。全ての英知がこの小さな一杯に詰まっているのだ。

それを楽しむことができるこのひと時。実に贅沢だ。

ちなみに豆は人里のとある店で購入することが出来る。器具もそこで買い揃えた。

お茶やら紅茶党が多い幻想郷では、貴重な店なのだ。

それはともかくとして、砂糖やミルクを入れるなど邪道。馬鹿みたいに砂糖とミルクをぶつこんだら、それはコーヒーじゃない。

それではただのコーヒー牛乳だ。

豆のブレンド、焙煎の特色が全て吹き飛んでしまう。子供じゃあるまいし、ミルクや砂糖など私はつかわないのだ。

「母様、お砂糖とミルクは使いますか？」

私の娘が気を利かてくれる。

素晴らしい気配り精神。 いつも嫁にだしても問題ないだろう。勿論出さないが。

私と殺し合いをして、勝つたら認めてやつても良い。

「あらありがと。気が利くわね」

ドバドバとコーヒーへと注ぎ込む。
もう何個入れても構わないだろ。ああ娘の心遣いが身に沁みる。

心にまで沁みるこの甘さ……。」これぞ至高の一時だ。

「魔理沙さんはどうされますか?」

「私はブラックでいい。砂糖とかミルクは邪道なんだ。大人な私は、コーヒー本来の味を楽しむのさ」

ふふん、分かつてない小娘だ。

少しずつ味を調節していくのが玄人というものなのに。ブラック党を気取つて通ぶるなど、小娘には百年早い。……それにしても、この娘はなぜ我が物顔で、私の家に居座つているのだ。招待した覚えは欠片もないのに。

「寛いでる所悪いのだけど、貴方何しにきたの。というより、勝手に家に入るのは泥棒よ」

「細かいことを気にしてるとシワが増えやぞ」

「いいから要件を話しなさい。いい加減にしないと殴るわよ?」

減らず口ばかり叩く生意氣娘め。

美咲の教育に悪いから、絶対に近づけたくなかつたものを。
最悪である。

「いやいや。お前に『娘』がいるとかつき小耳に挟んでな。
ついつい遊びにきてしまつたのさ。

お前らがタラタラ飛んでる間に追い越してしまつたので、
お先に失礼していたといつ訳だぜ」

なあ、と懐っこい笑顔を美咲の方に向ける。

いつのまにか自己紹介まで済ませていたらしい。

巫女やら、人形遣いやら、図書館女など手広くちょっとかいを出して
る癖に

まだまだ足りないらしい。末恐ろしい女だ。

いつか刺されることだろう。

この女、魔法使いとしては平凡だが、弾幕ごつこルールでは強敵となる。

その速度を活かしつつ、大出力の魔法を駆使し、かなりの勝率を納めている。

人間でも妖怪に勝てるのがスペルカードルールとはい、小憎らしいことだ。

更に憎たらしいのが、私の得意魔法を平然とパクリやがつたことだ。

「そう。じゃあ十分満足したわね。

お帰りはあちらよ。ひとつと出て行きなさい」

ドアの方に手を差し出す。ここにまひとつ帰つてもうつたほうが良い。

何だか嫌な予感がするのだ。これが虫の知らせといつヤツだらうか。
ちなみにリグルとは何の関係もない。

「そりゃ慌てるなよ。実はお前と楽しくゲームをしようと思つたぞ」

「ドン、と机の上に大き田の袋を置く白黒。全く意味が分からぬ。

「なぜ貴方と私でゲームをしなければいけないのか、まるで理解できぬわ。

さつさと帰りなさい。といつか帰れ」

シツシツと手を振つて、追い払う仕草をする。
それを見ても、相変わらず落ち着いている様子の魔理沙。
おのれ、人間風情が妖怪を舐め腐つた態度を取るとは。
ここ最近妖怪も舐められすぎだと私は思つ。
娘が傍にいなければ、外に連れて行つて即座にタコ殴りだ。

昔だつたら話を聞く前に血祭りにあげていただろ。
私も甘くなつたものだ。良いことか悪い事かは分からぬが。

「フフン、負けるのが怖いのか？ 大妖怪風見幽香ともあらう者が

「そんな安い挑発には乗らないわよ。顔を洗つて出直してきなさい」

見え透いた挑発だ。馬鹿馬鹿しい。

そんな『挑発』に乗るのは知力30以下の猪武者だけ。
私が掛かると思つたら大間違いである。

「おい聞いたか美咲。お前の母ちゃん負けるのが嫌で、逃げ出する
しいぞ。

本当情けないなあ。戦わずして負けるなんてな」

「ゴホン。それでいつたい何で勝負するのかしら。仕方ないから付き合つてあげるわ。

この私が勝負から逃げるなんてありえないもの」

その言葉を聞いた魔理沙は、ニヤリと微笑む。

まんまと策に乗つてしまつた氣がするが、これは大妖怪の余裕とうやつだ。

決して美咲に格好悪いところを見せたくないからではない。敢えて挑発に乗つてやつたのだ。

「勿論弾幕じつこだ！……と言いたい所だが、それは次の機会にしよつ。

今日の勝負はこいつだぜ！」

ジャジャーンという効果音と共に、袋から妙な円盤が何枚かついた

『塔の模型』が現れた。

実に安っぽい感じの。

「こ、これは……!?」

隣で見ていた娘が驚きの声を上げる。

この娘が驚きを現すのは実に珍しい。

「知つているの？ 美咲」

「はい母様。場所は古代イタリア。

ピサの斜塔にて行われた『処刑方法』をモチーフにしたといわれる

「

「 そう知る人ぞ知る、『ぐらぐらゲーム』だぜ。ちなみに対象年齢は6歳以上だ」

「ぐ、ぐらぐらゲーム？ 何よそれは」

そう言いながらカラフルな人形を並べはじめる白黒。鼻歌交じりで、実にご機嫌である。

「！」の色つきダイスを振つて、出た色と同じ色の人形を、同じ色の階層に交互に乗つけていくんだ。

24体の人形が先になくなつたほうが勝ちだぜ。バランスを崩したらアウト。人形は落としたやつが引き取るんだ。簡単だろ？」

「……確かに簡単だ。落ち着いて冷静にプレイすれば私の勝利は揺るがない。」

私にはプレッシャーなどというものは通用しないのだから。逆に精神的に脆い所のある魔理沙など、私が一睨みするだけで震えあがつてしまふだらう。

ククク、鴨がネギを背負つてきたとはこのことだ。ネギどころか、鍋までついてきたようなものである。

鴨葱魔理沙。今度からそう心中で呼んでやるとしよう。

「……先攻は私で良いのかしら？」

貴方、これで遊んだことあるでしょうから、当然良いわよね

この条件を呑ませる。そうすれば私の勝ちだ。

「ああ勿論構わないぜ。何か賭けないと勝負は盛り上がりないよな。負けた奴は、勝った奴の言うことを一つ聞くっていうのはどうだ？」

「別に構わないわよ。勝負を終えた後の貴方の顔が楽しみね。泣いても喚いても、絶対に命令に従つてもうつわよ」

魔理沙を見下ろす。それに対し、挑戦的に微笑んでくる白黒。本当に小生意気な顔をしている。抓つたら気分が良いだろ？。

「その言葉そつくりそのままお返しするぜー！」

……本当に愚かな小娘。

この風見幽香に精神的動搖によるミスは決してない。つまり人形を置くなどという単純作業を、私がミスするなど絶対にありえない。

幻想郷の『精密殺人機械』と呼ばれた私からしたら超 easy レベルである。

ちなみに命令は既に決まっている。

『一度と娘に近づくな』。シンプルな命令だ。

おまけに、悔しがるこの小娘の顔を見れるなんて一石二鳥。既に見えた勝負の結果にほくそ笑んでいると、

「つと、美咲こっちに来いよ。お姉さんと一緒に遊ぼうぜ。そんな所で立つても面白くないぜ」

「コニコと美咲に微笑みかけ、手招きする魔理沙。美咲が尋ね返す。

「私が一緒で良いんですか？」

「見てるだけなんてつまらないからな。まあ来い我が妹よ」

誰が妹だ。思わず突っ込もうとした私の隙を突き、強引に私の娘を引き寄せる魔理沙。

さらに美咲を膝の上に乗せて、私と相対する形になる。

は、話が全然違うわ。この構図には決定的な過ちがあるじゃない！ その役目は私の物なのに！

「ちよつ、ちよつと待ちなさい！ なんでアンタが私の娘を抱えているの！？」

わ、私と一緒に遊びましょう。まあこっちへいらっしゃい！

そんな不良娘に近づいては駄目よ……。」

両手を広げてアピール。親子の繋がりは水よりも濃いのだ。そんな不良魔女に近づいてはいけない。今すぐに取り返さなくては！

「……えつと」

「 おいおい嫉妬か？ いいから早くダイスを振れよ。まあまあ！」

強引にダイスを私の手に握らせる白黒。

「ちよ、ちよつとー 私は納得していないわよー！」

「つるさい奴だな。ダイスを握つたら、10秒以内に振らないと負けなんだぜ？」

「そ、そんなルール説明しなかつたじゃない！」

「今決めたのさ。ほらほら、後5秒しかないぞ？」

「「」の野郎！！」

「私は野郎じゃない。花も恥らう乙女だからな。ほれもうすぐタイムアップだぞ」

その言葉にグギギと歯軋りしながらも、なんとか冷静さを取り戻しゲームに臨むことにする。
ゼロになるまえに、ダイスを振る。

駄目だ。落ち着かなければ勝利が揺らいでしまう。
そう、「」はクールに。BE COO。私は常に冷静なのだから。
勝てば良いのだ。勝てば。

少女遊戯中

流石に22巡目まで来ると、かなり微妙で絶妙なバランスになつて

きた……。

いつ崩壊してもおかしくないよつに見える。

心の動搖が、即座に崩壊へと繋がるだろつ。

しかしながら、私に『敗北』の一文字はありえないのだ。

常勝無敗。豪華絢爛。それこそが風見幽香の一つ名よ。

「 ああ貴方の番よ。後2つ乗せたら私の勝ちが自動的に決まる
といつ訳ね
言い訳の準備は宜しいかしら？」

ニツ「リと微笑んで睨んでやる。もちろん魔理沙だけをガン見だ。
視線で人を殺せるならば、ニツは100回ぐらい閻魔の顔を見て
いることだろつ。

負のオーラを思い切り浴びせてやる。

「 おお、こわいこわい。ああ私たちの番だぜ。
美咲、ドンと良い目を出してくれよ」

娘の頭を撫で撫でしながら、美咲の小さな手にダイスを渡す。
……ニツの女、わざわざからやたらと『スキンシップ』をしている気が
してならない。

気安く私の娘に触るんじゃない！ と声を大にして言いたい。

このタラシめ、女なら種族も年齢も気にしないといつのだろつか。

「 はい魔理沙さん。私も頑張ります」

「 おお良い意気込みだぜ。ああ今こそ偉大な母親を越えるときだぜ
！」

「 ……母様を、越える？」

「そうだぜ。一人でギャソンと言わせてやるつじやないか」

私の方を失礼にも指差し、ニヤリと笑いかけてくる魔理沙。
明らかに私を怒らせ、動搖させようとしているのが見え見えだ。
ここは我慢。我慢我慢我慢、

……安い挑発に乗つてはいけない。心頭滅却心頭滅却。

怒りを抑えるのよ、幽香。私は冷静。私は冷静。

魔理沙は危なげなく人形を乗せ、また私に手番が回つてくる。

「ほいっと。さあ、お前の番だ。

そろそろ何かが起こりそうな予感がするぜ。

気をつけないと崩壊するぞ？」

この白黒、崩壊しそうだというのにホイホイと人形を置きやがる。
しかしながら先攻はこの私だ。ミスしない限り私の勝ちは絶対に揺
るがない。

手持ちの人形を先に無くせば良いのだから。

つまり、このゲームは絶対的に先攻が有利というわけだ。

「ふふ、動搖を誘おうとしても無駄よ。年季が違うのよ貴方とは。
そろそろ敗北の味を知りたいわ」

「やうかいそうかい。そろそろ味わえるから楽しみにしとけよ」

「フフ。期待しているわ」

ひよっこが心理戦を仕掛けるなど100年早い。

ダイスを振り、指定の人形を塔に乗せる。容易いことだ。
左手は添えるだけ。右手に全意識を集中させる。
そーっと揺らさないようだ。……そーっとだ。

乗つた。

さあ、後は指を離すだけ。決して揺り戻なこよひよ。ここが一番気をつけらるべきといひ。

最後まで油断してはいけない。

「キヤッ！ ま、魔理沙さん、い、一体何を！」

美咲の慌てふためく声。今までこんな声を聞いたことはない。私は何事かと思わず視線を移してしまう。

そこには、身体を捩じらせる美咲と、手先をワキワキさせている色

情魔女

「ふふ、まあ固いこと叫ぶなよ。やうやく。

「ここが弱いのか？」
「ほれほれ」

あ、アアアアアアンタっ！－子供相手に何をしてるの？！

?

し、しまつた！
手に思わず力がつ！！
塔が崩れ
。

アツ。

・塔方花映塚
人生の勝利者
負け犬
霧雨魔理沙&風見美咲
風見幽香

第四話 塔の上の死闘（後書き）

ぐらぐらゲーム。
子供の頃遊びました。
懐かしいです。

第五話 逆転のない裁判

・是非曲直庁？

トンネルを抜けると、そこには裁判所だった。
雪国ではない。

「それでは、被告人『風見幽香』に判決を申し渡します。
自らの行いを省みて、心して受け止めるように。」
つて、私の話を聞いていますか？」

偉そうに私を見下ろす子閻魔。
いきなり何を言っているのか、さっぱり意味不明だ。
大体ここはどこなのだろう。

魔理沙と勝負した後の記憶があやふやで、何が何だか分からないとにかく私の家ではないことは確かのようだ。

さつさと帰ることにしよう。

晩御飯の準備をしなくてはいけない。

主婦の一日は忙しいのである。子閻魔と遊んでいる暇などないのだ。

「……なんだか良く分からぬけれど、『高説は結構よ。』
早速で悪いけれど、私は家に帰らせてもらひわね。
お説教はまた100年後ぐらいいにお伺いするわ

私の言葉に対し、子閻魔は心底呆れかえった様な視線を向けてくる。

「貴方は、今までの話を全く聞いていなかつたのですか？」

死んだ者が一体どこに帰るというのです。

……長く生き過ぎて更におかしくなつたのですか」

元から少しおかしかつたから、それも仕方のないことかもしれませんと呟く。

……どうやら私に喧嘩を売つてゐるようだ。

買ってやつても良いのだが、時間が勿体無い。

今日の所は見逃してやろう。

でも後で必ず報いを受けさせむ。

「今日の所は見逃してあげる。私は忙しいから。

餓鬼はそこで大人しく妄言を吐いていると良いわ。

それでは、御機嫌よう

小馬鹿にしてやつた後、恭しく一礼をして飛び立つ。

いや、飛び立とうとしたのだ。

だが、脚がまるで鉛のようになつたかのように微動だにしない。

一体どういうことだ。自分の体の一部ではないような感覚だ。何らかの攻撃でも受けているのだろうか。

「……貴方の行き先はもう決まつてゐるのです。

自由気伝に飛べるわけがないでしょう。

既に白黒はついてしまつてゐるのですから。

貴方の辿りつくべき場所は唯一つ。

己が死んでいるといふことも忘れてゐるようですし、

特別にもう一度体験させてあげまあしょ

特別の特別ですよと、一ツ「ひとつ人差し指を立てる子閻魔。実に憎たらしい奴だ。

閻魔が取り出した『鏡』から光が溢れ、私の体をゆっくりと包んでいく。

ああ、光が見える。

「さてさて、敗者はひとつだけ、勝者の命令を聞かなくちゃいけないはずだつたよな。

幽香ママの恥ずかしい話でも暴露してもらひつか。
それとも王道の焼き土下座にしよつかなー」

「ヤーヤと微笑みながら、勝利宣言を行つ魔理沙。

「……ギャフン」

私はグウの音もでない。ギャフンとしか言つことが出来ない。

あんな見え見えの罠に嵌つてしまつとは。

悔しさと恥ずかしさで、机に突つ伏したまま顔を上げる」ことができない。

手には『赤の人形』を握り締めたまま。

たかが人間の小娘ごときに遅れを取るとは、一生の不覚。

我が妖怪人生の最大の汚点となつてしまつた。

「なーんてな。お前への命令は実に単純、シンプルこの上ない話だ。この夏の間、お前の娘をウチで預からせてもらひうぜ。ちなみに拒否権はないからな」

えーと、今この女はなんと言つただろうか。

『このなつのあいだ、むすめをうちであずかる』

預かる？ 誰が？ 魔理沙が。

ガバッと即座に起き上がる。

何をほざいてやがるのだこの不良娘は。

冗談はその時代錯誤の魔女服だけにしておくべきだ。

「馬鹿馬鹿しい！ そんな命令を呑む訳がないでしょうッ！ 良く考えてから物を言いなさい！！」

思わず顔を真っ赤にして、家全体に響くぐらいの大声を上げてしまう。

うつかり手が出なかつただけでも自分を褒めてあげたい。娘の見ている前で暴力はいけない。

鎮まれ私の怒れる右腕よ。

「おいおい、そういう立つなよ。約束は守るべきだぜ。
それに、これは美咲のお願いでもあるんだぜ？ なあ美咲」

私は疼く右腕を押さえつつ、視線を娘の方に向ける。
嘘よね？ という願いを籠めて。

「はい母様。しばらくの間だけ許してください。
これは必要な事なんです。私が強くなるために」

「いいい、いくらなんでもそのお願いには応えてあげる」とは出来ないわ。

「ええええつたいたい」N〇よ。私はN〇と並ぶ妖怪なのよ。
家出、駄目絶対。

「ダメに決まってるでしょう！ …… 美咲、貴方少し疲れているのよ。

さあ今すぐベッドで一緒に休みましょうね。私が子守唄を歌つてあげるわ。

ゆつくりと休めば、きっといつもの貴方に戻るわ」

美咲の手を握り、寝室の方へ向かおうとする。

「休みすれば気持ちもリフレッシュするに違いない。

もう一度と白黒飛行物体なんか見ることがないよつて、私がいつまでも隣にいてあげよつ。

「 母様。私が魔理沙さんに、弾幕『』の特訓をしてくれるよ
うお願いしたんです。

ですから、お願ひします」

今まで見たことがないくらい真剣な目で私の目を見つめてくる。思わず首を縦に振りそうになるが、グッと堪える。

駄目だ。いくら娘でもそんなことは許されない。

白黒のところになんか行かせたら不良になってしまつ。

「だ、弾幕」こなら私が教えてあげてるじゃない。何を言つているの。

今でも、それからも私が何でも教えてあげるわ」

「お前こそ何を教えてきたんだ。あんなもの『弾幕』じゃないじゃないか。

いくら可愛がつていてるからつて、あれじや可哀想だぜ」

魔理沙が呆れ顔で口を挟む。

「フン、そんなもの張る必要ないわ。

私が教えたスペルだけ使えばそれでいいのよ。

万一敵が来たら、即座に私が出て行くのだから。

二度と朝日が捕めないように、徹底的に叩きのめしてあげるわ」

腰に手を当てて言い切る。

弾幕を教えて欲しいといつた我が娘。

戦わせるつもりなどこれっぽつともなかつた。

が、万が一の場合に備えて、スペルカード花妖『風見幽香』をプレゼントした。

大きな弾を空高く打ち上げて、大きな一輪の花を咲かせる美しいスペル。

別名『打ち上げ花火』とも呼ぶらしい。

一種の信号弾になつていて、私はビビリにいても気付けるよつになつてゐる。

そのSOSが打ちあがつたら、私が超高速で駆けつけるといつ寸法。全くもつて完璧。最強のスペルだと自画自賛できる。

「……餡蜜にハチミツをたっぷりかけて、さらに砂糖をぶちまけたぐらいたにゲロ甘だぜ。」

胸焼けして、吐きそうだ。

お前は物事を教えるのに全くもつて向いていしないな。

このままじゃ無菌超箱入り娘一直線だぜ」

「私の教育方針に口を出さないで頂戴」

「私は良いんだが、お前の娘はそつは思つてないみたいだぜ?」

その言葉に、私は美咲を見つめる。

確かに、どこか不満そうな表情を浮かべている。

おかしい、何がいけないのだろう。

「……このままじゃ埒が開かないとと思つて。

それで基礎から弾幕」」このを勉強しようと博麗の巫女に相談しました。

ルールを考案したと言われる幻想郷の守り手に。

そうしたら、『私は面倒だから、代わりを紹介してあげる』と言わ
れて 』

「 私が呼ばれたといつ訳さ。ちなみに報酬はきのこ養殖の手伝
いと、新鮮な野菜だぜ。」

お前の娘は植物育成が得意らしいじゃないか。私の助手に相応しい。
さて、それじゃさつそく行くとするか。善は急げって言うしな」

娘の手を引いてドアから出て行こうとする魔理沙。
それに大人しく付き従う我が娘。

「まま、待つて！ 私の言うことを聞いて！
今度からきちんと厳しくするから！ だから」

「……本当にごめんなさい。でも必要なことなんですね」

そういう残し、二人は去つていった。
無常にも閉まつたドアを呆然と眺める私。
視界が徐々に狭くなる。

私は田の前が真つ暗になつた。

眼前に起きた光景を信じることができず、呆然と立ち尽くす私。
今の映像は一体なんだろう。良く分からぬ。

「思い出しましたか？ 貴方は親馬鹿すぎて、ついには死んでしまつたのです。

最期は愛する娘に愛想を尽かされて、捨てられてしまつなんて可哀想に。

身から出た鏑とはいえ、少しだけ同情します

光が鏡に納まつていぐ。さつきまでのほほは幻だったのだらうか。
……そんなことより！

「ちよ、ちよっと待ちなさい。私がそんな簡単に死ぬわけないでしょ！？」

あんな幻影なんか見せて私を騙そつとしたって、そうはいかないわよ。

早く私を元の場所に帰しなさいーー今すぐこよーーー！」

激昂して閻魔の元に突つ走りつとする。

が、やはり足が動かない。

それを冷たい視線で見下ろす四季映姫・ヤマザナドウ。
売られていく子牛を見るような目。ドナドナ。

「　　このまま生き続けるもろくな事にならない。
あの時言つた通りの結末になりましたね」

「い、一体何を言つているの？」

「独りよがりな愛情はもはや罪です。貴方は業が深すぎるのです。
賽の河原で、永遠に色付き人形を斜塔に積む作業を繰り返すと良い
でしょ？」

「 ひみ、ちみつと」

「それでは、やよいなら。向こうでもお達者で」

ポチッと大きなボタンを押す闇魔。パカッと開く床。ヒューと落ちる私。

これはいわゆる落とし穴という装置だ。
今起きていることが夢であることを心から願いつつ、
私は更に深い闇の中に墮ちていくのだった。

真・親馬鹿花妖怪 おわり

・四季映姫・ヤマザナドウ

白黒はつきつづける程度の能力

第五話 逆転のない裁判（後書き）

異議あり！

第六話 賽の河原なう

『おわり』とかこの前言つたような気がするけど。
『めんなさい。あれはウソだったわ。
もうちょっとだけ続くのよ。』
だからお願ひ。この悪夢から、誰か助けて頂戴。

・賽の河原？

ひとつ積んでは娘のため、ふたつ積んでは娘のため、みつつ積んでは……。

目の前の河を虚ろな瞳で見つめながら、ひたすらに指を動かす。

また今日も、人形を斜塔にひたすら乗せる作業が始まる。

この作業に一体なんの意味があるのか。

余り考えたくないが、きっと何の意味もない。

「おーい、ブツブツ独り言呟いてる暇なんかないぞ。
さつさと人形を塔に積むんだ。さあさあ！」

酒臭い息を吐き散らしつつ、私に命令してくる子鬼。

「いやかなんで、こいつがここにいるのだろう。

意味がわからない。同じ鬼とはいえおかしいでしょ。」

貴方はお山の鬼さんじゃない。

地獄の鬼さんじゃないのよ。

「いやなに、面白い妖怪がここにいるって紫に聞いてさ。居ても立つてもいられなくなつてやつてきちゃつたよー! えーとなんだつけ。そういう、短期アルバイトつてやつれ!」

ハツハツハツと豪快に笑いながら私の肩をバンバン叩く、泥酔した2本角。

その勢いは凄まじく、私の身体はその度にグラグラと前後に揺れる。せつかく積んだ人形が、ボロボロと零れ落ちていく。また一からやり直しだ。

「それにして、親馬鹿が酷すぎて地獄行きつて。

「 プツ。前代未聞だよ本当。

聞いた瞬間、息もできないくらいに大笑いさせてもらつたよ。

天狗も馬鹿笑いしながら、新聞を狂つたように配つていたし!」

そんなことを聞いても全然嬉しくない。

恥ずかしくて、もう外を歩けない。

娘にも合わせる顔がない。

「アンタの娘は元気に暮らしているから、心配しないでドンドン積んでおくれ。

魔理沙が妹みたいに可愛がつていてるから。靈夢もなんだかんだで気にしてるみたいだし。

つこでにまつと、私もせつとき瓜を食べなせり。」

萃香が西瓜を食べるつてー 共食いかよー と親父ギャグで腹を抱えている。

私は腸が煮えくりかえりそうだ。

言つてやつたといつ得意氣な顔が瘤に障る。

そんな私の心情を、全く理解できない小鬼が『太話を続ける。

「だからさ、アンタはどんどんその塔に積んどくれ。
その色つき人形を、ゆっくりあせらはず、それでいて正確に素早くねー。
全部積み上げても何の意味もないけどさー。」

思わず人形を握りつぶす。

粉微塵にしてやつたら、少しだけ気分がよくなつた。
と同時に私の頭に人形が落ちてきた。
なるほど。壊したり、なくしたりしても誰かが補充してくるようだ。
まさに至れり尽くせり。

「ハハハ。ちゃんと見張つてるから無粋な真似は駄目さ。
破壊しても、直ぐに補充してあげるよ。安心してくわー。」

瓢箪をラッパ呑みして、陽気にはしゃぐ馬鹿鬼。

「まあ幽香もさ。子離れする良い機会だと思つてみなつて。
もつ2度と会うことはないだらうけどさーー。
親が無くても子は育つてね。人間も良いことを言つもんだよー。
ワハハハハ！」

ハハハこやつめー と私の背中をせらうと思いつきり叩く。もうこれでもかとこうほど。

「この所業、まさに鬼か悪魔のものである。

「ちよつ、ちよつとお願いだから握り砕かないで頂戴！
また最後の一體で崩れ落ちるわッ！…」

『 香一 幽香起きて…』

「つるをこわね！ 今集中しているんだから放つておいて…
あと一択だけなのよ…」

『 こつまで寝ぼけているの。 いい加減目を覚まして…』

……え？

「……え？」

私は思わず疑問の声を呴く。

妙に聞き覚えのある声がしたからだ。

「『……え？』じゃないよ幽香。3日間も魔されながら寝続けるなんて、頭おかしいよ。

人形がとか、塔が崩れるとか、鬼のような形相で呴いてるし。見えていて鳥肌が立つかと思つたよ」

あれが鳥肌が立つという感覚なんだ、と頷いている毒人形。台詞にもさりげなく毒が混じつてゐるよつだ。

ああ、ここは天国だらうか。鈴蘭香る我が友人の声が聞こえる。いっぱいいっぱい人形を積み上げたから、きっと天国に繋がつたんだ。

これから私は鈴蘭畠の真ん中で穏やかな眠りにつくのだ。

「『めんなさい、メディスン。私、少し疲れたの。だから、もう少し眠らせてくれる？』

再び瞼を閉じよつとした瞬間、首根っこをつかまれて引き起こされる。

意外にパワフルな人形だ。

「何言つてゐるの幽香。いくら年寄りだからって、我慢は許されない

よ。

起きたらまず顔を洗つて歯を磨く!
子供じやないんだから

また悪口が含まれていたような気がするが、今はスルーしておく。言わされた通りに起き上がり、ふらふらとよろめきながら洗面所に向かう。

私は自由なのだから、もう一度とやくなぐて長いのだから、あの、何の意味もない人形積み作業を。

「そうそう、幽香宛に伝言を預かってるよ。美咲からね。しばらく魔理沙の家に泊めてもらうから、後はよろしくって。着替えとかも持つてたみたいだよ」

メディアが何を言っているのか即座に理解できない。

魔理沙の家に泊まる?

一
傳
記
大

なんで。

弾幕特訓の為

100

其、里、助サ益ナリば、分分娘バア

は、早く助けなければ、むむむ娘がタラシの毒牙に!!」

私は髪を振り乱しながら絶叫する。

「……行き先は聞かなくてもわかるけれど、『はんを食べてからね』

「え、ええ、そうね。貴方の言つ通りだわ。

急がば回れというものね。だ、だから瘴氣を引っ込めて頂戴」

何故かヒリヒリする額を私は擦る。

どこかでぶつけたのだろうか。

「もう出来るから、今すぐ用意するね」

瘴氣を発しながら、近づいてくるメディスンに思わず頷いてしまった。

まあ良いわ。

腹が減つては戦はできぬと言うものね。

いつかあの閻魔は泣かす。ついでに子鬼もよ。

・伊吹 萃香

密と疎を操る程度の能力

密度を操る程度の能力

・メディスン・メランコリー

毒を操る程度の能力

毒を使う程度の能力

第七話 踊る毒人形

『到着つと。ここが霧雨魔理沙邸だぜ。遠慮せず入つてくれ』

魔法の森、霧雨魔理沙の住処。

幽香の娘を簫に載せて、全速力で帰つてきた。
あまりの速度に、風見美咲は少し戸惑戸惑としている。

『はい。ありがとうございます。

でも母様は大丈夫でしょうか。少し、心配です』

無表情な顔を、少しだけ曇らせる。

魔理沙は安心させるように満面の笑みを浮かべた。
後始末はしっかりと頼んであるのだから。
暫くは邪魔が入る心配はない。

『なあに大丈夫さ。ちゃんと世話を手配してあるんだぜ。
今頃は良い夢を見ているはずさ。これから3日間くらいな

帽子のずれを直すと、魔理沙は美咲の手をとり、
家へと入つていく。

まずは色々と話を聞くことから始めようと、魔理沙は考えていた。

メディスンが用意してくれた美味しいご飯を食べ終えて、私は一息つく。

黄金の一時、コーヒー・ブレイクとこりやつよ。

背もたれに寄りかかり、コーヒーを飲む

せつせつと後片付けをしているメディスンを、遠目に眺めながら考える。

業火のように燃え滾る怒りをなんとか押さえつけ、冷静に物事を考えるのだ。

すぐに娘のところに向かわなければならない。それは当たり前のことで。

だがその前にひとつだけ、確認しなければならないことがある。とても重要なことだ。

「ねえメディ。貴方が起こしてくれた時の事なんだけど。

ものすごい勢いで、私の顔を叩いていななかつたかしら。

これでもかというぐらいノリノリで」

頬を軽く撫でながら、努めて笑顔を作る。

油断すると素の表情に戻つてしまいそうだ。

「そ、そんな」とするわけないじゃない。やだなあ幽香。
ちゃんと優しく声を掛けて起こしたよ。本当、心配したんだからね」「

「コリと微笑みかけてくる。天使みたいな笑顔だ。
いや、墮天使だつただろうか。
この顔に騙されてはいけない。」

「あらそ。勘違いかしらね、私の顔に赤い痕があるのは。
貴方が以前の恨みを晴らすべく、今が好機とばかりに殴つていた。
なんてことはあるはずないわよねえ。そうよね、メディ」

拳をポキポキと鳴らしてみる。

何もうしろめたいことがなければ、

卷之三

うん間違いなーよ。だつて私がそんな酷こじりをするわけないしー。」

そう言って、そそくさと食器を台所に持つていくメディスン。話がこれで終わつたとしても思つていいのだろうか。

私は音を立てないようにその後を追い、毒人形の背後にそつと立つ。ついでに可愛らしい頭を、リボンの上から思い切り齧掴みにしてやる。

驚いた拍子に毒の瘴気が勢い良く漏れてくるが、今の私には全く通用しない。

「ねえメディスン。

何ともないのに、3日間も寝続けるなんて『おかしい』と思わない

かしら。

私はおかしいと思うわ。とても不思議に思うの。
あなたは変に感じない？ 奇妙に思わない？ ねえ、聞いてる？」

少しづつ万力のように力をこめていく。
締め付けるよ。じわりじわりと。

「い、痛いよ幽香！ ほ、本当に私は何も知らないよ。本当だよー。」

無実であると、両手をジタバタとせわるメディアスン。

「私は、変じやないかと聞いているのよ。質問に答えなさい」

「ゆ、幽香最近疲れてたから。全然不思議じゃないし、奇妙でもないよ！」

だ、だから手を離してっ！

これ以上やるなら美咲に言いつけるからね！」

更に暴れる毒人形。毒が威嚇の為に凄まじい勢いで噴出される。
部屋が毒で充満してしまった。往生際の悪い。

娘に言いつける？ 終わった後もその元気があれば良いのだけど。

掴んでいる手の力を更に強め、顔を強引にこちりへと向けさせる。

「私が優しく笑っている間に全てを話しなさい。

今なら普通のお仕置きで済ませてあげるわ。

後5秒以内に吐かないと、貴方が花畠を滅茶苦茶にした時と同じお仕置きをする。

一晩中、延々と実行するわ。貴方が泣いても叫んでも喫いても、絶対に許さない」

最後の宣告を告げ、攻撃的な笑みを毒人形に向けてみる。
メディスンは身体を震わせて、顔を見る見るうちに青くさせむ。

「あ、アレは嫌だよ！ お、お願ひ許してっ……」

「5」

「ほんのちょっと魔がさしただけ。ね？」

「4」

「力、カウントするのをやめて！ ゼ、全部話すからっ！」

「3」

「い、これを使つたんだよ！ めんなさいっ……」

慌ててポケットに手を入れ、震えながら私に小瓶を差し出す。
瓶には黒い丸薬が3粒入つてゐる。……何かの薬だらうか？

「……誰に頼まれたの。霧雨魔理沙かしら？」

「う、うん。でも魔理沙はこっちの赤い方を数粒飲ませてくれつて。
良い夢が見れるから、気分がスッキリして疲れが一気に吹つ飛びつ
て」

「へえ」

そう言つと、反対のポケットから赤い丸薬が詰まつた小瓶を取り出

す。

私はそれも受け取り、光に翳してみる。
こちちは新品で、使われた形跡はない。

「それで、疲れて気絶してゐる幽香に飲ませてあげようとしたの。
そしたら八雲紫がいきなり出てきて。
こっちの黒い薬の方が幽香は喜ぶつて。だ、だから私は本当に良かれと思つて」

どうやら呑いたのはただの悪ふざけで、この薬を飲ませたのは、本当に私を心配してくれてのことらしい。

問題はこの薬の正体だ。魔理沙の『良い夢を見られる』という台詞から推測すると、

この赤い丸薬は『胡蝶夢丸』と呼ばれるものだらう。
服用すれば、数粒で良い夢を見ながら眠りにつくことが出来る。

では、あの不愉快な隙間婆の渡した、この黒い丸薬はなんだらうか。
まあ大体の予測はついている。が、念のために確認しておこう。
勿論実際に使つてだ。

「良く話してくれたわね、メディ。本当に偉いわ。

……ところで、この黒い薬をどれくらい飲ませてくれたのかしら。
赤い方はこんなに入つていて、黒い方はもうたつたの3粒しか
ないの。

数粒で効果は出るのでしょうか？ 不思議ねえ

話しかけながら、小瓶を開け黒い丸薬を手にとる。

「うん。沢山飲ませたら、もっと効果が出ると思つて。
紫も『それは良い考えね』って言つてたよ。

だから、幽香の口に、もつじれでもかとこつぜび詰め込んだの…」

「 そつ。それじゃあ貴方にも、私と同じ幸せを味わつてもうおうかしら」

黒い丸薬を強引に、毒人形の口に放り入れて飲み込ませる。しつかりと飲み込むのを確認した後、解放してやる。

「 うへ、い、いきなり酷いよ幽香。……ちやんと謝ったのに」

涙田の毒人形メディスン。

ほんのちょっとだけ罪悪感に襲われるが、済んでしまったことは仕方ない。

未来志向で生きなけば駄目だ。

「 もう許したわ。驚かせて本当にじめんなさいね。少し休憩しましょうか。

ほら、なんだか眠くなつてきただんじやないかしら?

さあ、ベッドに行きましょうね

メディスンの手をとり、寝室に連れて行く。

お仕置きとしては温いけれど、今回はこれくらいで許してあげることにする。

悪戯ばかりするが、そんなに悪い奴ではない。

それに、娘の良い遊び相手でもある。

激しく魔されているメディスンにタオルケットを掛け、私は出撃の準備を整える。

クローゼットの奥の方に隠してある、細長い箱の鍵を開け得物を手に取る。

これは優雅な装飾のついた日傘ではなく、相手を撲殺することを目的に作成した特注の日傘だ。

遙か遠い昔、数多くの人妖に血の花を咲かせてきた逸品である。当然娘には見せたことなどない。知らなくて良いこともある。

準備を終え勢い良くドアを開けると、紫リボンのついた『巨大な隙間』が私を出迎えた。

あちらも、どうやら私と同じくお話をしたいらしい。とても好都合である。

「フフッ。丁度私も貴方に用があつたの。ゆつくりとお話をしたかったのよ？ ゆつくりとね」

日傘をクルンと回転させ、隙間の中に飛び込む。

溢れ始める殺氣を、抑えることが出来ない。

あの糞婆とは、一度本気でケリをつける必要があると思つていた。丁度良い。この機会にそつ首叩き落してやるとしよう。

蝴蝶夢丸

蝴蝶になつた自分を楽しむといつ意味で名付けられた赤い丸薬。
寝る前に数粒飲むと悪夢を見ることなく、楽しい夢を見ることがで
きる。

蝴蝶夢丸ナイトメアタイプ

スリーリングな悪夢を見て驚かれることが出来る黒い丸薬。

第八話 柚榴の娘（前書き）

時間軸は、幽香が魔理沙との勝負に負けた後です。

第八話 柚榴の娘

文々。新聞 号外

『風見幽香氏、危篤状態！？ 関係者に直撃取材を敢行！！』

先日お伝えした風見幽香氏に関連するニュースだが、急報が入った。関係者の話によると霧雨魔理沙氏との一戦後、危篤状態に陥っているというのだ。

記者も事実を確認しようと、風見氏の自宅を訪ねたのだが全く反応がなく、手がかりを掴むことができなかつた。流石に自宅に侵入するのは躊躇われた為、

事情を良く知ると思われる人物に話を聞くことにした。

風見氏と親しい毒人形のM氏によると

「……幽香はね、ちょっとだけ眠つているの。

楽しい夢を見るとと思うから、そつとしておいてあげて」と悲しそうに語ってくれた。

風見氏の大親友だと自称する、妖怪の賢者Y氏は

「今頃せつせとお人形を積んでいるところじゃないかしら。フフフ

と意味深な台詞を残し、去つていった。

風見氏の娘と噂されている人物の行方も、現在の所は分かつておらず、

事態は混迷としている。

我々としては、一刻も早い風見氏の回復を祈るばかりである。

(射命丸 文)

・霧雨魔理沙邸

「よし、まずは服を取り替えるとするか。
何事も形から入らないとな。

私のお古があるから、暫くそれを着ていってくれ。
今度ちゃんと新しいのを用意するからさ」

「ほれ、魔理沙は黒い魔女服を放り投げる。
とんがり魔女帽もセットだ。

それを手に取り、美咲は興味深そうに観察している。

「ありがとうございます。魔理沙さん」

「なーに。礼は良いってことさ。
わ、ひとつと着替えて来てくれ」

「分かりました。隣、お借します」

美咲は奥の部屋に行き、着替えを始める。
幽香とお揃いのチェック柄の洋服は、
丁寧に置んで鞄にしまっておく。

着替え終わり鏡を覗くと、そこには小さな魔女が映っていた。
魔理沙のように、白いエプロンはついていない。

黒一色の、魔法のローブである。

「そろそろ着替え終わつたか？」

ドア越しに聞こえる魔理沙の声。

「はい、終わりました」

「どれどれつと。おおー似合つてゐるじゃないか。
これで立派な見習い魔女の出来上がりだぜ。」

今度魔女同盟を結成して、お茶会をすることにこゝつ

そつと、美咲の頭に特徴的な帽子を乗せた。

「私似合つてますか？」「ふふふ」

口元を歪ませて、うふふと笑い始める美咲。

幽香ばりの凶悪な笑みに、魔理沙の顔は引き攣つた。

その笑い方に、忘れない過去を思い出してしまつたこともある。
いわゆる、黒歴史といつやつだ。

「そ、その笑い方はあまり宜しくないんだぜ。
頼むから、いつも通りにもどつてくれ」

「どうかしたんですか？」

いつもの表情に戻り、首を傾げる。

魔理沙は引き攣つた顔をほぐそと、手で頬を撫でてこる。

「い、いや。ちょっと消したい過去を思い出してな。

そんなことより。後で魔力を込めた箋かデッキブラシを作つてやるぜ。

まだ飛ぶのに慣れてないみたいだし」

「……箋は分かりますが、デッキブラシで空を飛ぶんですか？」

「由緒正しい見習い魔女は、デッキブラシでも空を飛ぶんだぜ。その場合、赤いリボンは必須アイテムだな

」

胸を張つて得意気に笑う魔理沙。

紅魔館の図書館で見た文献に載つていたのだ。

勿論その本は参考の為にしつかりと借りている。

当然返していいない。

「じゃあ早速、座学から始めよつかといいたいところだが……。

ひとつ、聞きたいことがある。

とても大事なことだ

魔理沙は話しながら、椅子に逆側に座る。

先程までとは違い、真剣な表情で美咲を見つめる。

「……なんでしょうか？」

「なんだつてそんなに弾幕」この特訓をしたいんだ。

あいつだって超親馬鹿とはいえ、少しずつ教えてくれるはずだぜ。わざわざ妖怪が人間に頼むことなんかないんじやないか？ しかも、よりによつて靈夢に頼むなんてな」

あの巫女様が教師役なんて、天地がひっくり返つても無理だぜと手を大袈裟に振る。

「…………」

「答えたくないのか？」

「勝てるかもしれないから」

「ん？ なんだって」

「力の弱いものでも、対等に闘える弾幕『』」なら、
私でも、母様に勝てるかもしれないから」

魔理沙に答える。

その拳は強く握り締められている。

「……成る程、母親を乗り越えたいか。
熱いねえ。嫌いじゃないぜ。」

そういう話は、私は大好きだ」

椅子の背もたれに腕をついて、うんうんと頷づく魔理沙。
美咲はさらに騙り続ける。

「母様を私は越えたいのです。

そうすれば、私はようやくこの世界で自分の存在を認めてもらひえる。
母様もきっと、私の事を認めてくれる。
分かりますか、魔理沙さん」

「そ、そつか。でもアイツだって別にお前を認めてないわけじゃ

」

「認めてないですよ」

言葉を遮り言い捨てる。

「…………どうしてうつんだ？」

「今のお私はただのお人形。愛玩動物のよつなものです。私は、母様に一人の『妖怪』として認められたいのです。そつしなければ、私は」

無表情で淡々と語る。

魔理沙は背筋に少しだけ寒気が走るのを感じた。

「…………深く考えすぎだと思つがなあ。
もつと明るく生きないと、人生面白くないぞ？」

「…………」

「ま、そつこつた事情で私に特訓を受けたいと言つ訳だ。

弾幕」)つこで実力を見せ付ける。

自分もこれだけ出来るんだぞと、アイツに認めさせたいわけだ」

幽香が聞いたら卒倒するんじゃないかと思う魔理沙。
なんだか複雑そうだなあと思いながらも、それは口には出さない。

確認の言葉に、美咲は首を縦に振る。

「はい。その通りです」

「なるほどね。大体わかつたぜ。
やつぱりちゃんと話してみないと、人は分からぬもんだな」

頭を深くさげた拍子に、とんがり帽子が転げ落ちる。魔理沙さんは、立ち上がり落ちた帽子を拾う。

パンパンと埃を払い、小さな頭にヒヨイと乗せる。

「返事は前にしたはずだぜ。もう一度再確認しただけさ。
まあ私も傲慢な巫女様を這い躊躇らせるために、まだまだ修行中の身
だけどな。

お互いに目標達成のために頑張るぞ！」

白い歯を見せて、手を差し出す白黒の魔女。
美咲は力強く握り返す。

美咲は決意する。

（一日でも早く追いつけるように、これから一生懸命努力しよう。そして、良く頑張ったと認めてもらいたいのだ。大好きな母様に。そうすれば、私はこの世界で生きていくことが出来る。存在が認められるのだ）

「じゃあ町速授業にあるとしそうか。

そのうち自称都会派の性悪魔女と、

図書館の引き籠り魔女を紹介するからな。

個性的で愉快な奴らばかりだぜ」

「　　はい。これからよろしくお願ひします」

残された時間は、それほど多くはない。

掛けられた魔法は、いずれは消え去るのだから。
奇跡は長く続かない。

美咲は本能的にそれを感じ取っている。

その不吉な予感は誰にも話したことはない。

数少ない知り合いであるメディスンにも。

勿論母になど言える訳がない。

意外と精神的に脆いところがあるのだから。

泡になつて消えるのか、潰れた果実のように崩れ去るのか。
それとも最初から存在がなかつたことにされるのか。
それは神のみぞ知るという奴だ。

美咲は思考の渦から抜け出す為に、首を振る。
不安を押し隠すように、親指の爪を噛む。

自分だけが知る悪癖。母親に見つかることはない。

魔理沙にそれを見られると、誤魔化すように手を振った。

- ・柘榴

ザクロとはザクロ科ザクロ属の落葉小高木、また、その果実のこと。
花言葉は優美、円熟した優美、優雅な美しさ。

- ・柘榴の神話

积迦が、子供を食つ鬼神「可梨帝母」に柘榴の実を与え、人肉を食べないように約束させた。

以後、可梨帝母は 鬼子母神として子育ての神になった。

柘榴が人肉の味に似ているという俗説は、この伝説より生まれた。

Wikipedia先生より

第八話 柚榴の娘（後書き）

色々と事情はあります、歪んでます。

第九話 本当は怖い、まだ書

妖しげな隙間を通り抜け、見知らぬ大地に私は降り立つ。見渡す限り荒野で、生きている物の気配はしない。

幻想郷なのがも分からぬ。

辺りを注意深く見回し、警戒態勢をとる。

近くにはいないようだが、確実に奇襲を掛けてくるだろ？

……それより、さつきから何故かは分からぬが、嫌な予感がしてならない。

なんというか、既に取り返しのつかない事態が進行しているような。蟲の知らせというやつであろうか。

脳裏に浮かぶ、魔女つ娘の姿。

私はそれを強引に振り払う。

いずれにせよ、やることは唯一つだ。

嫌がらせに精を出す『怪異ムラサキババア』を成敗して、わざと娘のもとに向かつとしよう。

紫の誘いに乗つて、隙間に敢えて突入したのには訳がある。

無視して魔理沙の元に向かつた所で、必ず邪魔が入るはずだ。

ならば、ひから乗り込んで、予めケリを付けておいた方が良い。

重量のある口傘を肩に乗せてリズムを刻む。
一息ついて、いよいよ歩き出そうとした瞬間。

背後から、胡散臭い口調で声を掛けられる。

一切の気配を感じさせず登場するあたり、相変わらずの化け物だ。

「ハァイ、ゆうかりん。この3日間良い夢が見れたかしら。
ハラハラドキドキ出来たでしょ？ 高かったのよアレ」

「死ねツ！…」

私は問答無用で、振り向き様に鈍器を叩きつける。
相手の顔面に掛けて、一切の手加減を加えずに。

残念ながら潰した手応えがない。

肉を破り、骨を粉碎する独特的の感触がないのだ。

紫の顔付近に生じた隙間でガードされたようだ

そのまま強引に叩き潰してやろうと、歯を食いしばりながら妖力を籠める。

その隙に乘じて、背後に複数の隙間を展開するスキマ妖怪。
ぬめりと異質に開いた空間から、ウジヤウジヤと蠢く触手のような
ものが現れる。

使役する妖怪の性格が現れているかのよし、混沌として実に不愉快だ。

「こきなり」と挨拶ね。そんなことでは良いお母さんになれないわよ。

それより酷いわ幽香、あんな可愛い子を私に隠しておくなんて。

後でちゃんと紹介して頂戴ね？」

展開している隙間に腰掛け、口元を扇子で隠しながら優雅に微笑んでくる。

私はそれに答えることなく、バックステップで直ぐに距離を取る。触手が攻撃態勢に入ったのを確認したからだ。

絡め取られると厄介。相手をさせる下僕を呼ぶことにしよう。

左手を地面に思い切り叩き付け、能力を発動させる。

「ハツ裂きにした後、綺麗に消化してあげるわ。

骨まで残さずにね」

大地を割り、轟音を上げながら召喚される魔界の食虫植物。薙の先が歪に割れて、鋭利な牙が見え隠れする。

目に当たる部分は虚ろに光り、その身体はゆらゆらと不気味に揺れている。

こいつは雑食だから何でも食べる。妖怪だろうが人間だろうがお構いなしだ。

早速目の前にいる妖怪を、綺麗に片付けるように命令を下す。

「魔界の薙よ。眼前の敵を喰い殺せ！－」

「そんなモノを呼び出したりしてはいけないわ、幽香。

私の愛する、穏やかで平和な幻想郷には似合わないもの」

困ったような表情で言い放つと、扇子を閉じ指を軽くパチンと鳴ら

す。

瞬間、展開していた隙間から一斉に触手が伸びてくる。包囲するように幾重にも張り巡らせ、私の食虫植物を絡め取ひとつする。食虫植物は、本能のまま唸り声を上げ、触手を引き裂きながら前進を開始する、だが、その度に隙間から触手が伸びてくる。そのままでは埒がない。

「何を考えて、あんな薬を飲ませてくれたのかしら。おかげで、素晴らしいナイトメアを楽しむことができたわよ。お礼をしてあげないといけないでしょ？ その身体にたつぱりとね」

会話をしつつ、更に植物召喚の準備を整える。次はあの隙間婆の左右と背後だ。

四方から臉いつかせて一気に終わらせてやる。流石に殺すことは出来ないだろうが、胃液まみれのべりゅべりゅにてやる。それだけであごのプライドを傷つけることが出来る。

「フフッ。怖い目ね。あの娘が見たら何て言つのかしら。やつぱり柘榴の実がないとダメみたいね。幻想郷の鬼子母神だよ」

優雅に扇子を煽ぐ紫。余裕綽々の表情を浮かべている。そのふざけた顔が、胃液に塗れるまで後僅か。実際に楽しみではないか。

「娘に関わるな。その姿を決して見せるな。

あの子に近寄る事は絶対に許さないわよ」

「そんなつれない事を言わないで頂戴、幽香。別に何かしようだなんて考えていないわ。それに、あの薬はちょっとしたイタズラみたいなものよ。別に深い意味はないのよ?」

全く悪びれる様子なしに謝罪してくれる。こいつは昔からそうだった。

意味ありげな行動や台詞を吐いて、人を煙に巻こうとする。相手にしないのが一番の対策なのだが、今回はそういう訳にもいかない。

「これが最後よ。私の邪魔をしないでくれるかしら。そして一度と娘に関わろうとするな。お願いじやなくて命令よ」

「……これでも、昔に比べたら『角』がとれて丸くなつたかしら。かつての貴方なら、聞く耳など持たずに即座に攻撃してきたもの。長い歳を経て落ち着いたのね。それは素晴らしいことよ」

穏やかに微笑む紫。

相変わらずの胡散臭い表情だ。

昔と変わらないその顔に、私は少しだけ毒氣を抜かれる。

「アンタはいつまで経つても人の話を聞かないわよね。長く生き過ぎて、耳が遠くなつたのかしら。お婆ちゃん?」

紫の言う通り、私は丸くなつたのだろうか。

昔ならば確かに、戦闘中に私から話しかけたりすることはなかつた。

長い歳を生きてきたから?
それともあの娘が来てから?
良く分からぬ。

「フフシ、相変わらずね幽香。

本当ならここで一献傾けて、昔話に花を咲かせたいといひなんだけれど。

色々とお忙しいみたいだし、ひとつゲームをしましう。
もし貴方が勝つたら、邪魔はしないと約束するわ」

魔理沙とはもつやつたんでしょ? と付け足していく。

ゲーム? なんでここでゲーム?

ま、まるで意味が分からぬ。

全然理解できない。だつて殺し合いの最中なのに。

とこうより、何で私がゲームで負けたことを知つているのだ。

「な、ななんでそこでゲームが出てくるのよ。

一度と私はやらないわよあんなもの!」

それに今は殺り合つてる最中じゃないの!—」

私には似合わないのよ、あんな安っぽい遊びは。
もつと高級で優雅なものじやないと。

といふかチャンスだ。

今下僕を呼び出せば、

確實にグチャグチャのヌチョヌチョに。

お子様立ち入り禁止のシーンを展開してやることが出来る。

「あらあら。負けるのが怖いのやうがりん?

少し見ない間に腰抜けになつてしまつて、私は悲しいわ。
臆病のことなんかどうなるうが知らない。

起きたことをありのままに、美咲ちゃんに伝えるとしましょ」

「これでもかといつほど面白可笑しけね！」と嬉しそうに微笑む若作りババア。

扇子で扇ぎながら余裕の表情。

つい殴りたくなるような、実に憎たらしい顔をしている。

それはともかく。

「ちよ、ちよっと待ちなさい」

「嫌よ。私は待つのが嫌いなのよ。まだまだ若いからね。のんびり立ち止まってなんかいられないわ。
さて、早速貴方の娘のといひに向かうとしようかしら」

「い、この糞野郎ッ！」

「どうせあることない」と、娘に吹き込むに違いないのだ。
性格が捻くれているこの糞女は確実にやる。間違いない。
昔からそうだ。

私が人妖総合友好度最低ランキングNO.1（文々。新聞調べ）に
輝いたのも、
半分以上はこいつのせいなのだ。後は天狗の捏造だ。
しかも10年連続つて。明らかに組織票が加わっている。

紫が何を言おうが娘は信じない。多分信じないと思つ。
でももしかしたら信じちゃうかも知れない。
心が素直で純真だから。

.....。

これは挑発に乗るんじゃない。敢えて乗つて上げるのよ。

私は常に冷静。冷静なのよ。

大きく深呼吸して、心安らかに。

すーはーすーはー。

よし、大丈夫。もう何も怖くない。

「わ、分かったわよ。やつてあげようじゃない。

私が臆病だなんて、ホラ話を吹かれるのもアレだしね。
それで何で勝負するのかしら。変なのは嫌よ」

「実はね、相手をするのは私じゃないの。

貴方どうしても遊びたいって子がいてね。

今呼ぶから、その子と仲良く遊んであげて頂戴な。

私はここで審判役を務めてあげるから」

扇子を閉じ、空中に向かつて合図を送る紫。
同時に重々しい口調で呴き始める。

「.....古代中国において、あまりの過酷さ故に
時の皇帝が禁止したとも伝えられる呪われた遊び。
死合いの後には、死屍累々の光景が広がつたと言つ

上空に巨大な隙間が現れ、一人の伝説の妖怪が颯爽と荒野に降り立
つ。

.....というか、私の可愛い食虫植物の上にドスンと落ちてきた。
グギヤーという絶叫と共に、下僕は昏倒してしまった。
あれでは再起不能だ。可哀想だが、冥福を祈ろう。

伝説の妖怪、『伊吹萃香』は腰に手を当て、不敵な笑みを私に向

る。

「 その名も、超リアルな鬼ごっこさー！」

どうだ！ といった顔で勝ち誇る伊吹萃香。きつと上手い事をいつたつもりなのだろう。紫は生暖かい視線を注いでいる。

またこいつの仕業か。

「…………」

一陣の風が、荒野を吹き抜けていった。
突つ込むものは誰もいない。

・人妖総合友好度最低ランディング
人間、妖怪にアンケートをとり、
幻想郷で最も恐れられる人物を選出する。

・八雲紫

境界を操る程度の能力

・マダツボミ

「うおん たじつの とがを いのむ。
ツルを のばして えものを とひぐる じめの いりぐれと
も すばやい。」

第九話 本当は怖い、まだ書（後書き）

モンジヤラ的な触手バフマダツボミさん。

第十話 一人の鬼

「やあやあ幽香。会うのは賽の河原以来だね。あそこでは中々面白い物を見せてもらつたよ」

食虫植物の成れの果てからヒヨイと飛び降り、フフフと笑う子鬼。

「あれはこのスキマが無理やり見せた悪夢のはずよ。なぜ貴方がそれを知つているのかしら」

他人の夢を覗くなんて、出来るわけがない。多分。いくら隙間でも夢の世界を開くなんて。

「なあに。少しだけだけあんたの『地獄』とやらにお邪魔しただけさ。

それに、どこまでが夢かなんてどうでもいいじゃないか。人生なんて『蝴蝶の夢』みたいなもんさ。なんてね

我ながら上手ことを言ひ、と満足そうに頷いてガブガブと酒を呑む。

酒の臭いがここまで漂い始めている。

萃香は更に続ける。

「それに今起きていることも夢かもしねない。

本当のあんたはまだ寝ているのかも。それとも無闇地獄に落ちたのか。

はてさて、どうだらうね

「馬鹿も休み休み言ひなさい。鬼の寝言など聞きたくないわ。それより早く勝負の内容を教えなさい。夏らしく、『西瓜割り』なんかどうかしら。

もちろん西瓜役は貴方よ」

思い切り田舎でぶん殴つてやるわ。

赤い飛沫が飛び散るくらいに。

鬼は中々しぶといから、本氣でやつても『多分』大丈夫だらう。

「くふふ。まあまあそう慌てなさんな。そんなに急いだりしたら、鬼が笑うよ」

「……鬼は貴方でしょ？」超リアルな鬼「」ですって？「」で仲良く追いかけ「」でもするつもりかしら。馬鹿馬鹿しい

本当に馬鹿馬鹿しい。やつ「」のは妖精達とやつていれば良いのだ。

。脳内お花畠で好きなだけ飛び回つていれば良い。

「んー簡単に言つとそうだね。ただし鬼はあんただよ。

逃げる私をガツチリと捕まえればあなたの勝ち。触れただけじゃ駄目だ。

力尽きて、あんたが諦めれば私の勝ちだ。勿論反撃はするよ」

「…………なんで私が鬼をやるのよ。全然意味が分からない。鬼「」こなら、貴方が鬼役を務めるべきでしょ？」

酒の飲みすぎで、思考が停止しているのではないだろうか。

やはり酔っ払いなど相手にするのではなかつた。

「いやいや。これからあんたは『鬼』になるよ。間違いない。私は嘘をつかないんだ」

そう言つと、萃香は紫に横田で合図を送る。

それに答えるように指を鳴らすと、新たに隙間を開ける。

隙間はまるで水面のように、波打つていて。

どうやら特殊な隙間のようだ。

しばらくすると、その水面は『映像』を写し始める。

そこに映つていたのは私の娘。

魔理沙とお茶を飲んでいる美咲の姿があつた。

「み、美咲？」

「 そうあんたの愛する娘だよ。賭けるものはそれだ。人攫いは鬼の本分。それが妖怪だつが関係ない。

泣き叫び、悲嘆にくれるあんたを肴にして飲む酒は、さぞかし美味だろうねえ。

想像しただけで涎が出てくるよ」

挑発するよつに私に笑いかけてくる鬼。

私は殺意を露にして警告する。

「あの娘に手を出したら、本氣で殺すわよ」

「いいねえ、ゾクゾクしてきたよ。あんたときたら私が喧嘩を申し込んでも、

まるで相手にしてくれないからね。だからいつしても一撃で打つてみたってわけさ。

鬼は嘘をつかない。お前が諦めたら必ず攫う」

「フフフ、素敵ねえ。娘を助けるために鬼と鬼が勝負するなんて。萃香じゃないけど、私も年甲斐もなくドキドキしてきちゃったわ」

扇子で煽ぎながら、高みの見物を決め込む隙間妖怪。私は横目でジロリと睨む。

「攫つたらどうしようかね。じつくつと甚振りながら、喰つてやろうか。

まだまだ幼くて、実に柔らかそうだ。そもそも美味しいだろうね・・・

・・・つとー

戯言を言い切らせる前に距離を詰め、日傘を上段から振り下ろす。最早我慢の限界。頭を豪快に叩き割つてやるつもりで、全力で攻撃する。

鬼は左腕でそれを弾き返すと、右でカウンターの拳を入れてくる。轟つと唸りをあげる鉄拳。まともに食らつたら致命傷を負いかねない威力だろう。

私はすんでのどこかで回避し、渾身の力を込めた突きを放つ！

「 ッ！ 流石にやるねえ。
面白くなってきた。」つとなくちや

腹部に直撃させ、吹っ飛ばすことに成功したが、まるで堪えた様子が見えない。流石は鬼といったところか。

「死になさい」

傘を鬼に向け、抜き打ちで妖氣弾を連射する。

いつもの手加減した弾幕ではない。殺すつもりで放ったものだ。鬼は避けようともせず、片腕でそれらを弾き飛ばした。

「最初はさ、本当に軽く追いかけっこでもするつもりだつたんだよ。でも気が変わつた。弾幕じつこもあればあれで面白いが」

そう言つて一息付くと、両拳をバンッと叩き付ける鬼。打ち付けた拍子に大気が振動するのを感じる。

「単純な殴り合いも私は好きだね。実に分かりやすい！」

特にあんたみたいに、本気で殺しに来る相手が一番楽しいよーー！」

「そんなに単純だから、毎回人間にしやられるのよ。大江山の出来事をもう忘れたのかしら？」

恥を知つたら、他の鬼みたいに地底に引き籠もつていなさい

会話を交わしつつ、少しだけ右後方に移動する。そう少しだけ。

私の粗いを悟られなによつて。

「私はあいつらみたいに、ウジウジしているのが大嫌いなんだ。こうやって好き勝手に暴れまわることこそ、妖怪の本分つて奴じゃないか。

さあ、もつね喋りはお仕舞いだ。楽しい喧嘩を再開しようじやないか！」

ブンブンと拳を回し、私目掛けて、直線に突進していく馬鹿鬼。既に、最初に自分で言つたルールを忘れているらしい。

フフッ。思わず笑みがこぼれそうになる。

全て私の計算通り。

「掛けたわね。必ず直線上に突っ込んでくると思っていたわよ。馬鹿がつくほど分かりやすいからね。貴方たち鬼といつのは」

日傘を勢い良く地面に突き刺し、一斉に下僕を呼び出す。

「ぬおつー。なんだこいつらー。」

「私の可愛い下僕よ。素敵でしょ。」

現れたのは紫戦において、地中に展開しておいた食虫植物3体だ。こんなこともあろうかと、密かに移動させておいたのだ。

後は私が位置を微調整すれば下準備は完璧。

幻想郷の今孔明を名乗れるかも知れない。

……と、いうわけで哀れな子鬼は、食虫植物の蔓によつてグルグル巻きにされている。

3体による拘束なので、それはもうすげること。

まだ胃液は掛けていない。

「うぐつつ！ なんだこれ千切れないと！」

たかが植物の蔓如き、真なる鬼の力をもつてすればつ

『我が左手に封じられし鬼よ、今こそその力を示せ！』
と意味不明な叫び声を上げるが、実に無駄無駄無駄無駄。

「無駄よ。力だけでは簡単には引き千切れないとわよ。
頭を使わないとね。頭を！」

勝利を確信した私は、グルグル状態の子鬼の方へ近づく。
手も足も出ないとはこのような事をいつのだろつ。
実に愉快な気分である。

「馬鹿を言いなさんな。私が本気をだせばこんなもの……こんなも
のッ！」

つて、おかしいな。なんだか力が入らないぞ。

それになんだい、このへンテコリンな粉みたいなのは」

顔が濡れてしまつて力がでないよ的な、情けない表情を浮かべる子
鬼。

残念ながら、新しい顔は届かない。残念。

「勿論、さつきから強力な痺れ粉を撒いているのよ。

鬼には効きにくいと思って、貴方は特別にいつも3倍。
心配しなくとも大丈夫。『多分』命には関わらないわ。

……まあ『鬼さん捕まえた』わよ。これでゲームはお仕舞いね

鬼の頭を力強く掴む。普通の人間ならば、頭部が粉碎できるぐらい
の力で。

「そ、そんな汚いぞ！ こんな不完全燃焼じや全然納得行かないよ。まだ始まって10分も経っていないじゃないか！」

おい紫、もう一度仕切りなおすから助けておくれよ。つて、既にいねええええええ！」

出口ひしき隙間を開いたまま、怪異ムラサキババアは姿を消していった。

相変わらず勘の良い女だ。

「……とにかく、貴方さつき、面白いことをほざいてくれてたわよね。

なんだつたかしら。良く思ひ出せないのだけれど。

誰を貪り喰らうつて？」

ポンポンと子鬼の頭を軽く叩いた後、ゆつくりと撫でてあげる。ありつたけの力を込めて。

「ハ、アハハハ。冗談に決まってるじゃないか。

ちょ、ちょつと盛り上がるよつて、演じてみせただけだよ。

嘘じやなくて、お芝居つてやつて！」

引っ掛けたねハハハ、と引き攣った笑みを漏らす子鬼。

「あらあらそりうなの。迫真の演技で思わず信じてしまったわ。幻想郷一の役者ねえ。騙されちゃうとこひだつたわ」

両手で萃香の顔を、優しく包みこむように撫で回してあげる。ふふふ。

「そ、そうだらう。だから早く開放しておくれよ。
急いでいるんだらうし、こんなことしてゐる場合ぢやないはずだよ。
私に構わぬ行つておくれよ」

よ。一あの悪夢から目覚めたときね。貴方を必ず泣かすと誓つたの

「だから、ゆつくりと時間を掛けて苛めてあげるわね」「私はね、言つた事は必ず守るようにしているの。」

「そう宣言し、両手で子鬼の柔らかそうな頬を思いつきり引っ張る。ぐいーっと、それはもうものすごい勢いで。萃香の頬は餅のように伸びていく。

少しだけ涙をこぼしている可哀想な子鬼。本当に可哀想で心が痛んでしまうわ。フフフッ。ダメよ幽香。笑つたりしてはいけないわ。これは躊躇なのだから。

「まだまだ元氣が有り余つてそうね。

「楽しみにしていなさい」

悪い子にはきちんと、骨身に染み入るまで、

アリウマになるくらいのお仕置きをしなければいけないわ。」
「うう、悪ガキは、もう嫌といつほど分からせてやらないと駄目だ。

「わ、私のそばに近寄るなあ――――――ッ――！」

「だがお断りよ。『めんなさい』ね？」

第十一話 白黒と七色と見習い娘

・アリス・マーガトロイド邸

「どうだ美味。なかなかイケるだらう」の紅茶。
味について奴も黙ると評判なんだぜ」

「コーヒー やお茶も良いが、紅茶もいける。
美味けりや何でもOKが私のポリシーだ。
ソファーに腰掛け、優雅に香りを楽しむ。
お茶請けのクッキーも中々美味い。
恐らく手作りだらう。この完璧超人め。

「なぜ貴方が威張つているのか、意味がわからないのだけど。
特に用が無いなら、それを飲んでやつたと帰つて頂戴」

まるで興味なさそうに、本当に目を落とすアリス・マーガトロイド。
人形と魔法だけが友達の凄い奴だ。
私もちょっとぐらいは友達のつもりだけれども。

「相変わらず愛想がないなあ。自称都会派魔法使いさんは」

「でも本当に美味しいです。アリス・マーガトロイドさん」

舌を噛みそりになりながら、アリスを褒める美咲。
……パチュリー・ノーレッジも噛みそりな名前だな。

「……アリスでいいわよ。褒めてもらつて、悪い氣はしないわ。
さあクッキーも遠慮せずに食べなさい」

空になつたカップに、人形を操作して注ぎ足す。

本当に器用なもんだ。まさに職人芸だ。

……華麗に自爆せたりもするけど。

「お前も子供には甘いんだな。新しい一面を発見した氣分だぜ」

「貴方も十分に子供だから心配いらないわ。

はい、キャンディーをあげましょ！」

私の手をとり、反応する前にキャンディーを握らせてくる。
つい受け取つてしまい、顔が真つ赤になる。

「いらん！ 私は子供じやないからな。ほれ美咲、有難く受け取れ

自分の分と合わせて美咲にポイッと渡す。

「あらがとうござります。魔理沙さん」

包みを開けて、口に頬張る。可愛いやつめ。
ツンツンとほっぺをつついてみる。
眉を顰めるが、なすがまだ。

「相変わらず堅苦しいなあ。同じ釜の飯を食べて、
一緒に風呂に入つて、同衾した仲なのに。
そこは親に似ず生真面目なのかな」

「……貴方、やつぱりそういう趣味があつたのね。

しかもこんな年下相手に。まさに外道ね。
これ以上罪を重ねる前に、私が楽にしてあげるわ」

ジロリと氷のような視線を向けてくる、七色馬鹿。
包丁を持った人形が、ゆらりゆらりと近づいてくる。
呪いの市松人形みたいに、髪がヤバイことになつてゐる。
夜見たら悲鳴を上げること間違いなしだ。

「何を盛大に勘違いしているかは知らんが、程々にしておけ。
子供が見ているぞ」

「冗談よ」

人形が再びポットに持ち返る。
未だ凶器を隠し持つているとこりが恐ろしい。
しかも髪が戻つてない。

「お前の冗談は笑えないんだ」

「それは御免なさいね」

「……お一人は本当に仲が良いんですね。見ていて全然飽きません。
これが腐れ縁つてやつなんですね。母様が言つていました」

「貴方、大人しそうな顔して結構言つわね。
母親似かしら」

「ああ、こいつはこう見えて熱血娘だぞ。
何しろ、親を超えるために修行を申し出るくらいだからな。
魔女になる素質はばつちりだぜ。妖怪だけど」

「それでお古の魔女服を着せてあげたのね。
ウフフ、可愛」とこりあるんじゃない」

「う、うひひさいな。その笑い方はやめろ」

誰にでも触れられたくない過去はある。
いわゆる黒歴史というやつだ。

「まあいいわ。それで結局何の用なの。
愛弟子を連れての挨拶周りかしら?」

「まあそれもあるんだけどな。

お前の人形捌きは見ているだけでも楽しいからな。
美咲にゆっくり見せてやりたかったのさ」

ふと横を見ると上海人形を抱いて、ソファーでうたた寝をしている
魔女つ娘。

今日は朝から座学に、弾幕実習、きのこ栽培とハードだったしな。
子供にはちょっときつかったか。

気が付くと、アリスが真剣な目をしてこちらを見詰めていた。

「……・ひとつ質問して良いかしら。
なぜこの子を弟子にとったの。

貴方、自分の修行で一杯一杯だったじやない。
それとも今後の成長に見切りをつけたの?」

「いや、私は常に目標に向かつて邁進している。
今も昔もこれからも変わることはない。

……ただ

「ただ？」

「なあにそんな複雑な話じゃない。

ちよつと前、私が幽香と弾幕ごっこで勝負してゐる時、
こいつと田が合つただけさ。そんときは誰かは分からなかつたし
すぐに幽香の奴に吹つ飛ばされたからな」

あいつ、いきなり取り乱したかと思つたらマスパ連続でぶつ放しや
がつて。

相当娘を見られたくなかったらしい。

どこまで箱入りにするつもりだったのや、

「田が合つただけで、貴方は弟子ことの？」

「違う。弾幕で闘つてる私達を羨ましそうな顔で、
食入るよろこびに見てたから印象に残つただけだ」

その時は、本当にただそれだけだつた。

靈夢に呼び出されて、直接話を聞いて。一生懸命頼み込む姿を見て。
魔法に焦がれて家を飛び出した、私とどこか似ていると感じてしま
つた。

まあ立場は全然違うけれど。

同情が無かつたとも言わないし、余計なお世話だとも自覚している。

「そう。まあいいわ。やるからにはちやんと教えてあげなさいよ。
途中で投げ出す程、性質の悪い物はないわ」

「へいへい。分かりましたよ、アリス先生」

優しいんだか冷たいんだか、相変わらず良くわからん奴だ。
無関心を装つ癖に、意外に首を突っ込んでくる。

「返事は一回よ、魔理沙先生。

さあそろそろ良い時間だし、晩御飯にしましょう。

今日は一人とも食べていくと良いわ。

新鮮な野菜も貰つたことだし、腕によりをかけて作るから

手をパンと叩き、人形を引き連れて台所に向かうアリス。
私も美咲を起こすとしよう。

中途半端に寝てしまつと、夜寝付けなくなるからな。

今日はいつにも増して、豪勢で本当に美味しかつたな。
アリスの奴、良い主婦になるなきっと。

「さあ美咲。そろそろ帰るとするか。

ちゃんとアリスにお礼するんだぞ。教えた通りにな

横田で合図を送ると、少し躊躇した様子を見せる。

「は、はい。魔理沙さん」

「そんなに、かしこまらなくとも良いのよ。
遠慮せず、子供らしく振舞いなさい」

苦笑しながら美咲の頭を撫でているアリス。

実はこいつは子供好きなのだ。

人里で子供相手に人形劇をやつたりしているし。
口にしたら全力で否定するだらうが。

こいつは間違いなく、子供の世話を焼くのが好きなタイプだ。

「今日はありがとうございました。……あ、アリスお姉さま」

ピシッと笑顔のままアリスが固まる。

「……魔理沙に言われたのね？」

大人をからかってはいけないわよ

あと、コイツの言つことは疑つてかかりなさい」

「とか言いながら顔がニヤついてるじゃないか。
アリスお姉さま？」

ケケケと意地悪く笑つてやる。
いつも仕返しだぜ。

「う、うるさいわね。私は貴方みたいに捻くれていないので。
それよりも、ちょっとだけ抱かせてもらつても良いかしら」

ヒョイと、美咲を抱えあげようとするアリスを全力で止める。

「アリスお姉さま？」

「お前は何を考えているんだ。
少し冷静になれ」

「そ、そつね。私は都会派ですものね」

「それは全然関係ないぞ。
まあいい。私達は帰るからなアリス。
また遊んでやつてくれ」

「ええ、気が向いたらね。
2人とも気をつけて帰りなさい。もう外は暗いから」

アリス邸を出て、美咲を篠に乗せて飛び上がる。
私が抱きかかえる態勢だ。
ふふ、本当に妹が出来たみたいだ。
いつか私も姉さんと呼んでもらおうかな。

おっと、下りないことを考えてる場合じゃない。
星空を全速力でかつ飛ばして帰るとしよう。
寝る子は育つってね！

・アリス・マー・ガトロイド
人形を扱う程度の能力

第十一話 紅白黒と鬼と見習い娘

・博麗神社

「いやー 今日も暑いなあ。 つていうかマジ暑い。
靈夢、冷たいお茶をくれ。 私は麦茶でいい」

胸元をパタパタやりながら手で汗を拭う。
本当に暑い。 今弾幕ごじつごなんかやつたら死ぬ。

美咲も暑そうだ。 流石に黒い魔女服はこの灼熱地獄ではキツい。
今度夏服verも作つてやらなければ。
アリスにお願いして。
持つべきものは友人だ。

「寝言は寝てから言いなさい。

とこりか、たまにはお賽銭でも入れてみたらどうなの。
もしくはお土産を持つてきたりね。 主に食べ物とか」

縁側に突つ伏して寝言を吐く紅白巫女。
腋が出ているくせに、暑さには弱いらしい。
懐はいつも寒いくせに。

「それはこの前、美咲が渡していただじやないか。
まだ残つているんだろ?」

「半分は塩漬けにしたわ。あれは保存食よ。
備えあれば憂いなしつてやつね」

なんという悲しい性だ、思わず涙が出る。
それでも賽銭は入れないが。全く「利益」が無さそうだし。
逆に金運が落ちそうである。

貧乏神的な意味で。

「良ければ作物を育てませんか?
美味しい物が食べ放題ですよ。
色々と手間はかかりますけど」

晴耕雨読、良い言葉だ。

靈夢に似合わないことこの上ない。

「嫌よ。面倒くさそうだし。

持つてきてくれるのは、いつでも大歓迎だけど」

……本当に駄目な女である。

しかし、こんな体たらへでありながら、異変となるとガラリと変わ
るのだ。

訳の分からぬ鋭い勘と、鬼のような戦闘能力を發揮する。
スペルカードルールの考案者にして、妖怪退治の専門家。
まさに楽園を守る素敵な巫女つて奴だ。

そして、私の打ち倒すべき目標である。

ちよつと褒めすぎたな。やっぱり腋巫女で十分だ。

「なんだいなんだい、若い連中が昼間つから情けないねえ。
もつと元気に、清清しく生きてみたらどうだい。
人生カラッと爽やかに行かないとな！」

奥から酒瓶を持つてフラフラと現れる角つき少女。
いつもと変わらず、朝から酒に溺れているようだ。
本人が言つには、酒は飲んでも呑まれたことはないらしい。

「朝つぱらから、酒を飲んでる奴に言われたくないぜ。
……ああ、それにしても暑いな。頭が茹だつてくる」

滴り落ちる汗を拭う。

身動きしていないのに、熱が籠つてくる。

ああ、チルノでもいれば良いのに。

「ふふん。この伊吹の萃香様が良いものを持ってきてあげたのに、
そんな態度で良いのかな」

勿体つける小鬼。

「良いもの？ なんだそりや」

私の言葉に、笑みを漏らすと指を鳴らす。

奥から球体状の物が「ロロロロ」と転がってきた。

妖力で動かしているのだろうか。

「ジャジャーン。夏の定番にして、果物の王様の『西瓜』だよ！
ほらほら、大きいだろー！」

緑の球体を両手で、自慢気に掲げる萃香。

なんとかの伝説みたいなポーズだ。

実にお子様っぽい。

「それはアンタのじやなくて、私の西瓜でしょ。

後で食べようと思つて、水につけて冷やしておいたのよ」

倒れ伏したまま、腕だけ上げて自分のものだとアピールする。だらけるのもここまで来ると尊敬に値する。

「しかし持つてきたのは美咲だろ。う。とこつ訳で、皆で仲良く頂くとしよう。人間、譲り合いの精神が重要だぜ」

「まあ良いけど。勿論私も食べるからね！」

全部食べたら殺すわよ」

紅白の餓鬼が何か言つてゐるが、無視をする。

「靈夢ーこれ割つていいかい？」この伊吹萃香が西瓜を割るんだ。まさに西瓜割りだ。ワハハハ！

……夏だつてのに、一瞬冷気が吹き抜けたぜ。おそらく何万回と言つてきたんだらうなあ。このダジャレ。

そしてこれからも記録を伸ばしていくのだらう。思わず目頭が熱くなる。色々な意味で。

「何言つてんのよ。割つたりしたら中身が落ちつけない！ ちゃんと切らなきや駄目よ！」

当たり前だけど、私が一番大きいやつよ」

「ツツ」ミミをいれずに、大きさを指示している。
まさにボケ殺し。

「ではこれ切ってきますね。
台所をお借りします」

西瓜を持ってヒョウヒョウヒョウと台所に向かっていく美咲。
実際に躊躇なついている。

「うーん。意外に働き者ねえ。
私の所で預かれば良かつたか。
それに畠も作ってくれそつだし」

よつやく起き上がると、大きく伸びをしつつ、美咲の背中を見送る
靈夢。

「ふふ、もう手遅れだぜ。
あいつはこの魔理沙さんがちゃんと面倒みるからな。
お前はそこでブーたれてな」

萃香も興味津々といった表情で後姿を見つめている。

「あの花の大妖の娘なんだって？
そのまま、小さくしたような感じじゃないか。
実際に興味深いねえ。ちょっと攫つてみようかな。
あいつ全然相手してくれなくてさー」

くふふと洒落にならないことを言つ。

酒が相当回ってるな。

「やめとけやめとけ。

とっても怖い母親が常に田を光らせてるからな。
……今は強制的に眠つてもらつてるが」

「……アンタのほうが、立場危ないんじゃない?
目覚めたら、物凄い勢いですっ飛んでくるわよ。
私は関知しないから巻き込まないでね」

「本当にヤバそなうら、一日散で神社に避難するからな。
まさに異変つてやつだ。おーこわいこわい」

「人の話を少しばかりなさいよ。
まあ美咲に説得してもらえば大丈夫よ。勘だけど」

まるで他人事だが、必ず巻き込んでやるつもりだ。
困つたときの巫女頼み。

と、そんな事を話していくと、美咲が西瓜をもつて現れた。

「お待たせしました。

靈夢さんが一番大きくなるよつて切つてきました

「確かに、私が一番大きいわ。
これなら文句ないわ」

「どこまでも卑しいんだお前は。
悲しくなるからやめてくれ」

「うぬせこわね」

「魔理沙さんもどうぞ」

切り分けられた西瓜を順番に渡していく。
うーむ、冷えてて実に美味そうだ。
西瓜はスプーンなんか使っちゃダメだぜ。
やはりかぶりついて食べないとな。

「うれしかった」

行儀良く手を合わせる美咲。
本当に礼儀正しい奴だ。

「はい、お粗末様」

何故か威張っている巫女様。

「お前が何かしたわけじゃないけどな」

「アンタだって同じじゃない。」

あーお腹が膨れたら、なんだかまた眠くなってきたわ

バタツと座布団を枕に、倒れるだらけ巫女。

食つたら寝る。駄目人間の見本である。

と、突然何もない空間から声が響いてくる。

「ハァイ。皆さんお揃いかしら？」

「あらあら。ちょっと来るのが遅かったみたいね。
「相伴に預かれなくて残念だわ」

神出鬼没の隙間妖怪まで現れた。

相変わらずの混沌空間だぜ、この神社は。

「なんだ紫か。美味しいお酒でも持つててくれたのかい」

瓢箪を掲げて、挨拶する鬼。

「違つわよ。ちよつと悲しいお知らせを持つてきたの。

……魔理沙、貴方幽香に『胡蝶夢丸』を飲ませるように仕組んだで
しょ」

扇子で口を隠し、伏目がちになる紫。

あつと碌でもない知らせだ。主にこいつが何かやらかした系の。
被害を受けるのは、今回ばかりはビリやう私らしげ。

「あ、ああ。メティスンに頼んでちよつとな。
で、なんでお前がそれを知つているんだ

「……ちよつとした手違いですり替わっちゃつたのよ。

『胡蝶夢丸ナイトメア』と

「お、おい！ どうい手違いでそんな話になるんだよ！ そんなもん飲ませたら、寝起き最悪確定じゃないか！」

田を爛々と光らせて、両手をだらんと前に垂らし、どこまでもどこまでも追いかけてくる花妖怪。きっと家のドアをドンドン！ と一晩中叩き続けるんだ。ノックが止んで、やつとドアを開けるとそこには。ホラーなんか田じやない。まさに惨劇だ。キリサメがなく頃に。〔冗談じやないぜ。〕

「まあ済んでしまった事はどうでもいいじゃない。私も色々と忙しいのよ。という訳で今日はお暇するわね」

言つだけいつて隙間に潜り込む紫。私の文句は聞く気がないようだ。

「やこの可愛いお嬢さんとは、また今度お話をさせてもらひわ。

萃香は私と一緒に来て頂戴。面白にものが見れるわよ。

それでは皆様、御機嫌よう」

萃香の手を強制的に掴んで引きずりこむと、連れ立つて畠山間に消えていく。

「魔理沙さん、胡蝶夢丸ってなんですか？」

私の袖を引っ張る美咲。

「一粒飲んでぐつすり寝ると、最高にハイになれる魔法の薬だぜ。

別に危ないもんじゃないから心配こりないぞ

「やうなんですか。今度良かつたら、私にも飲ませてください」

「ああ、機会があつたらな」

あれは高級品だから難しいかもなとも釘を刺しておぐ。
子供が飲むものではない。

しかし、まずいことになった。

胡蝶夢丸は確かに、良い夢を見れる。
……ただナイトメアはやばいだろ？
試したことなど勿論ないが。

自分から悪夢を見よう、なんて物好きいるわけがない。
製作者の腹黒い性格が良く現れてるぜ。
絶対嫌がらせの為に作つたはずだ。

「しかしまずいな。良い夢を見て、機嫌が良くなつてゐる時に
ちゃんと美味の件の許可を取らうと思つたんだが

思わず腕を組んで唸つてしまつ。
うーむううしたものか。

「小手先の策を弄するからよ。
正攻法でいきなさい、正攻法で。
そのほうが楽よ」

だらけ巫女が何か言つてゐるが気にしない。

「まあちょっと対策を考えるとするか。

美咲、お前にも手伝つてもいいわ。

頑固な母ちゃんを説得するんだ

「きちんとお願いすれば分かってくれます。

母様は優しいですか？」

「やうがやうか。じゃあ怒氣も聞いたし、今日は帰るとかあるか。

困つたらまたここにくるとこよ」

「厄介」とは一切お断りよ。

「後、今度はお土産を持つてくるよ」

転がりながら、手をひらひらとする靈夢。

第十二話 幽香VS幻想郷四天王

・やみのなかにいる

漆黒の暗闇の中。

ワイングラスを片手に、四天王の一人が話し始める。

「ククク。『鬼』の伊吹萃香がやられたようね！」

「アレは我等の中でも最弱。

たかが花妖怪にやられるとは、四天王の面汚しよ」

『歌』を司る妖怪がグラスを指で弾いて鳴らす。

「でも萃香をいれたら5人だよね。

5人なのに四天王っておかしくないかな」

「ルーミア、それは言っちゃダメだよ。

後、意味もなく闇を展開しないで。本当に暗いから。
それとチルノにミスティア。

そのワイングラスとマントは一体何なの？」

リグルが呆れ顔で突っ込みを入れる。

この面子の中では比較的常識を持つ妖怪に入るのでは、
望まなくともその役割は回つてくるのだ。
ルーミアは天然なので、少し荷が重い。

「何つて。魔理沙が最強たるものは常に『いげん』を持ってつていげんつて何か良く分かんないけど」

ミスティアの真似をしてグラスをチンと鳴らし、一気に飲んで空にする。

中身は勿論葡萄ジュースである。

「暗いほうが雰囲気でるでしょ。

リグルは侘び寂びを理解しないと駄目だよ」

お前は理解しているのかと、リグルは反論しそうになるが堪える。

「……まあそれは良いんだけど。それより本当にやるの?

幽香は本当に強くて怖いよ。昔酷い目にあつたんだから」

ブルブル震えだすリグル。

昔のトラウマを思い出してしまつたらしい。

死なない程度に散々痛めつけられ、恐怖を植え付けられたのだ。

「そのために一杯練習したじゃない。『アレ』が決まれば絶対に勝てるよ!」

高らかに宣言するミスティア。

まるで歌声のように辺りに響き渡る。

「そ、そうだよね。私達4人が力を合わせれば敵はないよね!『メンみんな。なんだか嫌な予感がしたけれど、氣のせいだったよ

その声に、無理やり氣力を奮い立たせるリグル。

チルノがもつと元氣ができるようになると、特製マントを被せる。

背中には觸體マークに蓮の花。外の世界では『かぶき者』が着ける由緒あるマークだそうだ。

かぶき者がなんなのかは、チルノは勿論理解していない。

陽が落ち始めてきた空を、チルノ達は思わず見あげる。

7つ星の脇に、赤くピカピカ輝く綺麗な星が見えた。

「みんな空を見てよ！　お星様もあたい達を応援しているよ！
あれがいわゆる勝ち星ってやつね！
もはや勝つたも同然ね！」

チルノが得意気に星を指差す。

おおーと皆が目を輝かせるが、ルーミアだけがなぜか青ざめていた。
ダラダラと脂汗のようなものが流れ始める。

赤い星を見つめたまま、微動だにしない。

不審に思つたリグルが声を掛けようとしたところ、
ゴシップ好きのつるさい天狗がバタバタとやってきた。

「みなさいん準備はいいですか？　幽香さんがこっちに向かって来ていますよ。

機嫌は見る限り最悪ですから、死なない程度に頑張つてくださいね
！」

「まかせなさいよ！　あたいの最強伝説をそこで見届けなさい！」

「期待してますよチルノさん」

親指をビックと上げ、高度を取つて撮影準備に入る天狗の射命丸。

「良い？ みんな。

この勝利が幻想郷中に広まれば、あたい達の『最強の座』がかっこたるものになると、言うわけよ！

絶対に勝つよ！ あたい達の勝利に乾杯！！」

「乾杯！」

4人で視線を交わし合い頷くと、グラスを勢い良く地面に叩きつける。

グラスは粉々に砕け散り、液体が大地へと染み込んでいく。

リグルはそのグラスが、まるで己の運命を暗示しているように思えたが、

敢えて言葉には出さなかつた。

マントを華麗に翻すと、各々が夕闇を切り裂いて飛んでいく。

射命丸は意氣込んで飛び去つていく“3つ”的影を、暫くの間生暖かい視線で見守つていた。

「こんばんは元気な子供達。私は急いでいるのだけど、何か御用か

しら？「

ゆっくりと近づいてきた花の妖怪と相対するチルノ一行。それを一警すると、一見優しそうな顔で微笑み語りかける幽香。

その言葉に、チルノは宣戦布告をもって応える。

「今日でアンタの最強伝説は終わり！」

これからはあたい達みたいな、ナウでヤングの時代が始まるのよ。アンタみたいな枯れたバアさんは用済みよ……」

チルノが腰に手を当て、指をビシツとむける。同時に幽香の額にビシツと青筋が浮かぶ。

「フ、フフフ。良い覚悟ねチルノ。リグル、まさか貴方まで私と鬭うとか言こ出さないでしちゃうね。前調教したことは、まだ覚えているのでしょうか？」

「お、脅かしても怖くないぞ！ 今日は皆がいるからね。あのときの屈辱、今こそ晴らす……」

リグルもマントを翻し、チルノ同様ビシツとポーズを決める。その顔に最早怯えの表情はない。

幽香は愉しげに微笑むと、細い目で一人ずつ品定めを始める。

「あらそう。それじゃあ勝負してあげるから、とつととかかってきなさい。

『不幸な事故』があつても知らないわよ？」

くいっくいっくと手招きする幽香。

「あの風見幽香を打ち倒した、

最強の八田鰻屋台としてこれからは密引きするわ。

私の歌姫伝説はここから始まるの。

さあさあ鳥田にしてあげる！！」

スペルカードを颯爽と取り出し、鳳凰の構えをとるミステイア。チルノは満足そうに頷くと、先程から黙りっぱなしの妖怪に振る。

「ルーミアも何かビシッと言つてやんなさい……つていなーい！？」あ、あれれ、なんで！？

動搖して辺りを見回すが、影も形もない。

「最初からいなかつたわよ。貴方、寝ぼけているの？」

「う、うう。あ、あたいの完璧な作戦が。で、でも大丈夫！ 3人でも勝てるわ！」

リグル、ミステイ！ 幽香にアレを仕掛けるよ！」

「了解！」

「……やれやれ。面倒なことになつたわ。

これもあの隙間婆の仕業かしら

溜息を吐くと、幽香は目を妖しげに光らせる。

同時にチルノ達は打ち合わせどおりに、四方へと散らばった。牽制の弾幕をばら撒きつつ、積み重ねた練習通りに。

3人で乱雑に素早く飛び回り、通常弾をばら撒いて幽香を翻弄する。動きが鈍いのが弱点と、人間の本に書いてあったのだ。

チルノは本が読めないので、リグルに調べてもらつたのだが。とにかく、撃乱戦法こそ最も効果的であると、チルノ達は考えた。案の定、幽香を釘付けにすることに成功する。

ここまででは作戦通り。

ミスティアが夜雀『真夜中のコーラスマスター』を発動させ、視界を遮る。

さらにリグルが蠶符『ナイトバグストーム』で退路を塞ぐ。そして、最後にチルノが大技を炸裂させる。

「喰らえ！ 半径20mぐらい、パーフェクトフリーズ！！」

（これは絶対に避けられない。作戦通り！

この最強合体攻撃に耐えられる妖怪なんているもんか！）

チルノが勝利を確信しつつ、氷の礫をこれでもかと連続で叩き込む。リグルとミスティアも一拍遅れて妖弾を目標に連発する。全妖力を籠めて、出し惜しみなしに打ち続ける。

「これでとどめ！！

チルノが凍符『マイナスK』を宣言する。

巻き添えを避けるために、リグル、ミスティアはすかさず退避行動を取る。

幽香がいたと思われる辺りに、チルノの渾身のスペルが巻き起る。凄まじい破裂音と共に、煙と氷の欠片がキラキラと舞う。

「や、やったの！？」

「か、勝った？　あの風見幽香に勝った？」

リグルが叫ぶ。ミスティアもスペルを解除して、固唾を飲んで見守る。

「あつたまえじゃん。楽勝よ！　あたい達の勝利ね！－！」

チルノが満面の笑みで、仲間達にサインを送る。リグル、ミスティアはしばし呆然としていたが、お互に頷きあうと、顔を綻ばせた。

その顔は、数秒後絶望に染まることになる。

「なかなかやる……と言いたい所だけど。

少しばかり、踏み込みが足りなかつたようね。

残念だけど、全く効いてないわよ」

煙幕と水蒸氣が晴れると、五体満足の風見幽香がいた。いつも持つてゐる日傘を開いて防御したらしい。

チルノは驚愕の表情でそれを見つめる。

「な、ななんで効いてないのよ。傘でガードするなんて、そんなのズルい！」

「ズルい？ 3対1で襲い掛かつてくる方が卑怯じゃないかしら」

「う、ううう。で、でもあたいはどうしても最強に…！」

「手段を選ばずに勝ち取つた称号に、どれだけの意味があるのや。それよりも、まだやるの？ 今度はこちらから攻撃させてもらいうわよ」

傘を置んで、鈍色に光る凶器をチルノ達に向けてくる。リグルとミスティアは完全に戦意を喪失しているようだ。

だが、チルノはまだ諦めきれない。

震える手を押さえて、スペルカードを取り出す。

最後の最後まで諦めない。

それが『最強』というものだ。

幽香はそれを意外そうに見つめる。

たかが妖精、泣き喚いて逃げ出すると予想していたのだ。

面白いといった感じで口元を歪めると、魔力の充填を開始する。

本氣を出すつもりはないが、軽く遊んでやる気になつたのだ。

チルノが覚悟を決めて、スペルを宣言しようとした瞬間、空気の読めない紅白が降りてきた。

「はいはいはいはい。そこまでよ悪戯妖怪ども。こんなものは、弾幕」ひとつとして認められないわ。どうしてもやりたいなら、1対1で仕切り直しなさい」

別にタイマンでなければならないというルールはないが、博麗靈夢的には認められないらしい。

幽香は肩を竦めると、溜めた魔力を霧散させる。

「私はどちらでも構わないわ。
もともとあちらから仕掛けてきた勝負だし。
……それで、先に進んでも良いのかしら。
貴方とも闘うのは面倒なんだけど」

「私だつて面倒なのはお断りよ。
いいからさつさと行きなさい。
丁度良い感じに夜も更けてきたしね。
私は先に神社に帰つてるから」

しつしつと手で追い払う仕草をする靈夢。

「そう。何を企んでるかは、この際聞かないことにするわ。
リグルにミステイア。貴方たちには、じっくりと聞きたいこと
があるの。

今度、『必ず』遊びに行くわね」

リグルとミステイアに般若のよつたな笑みを向ける鬼。その視線を浴びた二人は、抱き合って震え上がっている。

「それとチルノ」

「な、なによ。あたいは別に続けても構わないんだからーあ、あたいはまだ負けてない！」

ファイティングポーズを取つて、威嚇する。

「そういうの、私は嫌いじゃないわ。

今度は娘と遊んであげて頂戴。きっと喜ぶわ。

それじゃあね」

チルノに近づくと、頭をそつと撫でて、先に進んでいく幽香。その余裕の態度に、チルノは思わず涙ぐんでしまう。

「ぐ、悔しいけど、いつか必ず勝つてやるからー！」

「そう、楽しみに待つているわ」

「こちらを振り返る」となく、返事をする幽香。

マントで涙を拭い、震えているリグルとミステイア、笑顔のルーミアの元に向かう。

「……負けちゃったね」

「やつぱり強かつた」

「「ermen、あたいのせいで」

「チルノのせいじゃないよ。

まだまだ訓練が足りなかつたんだよ」

「次頑張ればいいよ。ね」

ルーミアがチルノの肩を叩いて慰める。

いつの間に戻ってきたのかは、誰も突っ込まない。

「……」「」

「うん。今日は宴会だもんね」

「や、元気だしていいのー。」

ミステイアの明るい掛け声と共に、チルノ達は神社日掛けで飛び立つ。

（さあ元気をだして博麗神社に向かおう。

悲しい顔のままじゃ皆に笑われちゃう

私達の伝説はこれからだ！）

チルノ達はようやく登り始めたばかりだ。

この果てしなく遠い、最強への坂道を。

幻想郷四天王（命名チルノ）

・『氷』のチルノ
冷気を操る程度の能力

・『歌』のミスティア・ローレライ
歌で人を狂わす程度の能力

・『蟲』のリグル・ナイトバグ
蟲を操る程度の能力

・『闇』のルーミア
闇を操る程度の能力

・『鬼』の伊吹萃香
密と疎を操る程度の能力
密度を操る程度の能力

第十三話 幽香VS幻想郷四天王（後書き）

チルノの勇気が幻想郷を救うと信じて。

第十四話 Rising Sun Flower

文々。新聞 号外

『幻想郷四天王、暁に散る！ 風見幽香侵攻開始！』

速報だ。危篤状態と思われていた風見幽香氏だが、

地下に潜伏し、密かにクーデターを画策していた模様。私兵を率い、幻想郷の要『博麗神社』へと侵攻を開始した。

いち早く情報を入手した記者は、侵攻ルート上に先回りすることにした。

そこには幻想郷の平和を守る、幻想郷四天王が既に防備を固めていたのだ。

四天王筆頭のチルノ氏に話を聞いた所、「大ちゃんど遊ぶ約束をしているのよ。だから私達は必ず勝つわ！」と、我々を励ます力強い言葉を残してくれた。

それがチルノ氏の最後の言葉となるとは、このときの私は考えもしなかつた。

風見氏との交戦を前に、『鬼』と『闇』の2人が戦線を離脱。既に崩壊しかけていた戦力を率い、

彼らは勇敢に戦つたが、奮戦空しく力尽きた。

噂によると最終防衛線において、残存戦力を結集中のことである。また、人型決戦巫女『博麗靈夢』も投入される予定だ。

記者も幻想郷の一員として、最後の時まで注視して事態を見守りたい。

果たして、幻想郷に光は差すのだろうか。

・魔法の森上空

「…………」

数多の障害を潜り抜け、ようやく目的地に辿り着いた。
チルノ達の所までは、なんとか我慢できただけれども「限界だ。

即刻あの女のハウスを探し出して、ドブ鼠を炙り出してやる。
伝承に残るあの魔女狩のように。

燃え滾る業火に、罪深い白黒を放り込もう。
ついでに辺り一面、綺麗な火の海にしてやる。
面倒だから、今すぐ森ごと焼き払ってやろうか。
火の七日間だ。

クケケケケッ！

いけないわ幽香。そんな短絡的に物事を考えてはいけない。

私の悪い癖よ。

それでは可愛い娘まで、巻き込んでしまうじゃない。

全然エレガントじゃないわ。もつと華麗で優雅にいきましょう。

そう、まずは取り戻してから。

その後に、思うがままに焼き払うとしましょう。

綺麗さっぱり焼畑農法という訳だ。

今日も私は頭が冴えてるわね。自分で自分を褒めてあげたいわ。さあ、早速ダンスパーティーの準備をしましょ。まずは巨大なキャンプファイヤーが必要ね。

松明に着火して、と。

「おいおいおい、松明と怪しげな筒を山程持つて、お前は一体何をしようとしているんだ。ここで花火でもやるのか？」

背後から、小憎らしい声が聞こえてきた。
クルッと、勢い良く首を回転させる。

簾に乗った白黒魔法使いを確認、ターゲットロックオン。
「泥棒猫の霧雨魔理沙、かしら？ よつやく見つけたわ。私の可愛い可愛いあの娘を、どこに連れ去ったの？ 今すぐに答えなさい。答えろ！」

腕を幽鬼の様に魔理沙へ向け、ダラリと垂らす。
傘やら松明やら、爆薬がボロボロ落ちるが、もうどうでも良い。
キャンプファイヤーは血雨が振るので中止だ。これからは死の鬼ごっこよ。

どこまでもどこまでも追跡して、必ず取り戻す。
ギリギリギリと歯軋りする。呼吸が苦しい。
美咲分が足りない。一刻も早く摂取しなければならない。
3日間も引き離されるなんて、有得ない事態よ。

誰のせいだ。田の前にいるこいつだ。

フーっと大きく息を吐き出す。

瘴気のよつなものが、辺りに撒き散らされる。

「こ、怖っ！ 田が逝つちまつてゐるぞ、おい。
それとその物騒な牙を隠せ。
落ち着いて冷静になつて話し合おう。な？」

「 フフ、私は常に冷静よ。冷静なのよ。
魔理沙、殺しはしないけれど、半殺しよ。
泣いても喚いても絶対に許さない。
妖怪を、甘く見てはいけないといつことを、その身に刻み込んでや
る。

クケケケケケケ！」

ケタケタと笑いがとまらない。ああもつすぐの辛抱よ。
腰を落として、飛び掛る態勢に入る。

勢い余つて、喉元に喰いついてしまいそうだ。

「ほ、本当に怖っ！ 誰が見ても泣き出すぞ。
こ、ここはひとまず스타コラサッサだぜ。
あばよとつつかーん！」

筆を反転させ、物凄いスピードで飛び去つて行く魔理沙。

「……フフッ、果たして逃げ切れるかしらね」

森に急降下して、落ちた日傘を拾つ。

そのまま思い切り大地を蹴つて、風を切り裂いて飛び立つ。
普段は動くのが好きではないだけで、別に鈍い訳ではないのだ。

只の魔法使い如きが、妖怪に挑もうなどと一〇〇〇年早い。

前方の黒い影を捉えたまま、全速力で追い続ける。
貴方の魔力が尽きた時が、人生のタイムリミットよ。

・博麗神社上空

神社に逃げ込むとは考えたわね。

と、言いたい所だけど、甘いわよ魔理沙。

且障りな博麗靈夢ともども粉碎してあげるわ。

今日の難易度は「*Chromatic*」なのよ。

絶対にコンティニューは認めない。

障害は、全員叩き潰してやる。

まあ、一応勧告してみるとしよう。

面倒は少ないと越したことは無い。

博麗神社全体に聞こえるように大声を出す。

『霧雨魔理沙。後10秒以内に出てこないと、神社ごと吹き飛ばす。
これは脅しじゃないのよ?』

境内に日傘を向けて、一発だけ強烈な砲撃を叩き込む。凄まじい炸裂音と共に地面が削ぎ取られていく。破片が賽銭箱に当たり、見るも無残な形に。案の定中身は空だった。

「みすぼらしい神社が、更に哀れな様になってしまったわ。実に愉快爽快ね」

口元に手を当てて笑みを漏らしてしまつ。しばらくすると、簾に乗つた白黒魔女が飛び上がってきた。

「いきなり何てことするんだ。後で靈夢の奴が怒り狂うぞ。あんなに馬鹿デカい穴あけちまいやがつて」

警戒しながら一定の距離を取つて、私に相対する魔理沙。私の宝物を抱えるように乗せて。

「貴方こそ娘を乗せて、一体どうこうつもりなの。今すぐにその娘を放しなさい！
そ、それにその格好は　」

魔理沙はどうでも良いのだ。

問題は一緒に簾に乗つている美咲だ。く、黒い魔女服に、とんがり帽子。ななんなんということを。最も恐れていた事態がツー！私の悪夢が、げ、現実に……。

思わず眩暈がして飛行状態を解いてしまう。

あつ。

「お、おい大丈夫か！？」

魔理沙の声で、間一髪持ち直して、何事もなかつたかのよつに元の場所に戻る。

危ない危ない。鬪わずして墜落するとこりだつたわ。

「え、ええ大丈夫よ。何の問題もないわ
そ、それよりも美咲。貴方のその格好は……」

「魔理沙さんから頂いたんです。

この服、似合つてますか？」

似合つている、似合つているがッ！

写真も撮らなければいけないぐらい、似合つている！
だがしかし、その状況は頂けない。実に頂けないわ。
だ、だからあれだけ近づいてはいけないと口を酸っぱくして言つた
のに。

「ぐ、ぐぬぬ」

「おーい」

「どうしたんでしょうか」

「遠い世界に入っちゃつたみたいだぜ」

魔理沙達がヒソヒソ喋つてゐるようだが、私の耳にはまるで入らな

い。

このままではまずい。
非常にまずい。

いざれ語尾に『だぜ』をつけて話し出すに違いないのだ。
そしてカントリー ラードを歌いながら、私の元から旅立つていく結
末。

もう帰れない日々。やがてなら夏の日。

い、嫌よ。まだ間に合ひ。間に合ひはまずだ。
そんな未来は美咲には必要ないのよ。
おしとやかで、健やかに育つてくれれば私はそれで良い。
だから魔女になつたり、弾幕の練習をする必要はまるでない。
そう。闘いを覚える必要など、ない。

私は努めて真剣な表情で一人を見据える。

「美咲、今すぐに一緒に帰るわよ。
良い子だから、じつにいらっしゃい。
怒つたりしないから」

「あの時、美咲の言つた事をもう忘れたのか?
ウチでしつかり勉強してゐんだから、見守つてやれよ。
それが親つてもんだぜ」

口を挟んでくる白黒泥棒猫。

私は殺氣を放つて威嚇する。

「魔理沙、お前は黙つていなさい。

後で、嫌と言つ程じつくりと料理してやるわ」

「申し訳ありません母様。その言つ事は聞けません。
私には私の考えがありますから」

ああ、どうすれば分かってくれるのかしら。
こうなれば、殺しても奪い取るか。うん、そうしよう。
実に分かりやすいしシンプルだ。

牙を剥き出しにして、妖氣を急速に充填をせよとしたところ、
魔理沙が慌てたように提案していく。

「やつこつときは、幻想郷ではいつあるのが決まりだらつへ、

スペルカードを取り出し、美咲に手渡す魔理沙。

「弾幕」で決めるところの?
ふざけたことを

「ふざけてなんかいないぜ。

私達とお前だけの真剣勝負だ。簡単だらつ」

「わ、『私達』? ま、まままままさか」

それは異議ありだ。魔理沙だけにしよう。そうしよう。

「そのまさかだぜ。

今回はハンデ戦だ。私が回避を担当して、攻撃は美咲だ。
経験がお前とでは段違いだから、多少のサポートもするがな」

「で、でもそれは」

私が娘に手を上げるということではないか。
そんなことできないわ。絶対に。

「母様。私はまだ未熟ですけれど、全力でいきます。
手加減は必要ありません」

スペルカードを掲げ、私に向かつて声を上げる娘。

き、聞こえないわ。我が娘が何を言つてゐるか全然分からぬ。

そこへ颯爽と登場するインチキ婆。

「フフッ、合意とみてよろしいかしら?
ジャッジは私がしてあげるわよ。

本当、面白いことになつたわねえ幽香」

「すつこんでろ隙間ババア！！」

「あらあら、ハつ当たりはみつともないわよ。
大妖怪ともあるうものが情けない」

式神まで引き連れて、実に楽しそうに微笑んでゐる。
人の不幸は蜜の味とでも言いたげな面してゐるわ。
本当に忌々しい奴だ。

「い、合意なんてしていないわ。誰がそんなこと」

ダメ、絶対。

「良い大人がグダグダと五月蠅いわねえ。
じゃあ用意はいいかしら？ 始めるわよ」

「ま、待ちなさいッ！！」

数字の映つた謎の隙間を展開し、カウントを勝手に開始する紫。
その後ろには、実に嬉しそうな顔でシャッターを押し捲る天狗の射
命丸。

フラッシュが、眩しい。

ば、馬鹿な。どうしてこいつなったの。

魔理沙 & 美咲の魔女コンビは戦闘体制を既に整えている。
や、やるしかないというの。
どうする。どうするの私。

射命丸文

風を操る程度の能力

第十五話 とある妖魔の破壊光線（マスタースパーク）

月明かりが辺りを照らす中、色彩鮮やかな弾幕が咲き乱れる。なし崩し的に始まつてしまつた弾幕勝負。

魔女コンビは即席とは思えない動きで、軽やかに弾幕を描いていく。ふと地上を見れば、野次馬根性丸出しの馬鹿共が騒いでいる。

妖怪やら宇宙人やらの百鬼夜行が、いつの間にか境内に集まつていたのだ。

神社の主である貧乏巫女はといえば、口をへの字に曲げて、神社の惨状を虚ろな瞳で見つめていた。

「おい、なんで反撃してこない。やる気ないのかお前！」

余所見なんかしやがつて！」

痺れを切らした魔理沙が私に声をかけてきた。

「母様、何故撃ち返してこないんです。私は本気で戦っているのに

苛つきを隠せないといった様子で、私に問い合わせる娘。

このような表情をみるのは初めてなので、少しだけ動搖してしまつ。

「…………」

「母様？」

確かに、この弾幕勝負が始まつてから私は一発も撃ち返していない。
ただの一発もだ。

ここまで間、全て回避に注力していた。

魔理沙の指摘する『やる気』といつのが、戦う気持ちであるならば
それは正解だ。

私は娘と戦う気持ちなど一切持つていない。

わざと被弾して、負けても良いかとも思つていた。

別にこの勝負が何かを変えると言うわけでもないのだから。

私にとつては弾幕ごつこなど、その程度の遊びにすぎない。

ただ、それだけでは無いというのも事実だ。

私は思わず見とれていたのだ。

娘の作り出す弾幕の色彩に。

美咲の放つ弾幕は密度が薄く、当てずっぽうに撃ちまくるだけで、
少しもフレッシャーを掛ける事が出来ていない。

わざとカスらせる余裕が幾らでもある。

またこの3日間で作り上げたと思われる幾つかのスペル。

独創性は認めるが、まるで構成が練られていない。

氣味の悪い、一つ目青リンゴが単純に追尾してくるだけの攻撃だ。
移動速度は魔理沙が担当してるだけあり相当なものだが、どうみて

も美咲が足を引っ張つている。

残念ながら、私を相手に戦うには力不足が過ぎる。

基礎を学んでから3日程度のヒヨツ子が、いくら頑張りつと無理な
ものは無理だ。

勝負になる訳がない。

だがしかし、さっきから、弾幕が酷く掠れて見えるのだ。
弾幕の光が滲んで見える。

この視界を奪う攻撃は、魔法によるものなのだろうか。
それにこの日から流れ落ちる熱い液体。
どうしても止めることができない。

ああ、一体何故なのかしら。

「す、凄い。ら、藍様。あの人泣きながら戦つてます！」

「私にはとても良く気持ちが分かるよ。あれが『親心』といつもの
だよ、橙。

思わず胸が締め付けられるな」

「私も良くわかるわあ。藍つたら最近は全然構つてくれないものね。
とっても寂しいわ」

「まあ、それは置いといて」

「これだもの。昔は素直で可愛い子狐だったのにね
どうしてこうなったのかしら」

「紫様は昔から世話焼きのお節介婆でしたね。
今でも変わりませんが」

「……後で御仕置きよ、藍」

くだらない戯言を隙間達が喋っているが、私の頭には入っていかない。

な、なんという立派な姿なのだろう。

たつた3日見ない間に、これだけの攻撃を放つことが出来るなんて。感極まって、溢れる涙を抑えることが出来ない。

愛する子供が、偉大なる親に立ち向かう泣けるシチュエーション。

こ、こういうのもあるのね。今まで考えたこともなかつたわ。

竜騎将やパスの気持ちが、今ようやく理解できたわ。いや、パスは息子と戦っていないじゃない。落ち着くのよ幽香。

「おい、この親馬鹿妖怪！ 泣いてないで撃ちかえして来い！ 手加減されて勝った所で、嬉しくもなんともないだろ！」

高速移動する筹を制御しながら、通常弾を更にばら撒いてくる。わざと当たつても良いかと一瞬思つたが、すんでのところでグレイズ。

「つづ。貴方の様な小娘には、私の気持ちは理解できないわよ！」

左手から火吹食人花を召還する。

土管から這い出る、配管工殺しに定評のあるアイツだ。掌サイズの、自然に優しい省エネタイプだが。

挨拶代わりに火炎弾の嵐をお見舞いする。

小型だが威力はお墨付きだ。

「おおつと。よつやくやる気になつたか。

美咲、アイツの隙を狙つて大技をぶちかませー！」

ジグザグに籌を巧みに操り、火炎弾を回避する魔理沙。流石にこの程度では落とせないか。

それに、何やら切り札をもつているらしい。

ならば堂々と受け止めてやるつ。

それが親というものだ。

火吹花をポイッと放り投げる。ならばHコ仕様。

「……分かつたわ」

「うん？」

私の小声に、魔理沙が怪訝そうに反応する。

最早戦闘を回避する必要もない。

命のやりとりではない、誰にでも勝つ可能性がある。

それが弾幕ごっこだ。

要は私の気持ちの問題だったというだけの話だ。

だって、今まで手を上げたことが無いんだから仕方がない。それ程までに可愛くて、とても良い子なのだから。

「これ以上、小手先の技を幾ら使っても、私には絶対に届かないわ。だから美咲、今貴方が持っている最高のスペルを使いなさい。わ、私も全力で受け止めてあげるから。……う、ううつ」

嗚咽を堪え涙を拭い、真剣に娘を見詰める。

泣いてはダメよ。私は大人なんだから。

「うなれば、わざと被弾して勝ちを譲るのは止めだ。
もつそのつもりはない。」

とてつもなく高い、ぶ厚い壁となつて娘の前に立ちはだかるべ。
『地獄の壁』となりて、長きにわたり打倒されるべき最強の敵とな
るべ。

それもひとつの愛ではないだらうか。
そしていつか私を乗り越えていくのだ。
実に素晴らしい。

打ち倒されたそのとき、私は晴れやかな笑顔を浮かべているはずだ。

……いけないわ、またいつも妄想が。

そもそも『地獄の壁』ってなによ。

打倒されるべき敵つて。私は魔王か何かなのか。

「魔理沙さん、切り札を使います。母様を打ち倒すには、もうこれ
しかありません」

「よーし、魔力をチャージしろ。この八卦炉に全ての力を回すんだ！
照準は私がつける。お前はタイミングを計つて全力でぶつ放せ！！」

「分かりました」

「ふん、即席コンビなど魔力を溜めるまでも無いわ。
抜き打ちで相手をしてあげましょ。今回は特別よ？」

「そんな余裕こいてて良いのか？」

「醜態晒しても知らないぜ！」

「やれるものならやつてみなさい」

本来なら溜めの際の隙など見逃す訳は無いが、それを邪魔するのは無粋といつもの。

力を抜き、ゆつたりと日傘を構える。そしてミニ八卦炉を構える魔理沙と美咲を焼き付けるよつて見る。

まるで演劇の1シーンの様ではないか。なんという凜々しい姿なのだろうか。後で天狗から写真を全て頂くとしよう。

「チャージ完了です。いきます！」

「来なさい。全てを受け止めてあげる」

「今だ、ふつ放せ！…」

「魔砲『マスタースパーク』…」

おびただしい魔力を帯びて、轟音と共に大出力の砲撃が私目掛けて放たれる。

成程、流石は私の娘だけはある。照準や魔力のコントロールを魔理沙に任せているとはいえ、中々の威力を持つていそうだ。

当たれば、それなりのダメージを受けるだろう。しかし、それでは私には及ばない。

「それは元々私の魔法なのよ。美咲、貴方には言つていなかつたかしらね」

一瞬手加減してしまいそうになるが、それはしてはならないことだ。
手加減して、勝ちを譲られて一体何になる。

魔力を一気に解き放ち、砲撃態勢に入る。

「これが本家のマスタースパークよ。受け取りなさい！」

日傘から、抜き打ちで極白色破壊光線を放つ。

後一步で私に直撃するはずだった、光線を飲み込み押し返す。
魔理沙と美咲の元へと、逆流する極大の魔力光が殺到する。

「あ、ああ」

「美咲、力を振り絞れ！ まだまだこれからだ！」

「は、はい」

魔理沙の掛け声と共に、力を振り絞る娘。
恐らく魔理沙が手助けしているのだろう。
でなければ押し留めることなど出来はしない。
ギリギリの所で、破壊光線の直撃を防いでいる。

「中々粘るわね。そういうのを火事場の馬鹿力といつのかしい」

「ド根性つて言つんだよ！」

「あらそり。じゃあもう一人作り出しちゃおつかしら」

能力を使い、分身を作り出す。

当然ながらトリックなどではなく実体だ。

世間ではドッペルゲンガーとでも言うのだろうか。

最近は余り使つたことが無い。よつて私が使えるといつ事を知るのも少ない。

切り札は先に見せてはいけない。見せるなら更に切り札を持って。そうどこかの妖怪も言つていた。

「ぶ、分身！？」

「な、なんてインチキな！」

「ごめんなさいね？ 人生つて意外に厳しいのよ

分身に魔力を籠めさせ、マスタースパークを発動させる。拮抗を保つていた光線のぶつかり合いに、勢い良く加勢させる。爆音を放ち、懸命に戦つていた魔女達を眩い光が飲み込んでいく。

「これで、終わりね。

地面に倒れ伏している、煤やら埃まみれの美咲と魔理沙の下に降り立つ。

殺傷目的ではないから当然生きている。

が、初めて娘に対し手を上げてしまつたといつ事實が私の胸を締め付ける。

本当にこれで良かったのだろうか。

「なーにしんみりした顔してんのよ。たかが弾幕勝負じゃないの。勝つたり負けたり、勝負は時の運と少しの実力よ」

博麗靈夢がひょいと隣に降り立つ。

慰めにでも来たのだろうか。似合わないことを。

「貴方に、私の気持ちは分からぬわよ」

「別に分かりたくないけど。

とりあえずこいつら神社に運ぶから手伝いなさい。

ウチを壊した件については、後でゆっくり聞かせてもらひから

アンタは娘を背負いなさいと言い、魔理沙をよいしょと背負ひ靈夢。

私はその言葉通り、美咲を抱きかかえる。

顔中泥と汗まみれ、魔女服もボロボロだ。

こんなに小さい体で、とても頑張つた。
本当に良く頑張つたと思う。

「ほりほり、他の連中も早く酒飲ませろつて騒いでるから早く行くわよ。

いつのまにかゾロゾロ集まつてしまつて。まつたく」

「そんな事だから、普通の人間が寄り付かないのよ

「つるさいわね。放つておいて頂戴」

ブイツと横を向いて、空中に浮かび上がる巫女。

さあ私達も行くとしよ。

相も変わらず騒がしい、馬鹿者達の所へ。

特別ゲスト

・ガップリン

1つ目の気持ち悪い青リンゴ。

仲間に加えることができる。

・パックンフラー

魔法によって意思を持つた凶暴な人喰い植物。
火を吐いたり、棘弾を放つたりする。

・地獄の壁

U.S.N陸軍戦車師団特機中隊前線都市防衛部隊特殊小隊第64機動
戦隊

第十六話 祭りの後

・博麗神社 宴会場

「それでは、風見幽香とその娘、風見美咲ちゃんの初弾幕バトル終了を記念して……、

乾杯！！」

「「「乾杯！！！」」

なぜか私達の戦いが、いつの間にか宴会の動機付けにされていた。酒が飲めればここいらはどうでも良いのだ。

乾杯の掛け声と共に、花火が盛大に連発で打ち上がる。夜空に広がるのはスター・マインだ。

河童あたりが用意したのだろうか。風情があつて実に素晴らしい。ナイアガラも好きだけど、ド派手に打ち上げるのは最高だ。

ちなみに、先程乾杯の音頭を取ったのは、八雲紫だ。美味しいところだけもつていくのは相変わらず。グラスを持つ手に思わず力が入る。いつか思い知らせてやるつもりだ。

ムシャクシャしたので、日本酒をグイッと一気飲みしてやった。

「ほりほら幽香。杯が空じや ないか。

娘の日出度い門出の日だというのに、それは頂けないねえ」

酔つ払い鬼がドスドス近づいてきて、瓢箪から私のグラスに酒を注ぎ足す。

額には「ピッキンの痕が、未だに痛々しく残っている。
加減しなかつたから当たり前なのだが。

「……こつの間にこんな宴席を準備したのよ。

私が乗り込んできたときは、こつもと変わらなかつたのに」

「紅魔館のメイドが一瞬で用意してくれたわよ。
便利な能力ねえ。ウチにも一人欲しいわ」

いつの間にか現れた紫が、満面の笑みで隣に腰掛ける。

「紫、アンタが今回の騒動の仕掛け人でわけ?
ここにたどり着くまでに、やたらと妨害されたけれど」

「まあね。ちょっとした異変風味だつたでしょ。
楽しんでいただけたかしら」

「ああ紫はこいつこいつ奴だからねえ。

もつ諦めた方がいいよ。そんな事より、アンタの娘は将来有望だね
え。

そのうち私も色々と特訓してあげるよー。鍛え甲斐があつそつだー。」

「ご機嫌なちびつこ鬼。グビグビと酒をあおつてこる。
それとんでもないことを言い出してきた。」

……鬼の教育。だつちやだのダーリンだの言い出しへ、
ビリビリと雷を放つのだろうか。服装はアレか……。
ちょっと見てみたいかも。

不埒な事を妄想する私の傍に、駆け寄つてくる女。
八雲紫の式、八雲藍である。

「幽香さん。貴方の親心、しかと、しかとこの田で見聞けさせて頂
きました！」

不肖八雲藍、思わず感動してしまいましたよー。」

一升瓶を左手に持つて、既にテキあがつている狐。
隣には化け猫が心配そうに寄り添つている。

まあそれはどうでも良いことで。

顔を近づけてくる馬鹿狐の顔をグイグイと押し出す。

そんなことより私の娘は何処よ。

酒を食らいながら、グルグルと辺りを見回す。

妖精やら宇宙人やら童妖怪に囲まれ、

物珍しさから酒の肴にされ、田を回している美咲を発見する。
いわゆる引っ張りだこという奴だ。

少し気になるのが、人里の教師、上白沢慧音まで何やり語りかけて
いることだ。

なんだか嫌な予感がする。

主に熱血教師ビンビン的な意味で。

あのお節介に関わると、面倒くさいことになるに違いない。

視線を外し、つまみを口に放り投げる。

心配で心配で仕方ないが、今無理やり引っ張るのは大人としては頂けないか。

遠目でチラリと見やり、再び酒を一氣にあおる。

今日はやけに胸に染み入るわ。

「よう。今日は私達の負けだつたな。

最後は本気で戦つてくれて、美咲も感謝してたぞ」

グラスと酒瓶を持つて、私達の輪に加わる魔理沙。顔には絆創膏が貼つてある。

晴れ晴れとした笑みを浮かべて、実に不愉快だ。

「……言いたいことは色々あるけれど、もういいわ。久々に心が躍つたのも確かだし」

ぐいぐい酒を飲み干す。半人半霊の庭師がやつてきて、酒を注ぐ。主人は料理に夢中で、暇をもてあましているらしい。

「それで、一つお願いがあるんだが」

急に改まる魔理沙。

「 何よ」

「 アイツが魔法の勉強をするのを許してやってほしい。」

負けた私達が言えることじゃ ないが。
美咲は真剣なんだ。だから、頼む」

珍しく真剣な顔を浮かべる、白黒魔法使い。

「幽香、認めてあげたらどうかしら？ 濃い頑張ってたじゃない。
泣きたくなるほど、寂しい気持ちはわかるけれど」

紫が茶々を入れてくる。

「べ、別に寂しくなんかないわよ！
ちゅ、ちょっと皿にゴミが入っただけよ！」

「う、こんな早くに娘を嫁に出す」とになるなんて。
ま、まだ心の準備が。

「ち、橙はまだまだお外に出なくていいんだよ？
これからも、いつまでも私の式でいておくれ」

「 もううんです藍様！」

「ああ、橙！」

意味不明なことを喚いて、抱き合つてゐる馬鹿式神達。
なんといつ親馬鹿。見ていて恥ずかしいわ。

「まあこんな風に手遅れになる前に、
少しだけ手綱を緩めてみなつて。もう遅しだけどさ。
子供の成長は早いぞー！私もウカウカしてられないね」

と、どうみても子供にしか見えない萃香がグビグビやっている。その頭を小突いてやつたら、酒が器官に入つたらしく大げさに咽せはじめた。

「ま、魔理沙」

意を決して、白黒魔法使いに声を掛ける。

「な、なんだよ。地獄の底から呻く様な声を出したりして。驚くじゃないか」

「み、美咲を、よ、宣しくしてあげて。

一人前のレディに……うつ、うつうつうつうつ

「う、うわあ。本気泣きだ」

呆れたような萃香の声。

そんなことは知つたことではない。

ブワッと溢れ出す大粒の涙。

こんな晴れの日に泣いてはダメだ。

そ、それでも溢れ出すのを止めることができない。

「お、大袈裟なんだよお前は。たかが夏の間じやないか。

その後は家にちゃんと返すつて。後は自宅から……つて聞いてるか

？」

つまり魔法合宿みたいなもんなんだよと、説明する白黒。

「無駄よ魔理沙。全然耳に入つていないもの。

また騒ぐと面倒だから、酔い潰してしまつてしまつ

私の口に無理やり酒を突っ込んでくる隙間妖怪。
く、苦しい。視界が乱れる。

「な、なんてことするのよー、窒息するじゃなーのー。」

納まりきらなかつた酒が口から、逆流して溢れ出していく。
本当に死ぬかと思つた。

「ハハハ、親馬鹿妖怪も形無しだねえ。

そらそらじつちのちのちも飲んでもらおうかいー！」

瓢箪まで突っ込んでくる馬鹿鬼。

そ、そんなに大きいのを入れたら壊れちゃうわ。

「 つて、本当に死ぬわボケどもがー！」

グイッと萃香と紫の頭を掴んで、シンバルのよつて細てつせつぶつけ合ひ。

ああ良い音が鳴つたわ。

角が刺さつたような鈍い音がするが、私は気にしない。

倒れ伏せる2人を、養豚場の哀れな豚を見るような目で見詰めて、
さらに酒をガブ飲みする。うーん実に美味しい。

「あ、そういえば

「な、なんだよ」

「フフフ、ちよっとね。大事なことを忘れてたわ。
少しだけ席を外すわ。こいつらの後始末宜しく」

「そう。ひとつだけ遺り残したことがあったのだ。
すっかり忘れていた。いけないいけない。」

「酔つて完全に忘れてしまう前に潰しておくことにしましょう。ヒック。」

「フフフ、今日はもうとんでもない写真が一杯とれましたよ。
靈夢さん達のおかげですね！ 感謝感激つて奴ですよ」

愛用のカメラをチェックして、満悦の射命丸文。

「私は特に何もしてないけど、感謝してるなら金一封くれてもいい
のよ」

「それはまた次の機会に。さあ早く帰つて記事にしなければ！
私のペンが暴れまわりたくて、ウズウズしていますよーー！」

「機嫌にペンをクルクル回している天狗。

ペン回しの腕だけは中々のものだ。書くものは全くアレだが。

「あつそ。それじゃあね」

スタスタと、興味なさやつに酒の席に戻つていく紅白巫女。

「ええ、それではまた！！ ジュワッチ！」

勢い良く羽ばたき、華麗に飛んで行こうとする天狗。
その捏造新聞記者の足を、乱暴に捕らえる。

掴んだまま、これでもかという勢いで地面に叩きつけてやる。
顔から地面に、思いつきりダイブ。ダイブトゥアース。

「ククク、ざまあないわね。そのまま死になさい」

更にゲシゲシと背中を踏んづけてやつた。ダウン攻撃つて奴ね。

「ひでぶつ！ だ、誰ですかこんなことをするのは…」

真っ赤になつた鼻を抑えて、こちらを振り返る天狗。
その瞬間、血の氣をなくす。見ていて面白い奴だ。

「こんばんは、」「機嫌な天狗さん？
私はどうとも不愉快だけれど」

「あ、ゆゆゆゆゆ幽香さんじゃないですか！
さつきのバトルは本当に感激しましたよ！
わ、わわ私も思わず貰い泣きしてしまいましたよ！
で、では御用がないなら、私はこれで！」

そそくもと逃げようとする射命丸の肩をグイッと掴む。
力強く、肩に食い込むよつに。

「……貴方の素敵な新聞記事、さつき全部読ませて貰つたのよ。

なかなか、愉快な記事を書くのねえ貴方。

そのお礼をしてなかつたと思って」

「ほ、報道関係者に暴力はいけませんよ！ 落ち着いてくださいー。」

ジタバタと暴れる天狗。往生際の悪い女だ。

「大丈夫よ。別に暴力を振るつたりしないわ。
私は可憐な淑女ですからね。

ただちょっとだけ、貴方にも素敵な夢を見てもらおうと思つて」

先ほど調達した黒丸薬を一瓶丸ごと、天狗の口に「じょじょじょ」と飲ませる。

含ませた後は、頭と顎を押されて、吐き出せないよう拘束する。

「い、今のは胡蝶夢丸ナイトメア！……

あああああ、貴方という人はなんてことを！ い、今すぐ吐き出さなくてはっ！」

這うようにして、水場に駆け込んでいく。
その後姿を、口元を歪めつつ見送る私。

「……ただの征露丸なのに。大袈裟ねえ。
あの臭いで分からぬのかしら。
しばらくお腹の調子が愉快になるぐらうでしょ。」

「これに懲りて暫くは大人しくなると良いわね」

……無理か。

魔理沙に頼んで、今日一晩だけウチに返してもいいことになつた美咲。

これからも、1日1回は必ず私に顔を見せることを条件に、弟子に出すことを渋々認めた。

魔理沙がおふざけではなく、真剣だといふことが分かつたからとうこともある。

そこまで考へてくれるならば、娘にとつても悪いことではあるまい。

と、自分を強引に納得させる。

本当は嫌で嫌で仕方がないのだ。

とにかく、口癖だけにはきつちり日を光らせなればならない。最悪、魔理沙を再教育してお嬢様に仕立てあげてしまうという奥の手もある。

そんなことを考へながら、私は家路に付く。

すっかり疲れ果てて眠り込んでいる娘を背負い、夜空を駆ける。

本当に良く頑張ったと思つ。

私は何故か誇らしげ気持ちになる。

「良く頑張つたわね、美咲。さあお家に帰つましょ。貴方の弾幕、本当に驚かされたわ。本当に」

「……母様、私は」

「ミーヤミーヤと、寝言をつぶやく我が愛娘。

「わあゆつくり眠りなさい。今日は疲れたでしょ。」

「これからどんな風に成長していくのだろう。本当に楽しみで仕方が無い。あの時、」の子の手を取つたときから、毎日驚かされる」とばつかりだ。

まだまだ芽を出したばかりのこの娘が、どんな花を咲かせるのか。私はこれからも見つめ続ける事にしよう。

『文々。新聞 休刊のお知らせ』
大変申し訳ありませんが、都合により暫くの間お休みさせて頂きます。

第一部 完
夏の終わり

午前の修行を終えて、私と美咲ともう一人は太陽の煙に向かっていた。

なんでも幽香が、昼飯を『馳走してくれるらしい。

食費も浮いて助かる私としては、

ホイホイと招きに応じることにしたのだった。

「それにしても変わるもんだなあ。お昼のランチに『招待してくれると』は。

あの時の恐ろしい『幽鬼』と、同一人物とは思えないぜ」

思い出すだけで鳥肌が立ちそうな表情。恐怖がフラッショバックする。

「魔理沙さん、母様と何かあつたんですか？」

怪訝そうに私を覗き見る美咲。

「いやいや、あの弾幕戦の前だけじゃ。本当に恐ろしい目に遭つたんだぜ。今思い出すだけでもゾッとする」

「私、母様が本気で怒つたところ見たことないんです。だから想像できません」

「ああ、子供がみたらアラウマ確定だからな。あんなものは見ないほうが幸せさ」

うん。見たら夢にでること間違いなしだ。
しかも凄まじい悪夢になるだろ？。

それにして、すっかり笄姿が板についてきた。

服装は今日は白い魔女服だ。いわゆる白魔道士つて奴だな。

アリスお手製の、綺麗な細工のついた魔法装束だ。

「その服、中々似合うわね。夜なべして作った甲斐があつたわ」

アリスがふふんと、誇らしそうな表情を浮かべる。

……澄ました顔して、夜なべって、
いつの時代の女だよ。

「というか、なんでアリスも一緒にくるんだ。
美咲、お前が招待したのか？」

「はい。母様にこの服を作つて頂いたと言つたら、
お礼がしたいから一緒に連れてきなさいって」

「そういうこと。別に押しかけるわけじゃないわ。
ちゃんとじい招待頂いたのよ」

上海人形を使って私の頬をツンツンしてくるアリス。

うつとおしい。

人形を掴んで背後に放り投げる。

「へいへい。どうせ私は押しかけ魔法使いですよつと

「何をむくれているの。

貴方があげた魔女服は、黒いから夏には向かないと自分で言つてい
たんじゃないの。

まさか、私に『嫉妬』しているのかしら」

上海人形に美咲の頭を撫でさせている。すっかり妹扱いだな。
おまけに、今聞き捨てなら無い台詞を吐きやがつた。

「SHIRT！ どうしたらそういう発想になるんだ。
私はそんなに心が狭くないぞ」

お古の魔法衣は、前回の戦いでボロボロになつたから、修繕中だ。
別に黒から白になつたからつて嫉妬なんかしない。
自分の教え子が取られたなんて、これっぽっちも思つたりはしてい
ないのだ。

なぜだかイライラするような気もするが、これは気のせいだ。

「両方とも宝物です。だからどちらも大事にします」

「そ、そつか。別に気にすることはないんだぜ」

「本当に良い子ね。今ズギューンと胸に来たわ。
美咲、貴方素晴らしい姉キラーになる素質があるわ
これからは私とも一緒に特訓しましょつね」

一体何を特訓するんだ。

思わず突っ込みそうになるがグッと堪える。

意味不明な事を言つている時の、コイツは放つておくに限る。

下手に関わると、アナザーディメンションで異次元に飛ばされるか
らな。

と、くだらないことをダベリつつ、
そんなこんなで私達は風見幽香邸に到着したのだった。

「母様、ただいま帰りました」

「お帰りなさい、美咲。今日も超素敵よ。
わあ、まずは手を洗つてきなさい」

エプロン姿で出迎える幽香。
悔しいが、似合つている。若奥様的な感じだ。
私のエプロンとは一味違つ。

「はい」

トコトコと手を洗いに奥に進んでいく我が弟子。
その後に続いて、私達も室内に入る。

「お邪魔するぜ。今田はお客様つて奴だな」

「ここにちは。この前の宴会以来かしら。
中々センスの良い造りね」

「2人ともいらっしゃい。それなりに歓迎するわよ。
いつも娘がお世話になつてゐるわね。
ゆっくりしていつて頂戴」

「遠慮なくそいつさせてもらひ」

「貴方は少し遠慮しなさい」

私の軽口に、アリスが突っ込みを入れてくる。

しかしながら、今日は凄いまともな母親だ。
本当に同一人物だろうか。

あの時と比べると、一重人格かと思つぐらいだ。
すっかり『綺麗な幽香』状態だ。

「それで、美咲はどうかしら。
いつも通り、良い子にしてる?」

「何事にも、一生懸命取り組む良い生徒だぜ。
時折、周りが見えなくなるところが珠に瑕だな」

「貴方が言えた台詞じゃないわね」

アリスが茶々を入れてくる。

「ふん、余計なお世話だぜ」

「はいはい。じゃれ合つていないで、席に着いて頂戴。
コーヒーで良いわね?」

淹れたてのコーヒーをそれぞれの席に置いていく。
こいつが中々美味しいんだ。酸味と苦味の絶妙なバランス。
どこで豆を手に入れていることやら。
今度教えてもらひたいとこしょひ。

味わいのある香りを楽しんではいるが、
手洗いを終えた美咲が戻ってきて席に着く。

ふ一つと優雅なひと時を楽しむ私達。
そこに幽香が袋に入つた謎の物体を机にドスンと置く。
疑問符を浮かべる私達に対し、幽香が笑みを浮かべながら話し始め
る。

「実はね、食事をする前にちよつとだけゲームをしてほしいのよ。
魔理沙、貴方に勝負を挑みたいの」

ゲーム？　まさか前のぐらぐらゲームの一件をまだ根にひつている
のか。

噂によると、人形に血がついて全部赤色に染まる程の特訓をしてい
るとか何とか。
天狗の話だから、全く信用ならないが。
だが、こいつならやりかねないとも思つてはいる。

「ほー。まあ余興には良いかもな。それで何をやるんだ。
内容によつては、付き合つてやらないこともないがな」

折角だから付き合つてやろう。
別に何かを賭ける訳でもないしな。
アリスは面白そうに事態を眺めている。
こいつはそういう性格なのだ。

「フフ、ぐらぐらゲームと貴方は思つてはいるでしょ？ けれど、違つ
の。

香霖堂で手に入れた幻の新型遊戯機、これよー！」

ジャーンと勿体ぶつて袋から取り出した、謎の樽。ところどころに隙間のよつたものが空いている。なんだこりや。

「その名も白黒危機一発よ！」

「！」、これは

驚きの表情を浮かべる美咲。

「美咲、貴方知っているの？ この謎のタル型機械」

アリスが声を掛ける。

「はい。本で見たことがあります。
大航海時代の海賊の処刑方をモチーフとし、
危機一髪なのか一発なのか惑わせることに定評があり、
更に人形が飛び出したら負けなのか、勝ちなのかさえ
遊ぶ者によつて違うと言つ闇のゲームです」

棒読みで長文を読み上げる愛弟子。
覚えさせられたのだろうか。

「そつなの。説明口調でありがとつ。

美咲は物知りなのね」

美咲の頭を撫で撫でしているアリス。

なんだか腹が立つな。別に嫉妬ではないが。
幽香の目つきも心なしか細くなつていて
殺意を隠せていない。

「ちひは間違いなく嫉妬だ。

「それで、じいつで遊ぶのか？

人形が飛び出るとかいう話らしいが。
樽に何も入っていないじゃないじゃないか」

「そんなに慌てないで魔理沙。ルールを説明するわ」

「一応聞かせてもらおうか」

「じの剣を交互に樽にブッ刺していくて、人形を飛び出させたほうが負けよ。

どう? とても分かりやすくて簡単でしょ?」

革袋から銀製の小型の剣をバラバラと取り出して机に置く。
日光が反射して鈍く光を放っている。

おもむろに手に取る。

重量感、質感を確かめてみる。

これ、本物か?

「 おい。この剣、オモチャじゃなくて本物じゃないか」

うん、やはり本物だ。

しかも儀式用っぽい細工がしてある。

なにやら呪文のようなものが小さく刻まれている。
何を意味するかまでは解読できない。

「え、そうだったかしら。

まあ細かいことはどうでも良いじゃない。

それで人形はこれを使うわね

袋からヒョイと白黒の人形を取り出し、樽にセットする幽香。口調が非常にわざとらしく白々しい。

しかも、どうみても私を模した人形じゃないか。何考えてるんだコイツ。

「……その人形、何か良くないモノを感じるんだけど。簡単に言うと、恐ろしい負のオーラが出ているわ。今すぐ神社で供養するべき代物よ」

アリスが目を細めて、警告を発する。

私から見ても、禍々しいオーラを感じることができ。美咲も警戒感を露にしている。

誰が見ても、忌まわしいと感じ取れる一品である。

「気のせいじゃないから。まあそんなことは置いておくとして。さつさとはじめましょうよ。豪快にぶつ刺さないと駄目よ。こいつ、グイグイと抉るよつにね」

小型のナイフを手で玩んでいる。

「なあ。まさかとは思うがこのゲーム、黒魔術の一種じゃないよな。ターゲットに、自ら銀剣を刺させる事で発動するタイプの」

そんな魔術は聞いたことは無いが、詰問する。

私の視線に対し、目を逸らす馬鹿親。

間違いない。この馬鹿はやる気だつた。

「…………」

沈黙。

「これはまた次の機会に遊びましょ！」

そつと袋に戻していく幽香。

図星だったとは。恐ろしい女だ。

「おい。何を華麗にスルーしようとしてるんだ。
お前は一体何を考えてるんだ！」

思わず机をたたく私に對し、にこやかに笑いかけてくる。

「ちょっとしたジョークよ。i t - sジョーク。
別に前に負けた仕返しを企んでいたとか、そういうことじゃないの
よ。

ちょっとだけ痛い目に遭わせてやるとか、そんな事考えたことない
もの。

娘を取られたから、ついカツとなつたなんてことは全然ないのよ

簡単に動機を明白する馬鹿親。

「貴方のお母さん、分かりやすいわね」

「……ノーノメントです」

ヒソヒソと話している2名。

私は深いため息を吐く。

「ハア。ため息しかでないんだぜ。

また今度違うゲームで勝負してやるから、もうこんな危険な物を準備したりするな。この大馬鹿！」

席を立ち、樽のはいった袋を奪い取る。
物騒だから、しっかりと処分しないと駄目だな。
どんな効果を発生させるか分かった物じゃない。

「もう、乱暴ね。美咲の教育に良くないわ」

「誰のせいだ！？」

「私のせいじゃないわよ。

香霖堂の主人に、ハラハラドキドキできるゲームはないかと聞いた
ら、

これをオススメされたのよ。

人形は私なりのアレンジよ。良く出来てるでしょう」

「やかましい」

香霖め。とんでもない物を、とんでもない奴に売りつけやがって。

今度しつかり言っておかないとダメだな。

親馬鹿にハサミをもたせるなど。

「白黒人形は私が預かりましょ。ちゃんと御払いすれば、大丈夫よ。人形に罪はないものね」

「凄い妖氣ですね、これ」

「ええ、思わずゾクゾクするわね」

白黒人形をちやつかり回収するアリス。美咲も興味津々で見ている。こいつも碌でもないことに使いそつなので、警戒しておく必要はある。

「と、こんなことをしている場合じゃないわ。もつじ飯の準備はできているのよ。さあ、今仕度するから待っていて頂戴」

今までの事をなかつたことにして、台所にひつこんでいく花妖怪。そのうち又何かやらかしそうだから、気をつけないとダメだな。本当に常識のない妖怪やら魔女ばかりで困る。

出てきたご飯は別に異状はなく、普通に美味しかった。痺れ薬か眠り薬でも入っているかと思ったが杞憂だった。ちなみに野菜のカレーライスだった。美咲の好物の一つだそうだ。今度ウチでも作ってやることにしよう。

霧雨特製キノコカレー。私の得意料理だ。

食後はトランプで4人で遊んだ。

先ほどのように戦うこともなく、非常に和やかな時間だった。なんか家族が出来たみたいで、ちょっとだけ感傷的になってしまった。

アリスに指摘されて言葉に詰まってしまい、死ぬほど恥ずかしい目に遭つた。

きっと顔は真っ赤だつただろう。

気分を晴らすために、『革命』で幽香を嵌めてやつたら色々と台無しになつてしまつた。

一度大貧民に落ちると、勝ち上るのは至難の業。勝負は勝負なので、最後まで幽香を甚振つたところ、危うくリアルファイトに発展するところだった。

また勝負事での恨みを買つてしまつた気もする。

もつ少し素直になつても良かつた気もするが、この方が良いだろう。馬鹿騒ぎしているぐらうの方が私にはお似合いだ。

黒ひげ危機一発

剣を刺していくて飛び出させた人が負け。

紅魔館へようこそ『後ひたすら少女』

・霧雨邸 寝室

シャンプーの香りが漂り、白髪の金色の髪を乾かしながら、現在、泊まりこみ中の美咲に声をかける。

ちなみに美咲は、既にベッドの上で寝る態勢に入っている。パジャマは可愛らしい白地に黒猫柄だ。実に素晴らしいセンス。選んだのはこの私だ。魔女たるもの、形も重要なのだ。私には子供すぎるから着れないけれど。

「明日は、紅魔館に遊びに行こうと思つ。いわゆる課外実習つてやつだな」

「え永遠に幼き紅い月が君臨するといつ、あの紅魔館ですか？」

「ああ、それは自分で名乗つてただけだから、全く気にしないで良いぞ。

なかなか面白い奴らが揃つてて、本も借り放題だ。何より紅茶と菓子は絶品だな」

「……楽しみです」

いつになく目を輝かせている美咲。

感情表現が下手糞なのは相変わらずだが、楽しみなのは間違いないだらつ。

「ただ、ちょっとばかり戦闘もしたりするかもしねない。だから油断しちゃ駄目だぜ。

後、バナナはおやつに入るから持つていって良いぞ

バナナはおやつ。お約束だ。

「わかりました魔理沙さん。

ちやんと、忘れないように持つてきますね

恐らく本当に持つていくれるだろう。

真面目だからな。

「よろしく。それじゃあ明日に備えて寝るとするか

「はー。おやすみなさい、魔理沙さん

灯りを消して、よいしょと一緒にベッドに入る。

だって一人暮らし始めたから仕方が無い。

布団も1個しかないし、サイズもシングルだ。

枕は、家から持ってきたようだ。

どうやら、マイ枕にこだわりがあるらしい。

部屋は魔法道具で温度を調節しているから、寝苦しくはない。

ちょっとばかり面倒な作業が必要だけれども。

一度この快適さを味わったら元には戻れない。

人間っていうのはそういうものだ。

ちなみに、今の私はネグリジェ姿だ。

そろそろ『色気』とやらを出したくなるお年頃なのだ。

以前、猫柄パジャマをアリスに見られたからとか、

そういうことでは決してない。

「うひひひひと船をこじる始める見習い魔女。

美咲の頭を胸に抱えて、私もゆっくりと瞼を閉じる。
なぜだか分からぬけれど、こいつやつていると落ち着く。
こいつと一緒に寝るようになつてから、心地よく眠れる。

これが人肌が恋しいつて奴かな。

……少し違う気もする。

まあ良いか、今日も安らかに快眠を貪るところ。

どんよりとした曇り空。生憎の天氣だが、計画通り遠足は決行だ。
箒を駆り、紅魔館から少し離れた所まで飛ばし、ゆっくりと降下する。

そして紅魔館付近で徒步に切り替え、門番に見つからないように様子を窺う。

「…………」

見た感じ、まだ気づかれてはいないようだ。

しかも居眠りしないで、珍しく真面目に働いているらしい。
やはり今日は正攻法ではなく、秘策を使うことにしよう。
この知力90の霧雨魔理沙に掛かれば、全てが思うがままだ。

後ろに控える美咲にそつと声を掛ける。

「美咲、準備は良いか？

打ち合わせ通り、作戦Aで行くぜ」

ちなみにBは戦略的転進だ。

「はい魔理沙さん。でも上手くいくでしょうか」

眉を顰め、心配そうに私を見つめてくる。

安心させるように、肩に手を置いて元気付ける。

「大丈夫さ。絶対に引っ掛かる。

それに万が一失敗しても、喰われたりしないからドンと行つてこい

「……分かりました。それでは行つてきます」

そうつ言い、トコトコと門番の方に近づいていく黒魔女。

うーむ。どこからどう見ても、完全にお子様魔女だ。
姿形が某危険な花妖怪に瓜二つな所以外は。

完璧すぎるぜ。そのうち杖も持たせてみようか。
ペラペラ喋るタイプのアレだ。

砲撃魔女ならば必須な気がする。

私は要らないけれど。なんかうるをそつだし。

ちなみに今日の美咲の格好は、私が気合で直した正当な黒い魔女服だ。

手直しするのにはかなり苦労したが、その甲斐はあった。

やはり魔女は黒に限る。

白はシスターだよな。そして杖はリライブ。
それが決まりなのだ。

お子様魔女の手には、バスケットと真っ赤なリングゴーが沢山盛られて
いる。

今回は白雪姫的な魔女を演出してみた。
中々に似合っている。

カメラがあれば、幽香にも見せてやれたのに残念だ。
仕方がないから私だけで楽しむとしよう。

「……何か御用かしら、そこのお嬢さん。
ここは悪い吸血鬼が住む怖いお屋敷だよ。
良い子だから、早くお家に帰りなさい」

お姉さんぶつた美鈴が、偉そうに美咲を引き止める。

「お勤め！」苦労様です、綺麗なお姉さん。
良ければ、美味しいリングゴーをお一つどうぞ！」

はいぢうぢ、と真っ赤なリングゴーを手渡す美咲。
実に自然な動作だ。御伽噺通り。

「え、綺麗なお姉さん！ 嬉しい」とを言つてくれるわね。
じゃあ有難く頂くよ、可愛らしいお嬢さん。
さあ、気が済んだらもうお家に帰りなさい！」

リングゴーを受け取ると、優しく頭を撫でて帰るよつて促す門番。

ふふん、まんまと掛かつたな。

「 それでは失礼しますね。また今度持つてきます」

門番に小さく手を振つて、ひちりに戻つてくる美咲。
良くやつた、まさにパーフェクトだ。

「上出来だ。なかなか良かつたぞ美咲」

親指を立てて、仕事を褒める。

「 そりでしょ？ あの人、隙がなくて緊張しました」

「 そりでしょ？ むしろ隙だらけな気がするけどな。
さあ、最後の仕上げだ。起爆スイッチを景気良く、ポチッと押して
みようか」

「はい。ポチッといきますね」

左手で耳を押さえ、右手でボタンを押す仕草を取るお子様魔女。
ボタンは実際には持つていらない。エアーボタンだ。
起爆させること自体には、全く躊躇がないのは親譲りだ。
将来が不安である。

頷くことで合図を送ると、私も両手で耳を押さえる。
対衝撃、閃光防御OK。

第一の爆弾を発動させるんだ！

「それではいきます」

「ポチッ。起爆スイッチが入る。」

瞬間、門の方から凄まじい閃光と爆音が響き渡る。

派手に見えるが、別に殺傷力はないから心配はいらない。多分。光と音を、最大限まで強化した閃光弾みたいなもの。多少火薬も混ぜてはいるが、そんなに強力ではない。いわゆる「ケガ脅しつてやつだ。」

妖怪相手には効果は疑問が残るところはあるが、それでも暫くは行動不能になることは間違いないだろう。合宿中に、2人で協力して作成した一品だ。

そのうち靈夢にも試してみるとしよう。

きっと面白いリアクションを取ってくれるはずだ。

「　さあて。それでは正々堂々と門から入るとしてどうが。行くぞ、美咲！」

「はい」

ピヨピヨとヒヨコが頭を飛び回り、目を回している美鈴を尻目に、私達は堂々と紅魔の門を突破する。

……そういえば、弾幕以外で侵入するのは久々だな。

「　ちょっと待ちなさい。そここの鼠さん達」

屋敷の両開きのドアを開けようと、手を掛けた所で何者かに引き止

められる。

どうやら、小煩いメイド長に見つかってしまったらしい。
爆音に気付いて、時を止めてやって来たのだろう。
相変わらず人間離れした女だ。

「なんだよ咲夜。サボつてないで仕事しつけよ」

「その仕事を、今までに増やしてくれた人達に言われたくないわね」

腕を組んで不機嫌そうに睨んでくる。怖い怖い。

「いめんなさい、咲夜さん」

美咲が頭を下げる謝る。

咲夜とはあの宴会の時に、少しだけ話をしていたらしい。
とても瀟洒な人だったと話していたしな。

レミリアやフランとは話す機会がなかったようだが。

「ふう。貴方も師匠は選ばなきゃダメよ。

このままいけば、本泥棒がもう一匹増えるだけですもの

「いえ。魔理沙さんは悪い人では」

「おいおい泥棒呼ばわりは酷いぜ。私は借りてるだけだ。
死んだらちゃんと返すぞ。死んだらな

死んだら返すのだから問題ない。
これを理解しない輩が多くて困る。
という訳で、しっかりと説明する。

誤解を招いたままなのは、良くないからな。

しかしながら、私の説明は理解されなかつたらしい。
お手上げポーズをとつて、首を横に振るメイド長。

「全く、仕方のない娘ね。付ける薬もないわ。
……ところで美鈴、貴方大丈夫なの?
服が泥や埃まみれだけど」

私達の後ろに視線を向ける咲夜。

振り向くと、そこにはピンピンとした門番の姿が。

「いやー咲夜さん。死ぬかと思いましたよ。
この帽子がなければ即死でしたね。ハハハ」

「…………」

帽子を手で整えて、私達に笑いかけてくる。
流石は妖怪だ。なんともなかつたらしいぜ。
咲夜も目を丸くしているようだ。

「全く、遊びに来たなら最初からそう言ひなさいよ。
あの時、お嬢様も歓迎しているわよ、と伝えたでしょ」
こんな手間のかかることをして「

やれやれと首を振るメイド長。
眉間に深い皺が寄つていて。

普段から苦労しているんだうつ。
主にわがままご主人様の相手に。

私も少しばかり、迷惑をかけているような気もしないこともない。

「本当だよ。いきなり爆破してくれたりして。別にお客様を追い返すような真似はしないよ。追い返すのは招かれざる客人だけだ」

腰に手を当てて、パンパン怒っている美鈴。

一応妖怪なのにあまり怖くない。

怒らせると怖いのは咲夜の方だ。人間なのに。本当に人間なのか怪しいが、聞いたら怒りそうだし。お前は本当に人間ですか？ と。

「じゃあ正式に招待してくれるのか？

今更弾幕で勝負するのも、気分が乗らないしな」

私は別に構わないが、何だか盛り上がらない。どうせやるなら、また門からスタートしなおさなければ。それがここでのお約束だ。

「良いわよ別に。お嬢様のお許しも出しているから。それに今日は、特別な催しもあるらしいのよ。それじゃあ、まずは大図書館から案内しましょっか」

そう言つて、館のドアに手を掛ける瀟洒なメイド長。一々動作が様になつていてる奴だ。

「 ようこそ紅魔館へ。

幻想郷の夜を統べる永遠に紅い幼き月。レミコア・スカーレットが治める、呪われた館へ」

ギイツと嫌な音を立てて、両開きのドアが開かれる。妙な寒気を感じて、両肩を思わず抱きしめる。

なんだろ、この違和感は。

美咲も私の袖をぎゅっと握り締めている。

通いなれた屋敷のはずが、なぜだか今日は違つて見えた。

……気のせいかな。

紅魔館へようこそ　『紅魔館の殺人』

・紅魔館 図書館

「それではパチュリー様。

可愛いお客様と、もう一匹の案内をお願いします。
申し訳ありませんが、私は仕事がありますので」

一礼して退室するメイド長。

本当に忙しい奴だ。

しかも私を鼠呼ばわりしていくとは。
とんでもない話だ。

「……盗んだ本をようやく持ってきたのかと思つたら、
私に接待しろときたわ。居直り強盗も真っ青ね」

冷たい視線をこちらにむけ、早速嫌味が炸裂する。
こいつの嫌味と皮肉を聞いていたら、
一日があつとこいつ間に終わってしまうだらう。

「今日は吸血鬼様に招待された『賓客』なんだぞ。
わあ、せっせとおもてなしして構わないぞ。まあまあ」

偉そうに椅子にふんぞり返つてやる。
パチュリーは溜息を吐いて、こめかみに手を当てている。

恭しく小悪魔が机に紅茶を置いていく。

サービスの行き届いた、漫画喫茶　じゃなくて図書館だな。
だからここには良く通うのだ。

魔術書は一杯あるし、紅茶は美味しい。しかも菓子まで食える。
ついでに暇つぶしになる、動かない大図書館様もいらっしゃる。

「ふう、まあ良いわ。静かにするなら勝手にしていて頂戴。
但し、暴れたりしたら問答無用で叩きだすから。

本を傷つけても同様よ。図書館では静かに。常識よ。

ちなみに貸し出しは受け付けるわ。その他の鼠以外はね」

失礼にも私を指差してくる。

誰が鼠だ。ハハツ。

私は黄色い鼠のほうが好きだな。
黒い方はなんか色々と危険だ。

「本当に凄いですね。本が一杯、というより、まるで迷路みたいで
す。

知識の海に飲み込まれそうです」

驚きの表情を浮かべて、辺りを見渡す美咲。
確かに最初見たときは驚くだろう。

私も驚きのあまり10冊ほど持つて帰つてしまつた程だ。

「……お褒めに預かり光栄ね。

貴方の興味を引くような本が見つかると良いわね

「おい。子供には優しいじゃないか」

「そう?　私は貴方にも優しいわよ。

本人は気づいていないみたいだけれど

「……私は子供じゃない」

「私はそんなこと言つてないけれど。
思い当たる所でもおありなのかしら」

「……」

早速言葉でやりこめられたので、髪をグシャグシャとかき乱す。
こいつのパターンに嵌るのはまずい。

特に、弟子の見ている前で恥をかく訳にはいかない。

「魔理沙さん？」

「あー。折角だから、お言葉に甘えて見て回つたらどうだ。
面白い物が見つかるかもしれないぞ」

「はい。それではいってきます」

興味深々に本の森に飛び込んでいく。実に素直で宜しい。
パチュリーが本から顔を上げて、その後姿を見つめる。

「……あの娘が、風見幽香の？ そつくりというより生き写しね。
娘というよりも、本人をそのまま幼くしたとしか思えないわ。
実に興味深いわね」

眉を少しだけ上げて、何か考える仕草をとるパチュリー。
本の虫が他人興味を抱くとは珍しい。
気になる事もあるのだろうか。

見当外れのことを言つたこともあるが、博識なのは確かだ。

「何か気になることでもあるのか？」

「……いえ。別に何でもないわ」

全然何でもなさうには見えない。

後できつちり聞こ詰めることにしよう。

「やういえば、お前幽香と会つたこともあるのか？」

「のろき籠もり魔女と凶暴な花妖怪に接点があるとは思えないが。

「別に直接会わなくとも、知ることは出来るわ。

情報というのはそういうものよ。

それが正しいか、間違つてゐるのかは自分で判断しなければならなければいけれど。

鵜呑みにするだけなら、お猿さんでも出来るわね」

「まーた」高説が始まつた。しかも止める奴がいなこときたもんだ

「安心しなさい。貴方の場合、馬の耳に念仏という奴よ。私もそんなに暇じゃないの」

「へへへ。今日も相変わらずの、いつも通りだな」
お手上げポーズを取つてやる。やれやれといつやつだ。

また何か言い返してくるかと思つたら、黙つてゐる。

珍しいな、こんなに早く帰れるなんて。
もつ少し言葉のラリーを楽しみたかった所だ。

「いつも通り。いつも通りねえ。

この館に入ったとき、貴方は本当にそう感じたのかしら。

『いつも通りの紅魔館だ』、と

今まで読んでいた本をパタンと閉じ、

意味ありげに視線を合わせてくる七曜の魔女。

「な、なんだよ急に。まあ、確かに少し違和感は感じたけどや」

「それはそうでしょうね。だって今この館には魔法が掛かっているから」

「……何を企んでるんだ？ また異変を起こしたら、今度こそボロボロにされるぞ。

博麗の巫女様は意外と気が短いからな」

また性慾りもなく紅い霧でも発生させるつもりなのだろうか。

「別に幻想郷に対して、私達が何かをしようとしている訳じゃない。
今回の標的は、貴方達だもの」

ニヤリと口元を歪める魔女。

私は望むところだと笑い返してやる。

「標的ね。私達を捕らえて食べるつもりなのか？ 惨い惨い。

だがそう簡単にやられると想つなよ

懐のスペルカードにそっと手を忍ばせる。

「魔理沙さん、戻りました。……どうかしたんですか？」

一通り図書館を見物したらしい美咲も戻つてくれる。
万が一戦闘になつたとしても、ここだけはしつかつ[サツカツ]やれるつ
もりだ。

弟子を守るのが師匠の使命である。

……といふか何かあつたら鬼母が飛んでくるじ。

「ユリィは、貴方達が今日この館に訪れることを、運命で讀んでい
たのよ。

そつしたう、『普通に歓迎するだけでは面白くない』、と言つ出してね。

そこで、ある催し物を思いついたみたいなの

机をトントンと叩くパチュリー。

「催し物ですか？」

「わう。ところで貴方、推理小説は好きかしら」

美咲の方を向いて、質問を投げかける魔女。

「少しだけ読んだことはあります。ホームズとか」

「私はあまり読まないなあ。どちらかといふと直感を信じる方だか
らな。

細かいことを積み重ねて、追い詰めていくのを面白いと感じないんだ」

と、天邪鬼を装い否定してみたが、実は娯楽小説としては大好きだ。全員揃つたところで、偉そうに犯人を指名する。

あのカタルシスときたら最高だ。

欲を言えば、崖の上のシチュエーションが望ましい。

「別に直感でも構わないわ。要は、見破ることができれば良いだけだもの」

「……で、結局何をさせようつて言つんだ。殺人事件でも起こすのか？」

紅魔館殺人事件、メイド長は見たつてタイトルはどうだ。
被害者はスカーレット家の当主様が良いと思つぜ」

紅魔館の殺人。ちょっと面白そつだな。

完全犯罪をたやすく出来る能力持ちがいるから、実にアンフェアだが。

時を止めたり、運命を変えたり、問答無用で全てを破壊する輩がいるのだ。

推理小説どころか、とんでも小説になつてしまつだらう。

「そんな陳腐なタイトルでは、密寄せにもならないわよ。

……貴方ナチ、『フーダニット』つて知つていいかしら？」

「ふーだにつと？ 知らないなあ

「私も聞いたことがありません」

「『誰が犯人なのか』という意味よ。
まだ何も起きていないから、犯人探しと言つには語弊があるけれど
ね」

一旦紅茶を口に含むパチュリー。

「お前が犯人だぜ」

私はビシッと指を突きつけてやる。
パチュリーの顔面付近まで。
非常に嫌な顔をすると、私の手を払いのける。

「人の話は最後まで聞きなさい」

「へいへい」

「まだ何も起きていない。でも、もしかしたら何かが起きるかもし
れない。

今夜はとても素敵な満月が出る筈だから。
……それでは、本題にいきましょう

空になつたカップに、小悪魔が紅茶を注ぐ。
折角なので私もお替りを頂くことにする。
美咲は爪を噛んで何かを考えている。
何かの癖なのだろうか。

「現在、紅魔館には『賤者』が存在する。
どういう意味で賤者なのかはご想像にお任せするわ。
誰がそうなのかは、私達はお互に知らされていない」

淡々とした口調で、説明を再開する魔女。

「そいつを探し出して、当てねば良いのか。簡単じゃないか。大体、仕組んだのは『主人様』だろう?」

「一番疑わしいのは確かね。

貴方の言つ通りよ。レミィは疑わしい」

「…………」

一番疑わしい奴がそのまま『贋者』なんて、そんな単純な事をするだろ?」

……まあ、所詮紛い物は紛い物。良く観察すれば絶対にボロを出す。といふか本物はその間どこにいるんだろ?」

「貴方が先程言つた通り、贋者を見事に当てることができれば勝ちよ。

制限時間は、明日の正午まで。

但し、この館には『疑心を強める魔法』を掛けているわ。

貴方達には、誰も彼もが疑わしく見えるはずよ」

「そんな魔法があるんですか?」

私も聞いたことが無い。『出鱈口』を言つてはいるんじゃないのか。

「さあ。本当にそんな魔法あるのかしら。『ラフかも知れないわ。だつて、私が『贋者』かも知れないもの』

薄ら寒い笑いを浮かべる魔女。

パチュリーが怖く見えたのは初めてかも知れない。

「魔理沙さん。どうしましようか？」

特に表情を変えることなく、問いかけてくる美咲。

「なに、そう深く考へることはないさ。所詮ゲームだしな。怪しそうな奴に、お前がニセモノだ！ って言ってやればいいのさ」

「 先に一つだけ言つておくわね。

貴方達は正真正銘『本物』よ。入れ替わつたりなどしていないわ。……フフ、私の言つことを信じる？ それとも信じたフリをするのかしら」

嫌な事を言つ奴だ。

確かに本を見て回つてゐる間に、美咲がニセモノと入れ替わつた可能性は考えられる。

逆に美咲の側から見れば、私が入れ替わつてゐるという疑いがかけられる。

「魔理沙さんは、本物ですか？」

親譲りの危険な視線を向けてくる。

いわゆる目力という奴が籠つている。

まだまだ子供だといつて、中々のプレッシャーだ。

まあ、これぐらいではまだまだ余裕である。

この幻想郷には化け物がウジャウジャいるから。

「馬鹿だな、本物に決まってるだろ？
さあ、お喋りはここまでだ。

暇を持て余した、化け物たちの余興につきあつてやるとこやつ

まずは適当に館内散策でもするかな。

パチュリーの発言はブラフだろ？

自分の興味のあること以外は、滅多に動かない奴だからな。

「頑張つてねお一人さん。私はここでこつも通り本を読んでいるから。

何かあつたら、尋ねてきても良いわよ」

再び、本を開いて、田を落とすパチュリー。

まだ出題編だからな。こつがニセモノかどうかはおいて置いだ。
一通り、話を聞いて回らないと推理も出来やしない。

さてさて。まずは誰の元に向かつかな。

もう一度咲夜、美鈴と話してみるか。

それともレミリア、フランと会話するか。

一番怪しいのはやっぱりレミリア、咲夜コンビだけだ。

主従で共犯なんてのは一番ありがちなパターンだ。

美鈴あたりは除外して良さそうな気はするが。

……最悪なのは全員がニセモノだつてオチだ。

これは反則である。

後は、ニセモノなんか居ないよ、引っ掛けたな！　的なのもズル
い。

そつこえば、見つけられないとどうなるんだろ？

そこりへんも曖昧だぜ。

念の為に、聞いてみることある。

「なあ。もし、見つけられなかつたらどうなるんだ？」

「……参加料は、貴方達の命よ。

吸血鬼と戯れるような狂人たちには、相応しい末路でしょう」

「ちえつ。勝手に言つてやがれ」

考へても仕方ないな。危なそつなりとつと逃げれば良し。

では、いよいよ例の台詞を叫ぶとするか。
これがないと推理物は始まらない。

竜に点睛を欠いてはいけない。

「美咲、こいつ時には必ず言わなければならぬ、定番の台詞があるんだ。

忘れるな、全てが台無しにならぬほど重要だ」

「そつなんですか？」

「そつなんだぜ。それじゃあいくぜ」

「ホンと咳払いをした後、腰に手をあてて、ポーズを取る。

「IJの事件は私が解く。普通の魔法使い『霧雨魔理沙』の名に掛け
てー。」

「……どJかで聞いたことがあるような

「それは言わない約束だぜ」

「大声をだすなら、外でお願いね。『いのち』のは御免よ」

パチュリーの小馬鹿にしたような視線が私に突き刺さる。
これぐらいでくじけるようななら、魔法使いなどになつてはいない。

「それと、思いついたことがあつたら『よし、分かったー』と言つ
のを忘れるなよ。
とても重要なだからな」

「……本当に重要ななんですか？」

「ああ、とても重要なんだぜー。」

パチュリーの視線が危険度を増してきた為、
私達は静かに図書館を後にした。

フーダニット (Who'dunni t = Who (had) d

one it)

誰が犯人なのか

クローズド・サークル

なんらかの事情で外界とは隔絶された状況下で事件が起こるストーリー。

過去の代表例から「嵐の孤島もの」「吹雪の山荘もの」などとも呼ばれる。

作者が大好きなテンプレ。

紅魔館へようこそ　『紅魔館の殺人』（後書き）

このタイトルの推理小説が読みたいです。
十角館の殺人は有名ですよね。

隔離された館。
繰り返される惨劇。
密室の謎。
あー見てみたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2122v/>

親馬鹿花妖怪

2011年11月24日22時16分発行